

武蔵野大学しあわせ研究所紀要  
Journal of Musashino University Creating Happiness Incubation  
Vol.6, May 2023

【研究資料】

日本の伝統芸能を活用して健康寿命の延伸を推進する可能性を探る（その4）  
—伝統芸能が継承する知恵に基づくオリジナル体操創作における伴奏  
音楽の役割について—

三浦 裕子  
…………… 森田 ゆい  
大室 弘美  
1

How price, quality and risk create customer-perceived value: The moderating  
role of COO label effect

…………… Connie Chang  
18

【研究報告】

持続可能な地域づくりに向けた統合転換を担う人と組織  
—気候変動の緩和と適応、SDGs の推進を中心として—

…………… 白井 信雄  
35

SDGs 意識・行動変容調査

—学習効果によるコンピテンシーの変化—（その3）

…………… 白鳥 和彦  
薄羽 美江  
55

ジャンル準拠指導による英語ライティング指導の高校生への効果

…………… 渡辺 英雄  
池田 達哉  
73

【総説】

子ども理解に保護者の幼少期の経験が及ぼす影響に関する一考察  
—保育場面の読み取りと幼児の心情理解の分析から—

…………… 小川 房子  
石田 由起子  
兼間 和美  
83

幼児期におけるリトミック活動の身体的影響について  
—5歳児の活動を中心に—

|              |     |
|--------------|-----|
| 高牧 恵里        |     |
| ..... 松井 いずみ | 100 |
| 荒金 幸子        |     |

## 【研究資料】

# 日本の伝統芸能を活用して健康寿命の延伸を推進する可能性を探る（その4）

## ——伝統芸能が継承する知恵に基づくオリジナル体操創作における伴奏音楽の役割について——

三浦 裕子

Musashino University Creating Happiness Incubation 研究員

武蔵野大学文学部教授・能楽資料センター長

森田 ゆい

Musashino University Creating Happiness Incubation 客員研究員

東京立正短期大学准教授

特定非営利活動法人日本伝統芸能教育普及協会<むすびの会>事務局長・理事

大室 弘美

Musashino University Creating Happiness Incubation 客員研究員 武蔵野大学客員教授

## 要約

本研究は、「幸せをカタチにする」ための基礎となる心身の健康維持と延伸を目的として、日本の伝統芸能を活用する可能性を追求するものである。2017年4月に開始し、2022年3月までに、伝統芸能ほかの実演家19名にインタビュー調査を実施した。その結果、伝統芸能の技法のうち、とくに「呼吸」と「足裏への刺激」が健康維持と延伸に有効であるという教示を得ることができた。そこで、この技法を用いた体操を創作し提供するのが、一般の人びとの心身の健康維持と延伸に貢献する可能性が大きいという仮説を導いた。

2021年度に、森田ゆいが伝統芸能の技法に基づくオリジナル健康体操（2パターン）を試作した。続いてこの体操に用いる伴奏音楽に何が適当かを検討し、沖縄民謡が最適であろうという結論を得た。そこで、2022年度に、琉球古典音楽演奏家5名による沖縄民謡4曲（のべ10曲）を収録した。

本稿は、琉球古典音楽演奏家による沖縄民謡を収録するに至った経緯とともに、その音楽性などについて報告するものである。

## 1. はじめに

本研究は、「幸せをカタチにする」ための基礎となる心身の健康維持と延伸を目的として、日本の伝統芸能を活用する可能性を追求するものである。2017年4月に開始し、2022年3月までに、伝統芸能の実演家を中心とする19名にインタビュー調査を実施した。その結果、伝統芸能の技法のうち、「呼吸」と「足裏への刺激」が健康維持と延伸に有効であるという意見を聞くことができた。とくに2018年度にインタビュー取材した高齢の実演家4名（そのうち3名が人間国宝、当時）——野村四郎（能楽師。当時82歳）、山本東次郎（能楽師。当時81歳）、西川扇藏（日本舞踊家。当時90歳）、宮城幸子（琉球舞踊家。当時85歳）——の諸氏が異口同音に上記の発言をしていることに注目した<sup>1</sup>。また、2021年度に、能楽の身体性に着目した実演家・演出家の岡本あきら氏から、身体に無理を強くないで、体の声を聞き、出会い直すという考え方を教示された<sup>2</sup>。

そこで、2021年度、森田ゆいが、伝統芸能の技法のうち「呼吸」と「足裏への刺激」に基づくオリジナル健康体操（ゆったりとしたテンポとリズムカルなテンポの2パターン）を試作した<sup>3</sup>。2022年度（2023年3月6日）、この体操に用いる伴奏音楽として琉球古典音楽演奏家5名による沖縄民謡4曲（のべ10曲）を収録した。のべ10曲と記したのは、4曲とも歌入りと歌なしの両バージョンを収録し、そのうちの1曲〈ていんさぐぬ花〉では、歌入り歌なしともスローテンポとアップテンポの2バージョンを収録したからである。

本稿では、なぜ、このようなさまざまなバージョンを収録するに至ったのか、琉球古典音楽演奏家に沖縄民謡の演奏を依頼した理由を含めて、その経緯を報告する。これを通じて、オリジナル健康体操（以下、《体操》とする）に期待できる効果を考察する一助としたい。

---

<sup>1</sup> 森田ゆい、大室弘美、三浦裕子「日本の伝統芸能を活用して健康寿命の延伸を推進する可能性を探る—実演家へのインタビュー調査を通じて—」（『しあわせ研究所紀要』第2号、2019年3月）より

<sup>2</sup> 三浦裕子、森田ゆい、大室弘美「日本の伝統芸能を活用して健康寿命の延伸を推進する可能性を探る（その3）—伝統芸能が継承する知恵に基づくオリジナル体操制作の試み—」（『しあわせ研究所紀要』第5号、2022年3月）より

<sup>3</sup> 前掲（注2）

## 2. 演奏家と演奏曲の紹介

### (1) 演奏家について

琉球古典音楽演奏家は以下の5名である。あわせて、収録時に音響を担当したレコーディング・エンジニアについてもプロフィールを記しておく。

□仲村 逸夫（なかむら・いつお）

琉球古典音楽 歌三線演奏家。琉球古典音楽野村流保存会師範。比嘉康春に師事。沖縄県立芸術大学非常勤講師。沖縄タイムス芸術選賞古典音楽部門奨励賞受賞。沖縄県立芸術大学大学院修士課程修了。

□池間 北斗（いけま・ほくと）

琉球古典音楽 箏曲演奏家。琉球伝統箏曲琉絃会師範。又吉貞子に師事。第24回賢順記念全国箏曲コンクール賢順賞受賞。沖縄タイムス伝統芸能選考会箏曲の部最高賞受賞。第25回日本伝統文化振興財団賞受賞。沖縄県立芸術大学卒業。

□入嵩西 諭（いりたけにし・さとし）

琉球古典音楽 笛演奏家。琉球古典音楽安富祖流師範。大湾清之に師事。沖縄県立芸術大学非常勤講師。琉球新報社琉球古典芸能コンクール笛部門最高賞受賞。沖縄県立芸術大学大学院修士課程修了。

□森田 夏子（もりた・なつこ）

琉球古典音楽 胡弓演奏家。琉球古典音楽野村流保存会師範。又吉真也に師事。沖縄県立芸術大学非常勤講師。沖縄タイムス伝統芸能選考会器楽部門選考員。沖縄タイムス芸術選賞古典音楽部門奨励賞受賞。沖縄県立芸術大学大学院修士課程修了。

□久志 大樹（くし・だいき）

琉球古典音楽 太鼓演奏家。光史流太鼓保存会師範。島袋光史・比嘉聡に師事。沖縄県立芸術大学非常勤講師。沖縄タイムス芸術選賞古典音楽部門奨励賞受賞。

□東江 厚史（あがりえ・あつし）

レコーディング・エンジニア。レコーディング・スタジオ「イガルーサウンドスタジオ」（沖縄市古謝）経営者。

## （2）演奏曲の概要と収録時の演奏スタイル

今回、演奏していただいた4曲はすべて沖縄民謡といわれている。その概要と収録時の演奏スタイルなどについて、以下の項目に纏めた。

- ①分類など
- ②歌詞の特徴
- ③音楽の特徴
- ④収録されたバージョン
- ⑤収録時の楽器編成
- ⑥ゆいレールの車内チャイムの使用駅

### □〈ていんさぐぬ花〉

- ①最も有名な沖縄民謡の一曲。童謡にも分類される。
- ②歌詞は琉歌体（八八八六調）。  
「ていんさぐぬ花」とは鳳仙花のことで、かつて、赤色の鳳仙花の花を擦って爪を染めたという。赤色に魔除けの意味も見出していたと考えられる。
- ③4分の4拍子。琉球音階に沿った音の動きが認められるが、ときに琉球音階にはない核音の長二度上の音が経過音のように現れる。
- ④歌入り・歌なしそれぞれのバージョンに、スローテンポとアップテンポの両様を収録
- ⑤ [歌入りのスローテンポ] = 歌三線・箏・笛・胡弓  
[歌入りのアップテンポ] = 歌三線・箏・笛・胡弓・太鼓  
[歌なしのスローテンポ] = 三線<sup>4</sup>（メロディ担当）・箏・笛（一部、メロディ担当）・胡弓（メロディ担当）  
[歌なしのアップテンポ] = 三線（メロディ担当）・箏・笛（メロディ担当）・胡弓（メロディ担当）・太鼓
- ⑥県庁前駅

---

<sup>4</sup> 三線は本来、歌いながら演奏することから「歌三線」とも言うが、今回の収録では歌を伴わず三線だけを演奏する場合があります、本稿ではそれを「三線」と記すこととする。

□ 〈月<sup>かい</sup>ぬ美しゃ〉

①八重山民謡

②本来は八重山地方の方言で歌われるが、今回は沖縄本島の言葉で歌われた（歌三線の仲村逸夫先生が本島出身なので）。

③4分の4拍子。ヨナ抜き長音階に沿った音の動きが認められるが、転調した際に、ヨナ抜き長音階にはない導音的な音が聞かれ、それが効果的に響いている。

④歌入り・歌なしのバージョンを収録

⑤〔歌入り〕＝歌三線・箏・笛・胡弓・太鼓

〔歌なし〕＝三線（メロディ担当）・箏・笛（メロディ担当）・太鼓

⑥古島駅

□ 〈赤<sup>あかたすんどうち</sup>田首里殿内〉

①那覇市首里赤田の石川家を中心に行われてきた祭礼「弥勒<sup>みるくうんけー</sup>御迎」で歌われていた民謡<sup>5</sup>。童謡にも分類される。

②囃子詞「シーヤープー」「ミーミンメー」「ヒージントー」「イーユーミー」の意味には諸説あるが、それぞれのところで「頬を膨らませて首を横に振る」「両手で両耳を引っ張って左右に振る」「肘を左右交互に手で叩く」「指で手のひらを突く」という所作を行うことがある<sup>6</sup>。

③4分の4拍子。今回の演奏では、囃子詞が歌われる直前に4分の2拍子が出てくる。琉球音階に沿った音の動きが認められ、ときに琉球音階にはない核音の長二度上の音が経過音のように聞かれる。

④歌入り・歌なしのバージョンを収録

⑤〔歌入り〕＝歌三線・箏・胡弓・笛・太鼓

〔歌なし〕＝三線（メロディ担当）・箏・笛（メロディ担当）・胡弓（メロディ担当）・太鼓

⑥首里駅

□ 安<sup>あさどうや</sup>里屋ゆんた

①最も有名な沖縄民謡の一曲。「ゆんた」とは八重山で歌い継がれてきた労働歌

<sup>5</sup> HP「沖縄の風景」（閲覧：2023年） <http://coralway.jugem.jp/?eid=1180>

<sup>6</sup> 前掲（注5）

のことを言う<sup>7</sup>。

②歌詞の最初が「さー君は野中の」と「さー安里屋ぬ」と二通りあり、厳密には前者を〈新安里屋ゆんた〉、後者を〈安里屋ゆんた〉と称するが、前者を〈安里屋ゆんた〉とすることもあるようである<sup>8</sup>。事実、今回の収録でも、演奏者は〈安里屋ゆんた〉としつつも、前者の歌詞が歌われていた。

③4分の4拍子。第4と第7の音がまったく現れない、完全な形でのヨナ抜き長音階。

④歌入り・歌なしのバージョンを収録

⑤〔歌入り〕＝歌三線・箏・笛・胡弓・太鼓

〔歌なし〕＝三線（メロディ担当）・箏・笛（メロディ担当）・胡弓（メロディ担当）・太鼓

⑥安里駅

### （3）選曲の理由

前述したように、《体操》は健康寿命の延伸に大きな目的があり、それにはⅠ持続性（いつでも、どこでもできる）、Ⅱ汎用性（だれでもできる）ことが重要と考えられる。伴奏音楽はこのⅠとⅡの可能性を高める役割を果たすことが期待され、その観点から以下の条件を抽出した。

A 「また聞きたい」と思わせる魅力を持っていること

B 聞くことに過度な負担がかからない演奏時間（3～5分程度）であること

C あまり緊張せずに聞くことができること

日本の伝統音楽にはさまざまなジャンルがあるが、洗練された様式や独自の主張を持つものが多く、《体操》に合わせた伴奏音楽に徹するには難しい状態であるものが少なくない。もちろん、A「また聞きたい」と思わせる芸術性を備えてはいるが、たとえば、B「3分程度の演奏時間」に省略することができないなど、《体操》のための演奏を依頼することが不可能な場合がある。また、聞き手も鑑賞することに集中しなければならず、C「あまり緊張せずに聞く」ことができない場合もある。加えて、それぞれのジャンルによって事情が異なるとはいえ、

---

<sup>7</sup> 漆畑文彦『はじめての三線—沖縄・宮古・八重山の民謡を弾く』（晩聲社、2003年）

<sup>8</sup> 前掲（注7）

権利関係の処理が複雑な場合が想定される。

以上のことを検討した結果、A・B・Cの条件を満たす音楽として、沖縄民謡が適当であろうという結論を得た。これには宮城幸子氏<sup>9</sup>の「（琉球古典音楽などの）音楽によって癒し効果や楽しい気分になる効果」がある、という意見を参考にした<sup>10</sup>。また、沖縄民謡はいろいろな立場の演奏家が手がけているが、琉球古典音楽演奏家に演奏してもらうのが最適と考えた。というのは、高い芸術性を備えた琉球古典音楽の技法を用いた演奏が期待できることと、琉球舞踊・組踊の地方（地謡）という、一種の伴奏音楽をつとめることに慣れているからである。幸いにも沖縄古典音楽演奏家である仲村逸夫氏の知遇を得、森田が氏と事前に綿密な打ち合わせを行い、レコーディング案を提示した（[資料]参照）。収録当日はこれに沿った演奏となった。

宮城氏の指摘する「癒し効果や楽しい気分になる効果」をもたらす音楽は、沖縄の人びとはもちろん、本土の人間にとっても馴染のある曲がよいのではないかと考え、本土でも知られている〈ていんさぐぬ花〉と〈月の美しや〉を依頼した。残りの2曲は仲村氏が選んでくださったが、同様の考えに基づくものであった。

ちなみに、前述した「（2）演奏曲の概要と収録時の演奏スタイル」の⑥にゆいレールの車内チャイムの情報を記している。ゆいレールは那覇空港駅から首里駅までを結ぶ沖縄都市モノレール線で、2003年の開通（現在は、てだこ浦西駅まで延長）<sup>11</sup>。那覇空港駅から首里駅まで15駅あり、それぞれの駅に車内チャイムが用意されている。今回、選曲された4曲はこの15駅のどこかで使われているもので、それだけポピュラーな音楽であることがわかるのである<sup>12</sup>。

### 3. まとめ—今後の展望をかねて

今回の演奏では4曲とも歌入り歌なしのバージョンをお願いした。歌の有無で《体操》の効果に違いが出てくるのか、検討に値する事項と思われるからであ

---

<sup>9</sup> 取材後、2017年に「琉球舞踊立方」として重要無形文化財各個認定保持者（いわゆる人間国宝）になられた。

<sup>10</sup> 前掲（注1）

<sup>11</sup> HP「ゆいレール」（閲覧：2023年）<https://www.yui-rail.co.jp/>

<sup>12</sup> HP「ゆいレール 車内チャイム・駅メロディ全集（2022年4月版）」（閲覧：2023年）<https://www.youtube.com/watch?v=m7vEJA3fSOM&t=5s>

〔資料〕 2023 年 3 月 6 日レコーディング案

作成、森田ゆい

## 1 〈ていんさぐぬ花〉（思い切りゆっくり）

座 肩まわり、首まわりをさすりながら動かしほぐす  
 反対側の手を鎖骨に置き、肩を上げ下げ、回す  
 肩甲骨を意識しながら肩を回す  
 反対側の手を鎖骨に置き、首を倒す、回す  
 反対側の手を耳に置き、首を倒す、回す  
 両手を真上にあげて引き上げ、下げる など

## 2 〈月の美しゅ〉（ゆったりと）ゆっくり

座・立（その場） 足裏への刺激  
 足指を締め、広げ（左、右、左、右／右左、左右 等）  
 床を足裏でこする（片足ずつ）  
 踵で押す、母指球で押す、小指下で押す など  
 片足ずつの刺激→両足の刺激

## 3 〈赤田首里殿内〉（軽やかに）テンポアップ

立（その場） 足裏を意識しながら重心を左右にかけて立つ  
 体側を伸ばす  
 片足立ち、床を押す  
 ひじんとなど身体の部位を指す  
 膝の曲げ伸ばしなど 床を意識しながら

## 4 〈安里ゆんた〉（賑やかに）テンポアップ

立（移動あり） ステップ・クロス・キック・ラン・ランジ など  
 膝上げ  
 膝上げに肘クロス  
 ステップに腕を突き上げる  
 キック、ラン、ランジ など

## 5 〈ていんさぐぬ花〉（テンポアップ）

座 様々な部位をさすりながら呼吸を長くする  
 4 カウントで息を吸って、4 カウント吐く  
 8 カウント吐く、16 カウントで吐く（好きに吸う） など

る。また、メロディを知っているか知らないか、さらにそれを担当する楽器および音色の違いによっても効果に違いが生じる可能性があるのではないかと考えた。今後は沖縄と本土の両地で丁寧な調査を重ねて、上記のことを明らかにしていきたいと思っている。

## 付 記

本稿は2022年度しあわせ研究所の助成を受けた研究「幸せをカタチにするための基礎となる心身の健康の維持・増進に関する研究—伝統芸能の活用および健康教育の普及—」で得られた成果を発表するものである。

インタビュー調査にご協力くださった加藤勲・小川桂一郎・仲村逸夫の諸先生方、ならびにしあわせ研究所に感謝いたします。ことに仲村先生のご発言は、沖縄の民謡および古典音楽に関する貴重なご教示と思われ、Appendixとしてその記録を本稿に掲載させていただきました。心より御礼を申し上げます。

なお、本研究を行なった森田ゆい、大室弘美および三浦裕子には、申告すべき利益相反はありません。

〔報告〕 仲村逸夫先生へのインタビュー取材の記録

聞き手：森田 ゆい

三浦 裕子

日 時：2023 年 3 月 6 日午後

場 所：イガルーサウンドスタジオ

□演奏してくださった沖縄民謡 4 曲について

——今日は「オリジナル健康体操」（以下、《体操》とする）のために沖縄民謡 4 曲を演奏してくださいました。そのうち〈ていんさぐぬ花〉〈月の美<sup>かい</sup>しゃ〉はこちらでリクエストした曲です。この 2 曲をご承諾くださった理由と、残りの 2 曲を選ばれた理由をお教えいただけますでしょうか。

仲村 比較的有名である曲を選びました。健康維持・増進のための《体操》なので、若い方もご年配の方もできるようなものかと思いました。だとすると、その音楽は、ポピュラーなもの、耳馴染のあるもの、メロディアスで覚えやすいものがよいと思い、その基準でチョイスしました。

沖縄の音楽は 4 分の 4 拍子で進まない曲が多いのですが、童歌と言われる〈赤<sup>あか</sup>田<sup>た</sup>首<sup>す</sup>里<sup>ん</sup>殿<sup>どうんち</sup>内〉や〈ていんさぐぬ花〉を中心に、テンポの数えやすい 4 分の 4 拍子で進んでいく曲をチョイスしています。このほうが、《体操》に合わせやすいと思いましたので。

——今日の演奏曲は全曲、民謡と言っていいのでしょうか。

仲村 〈月の美しゃ〉は八重山民謡になります。

〈赤田首里殿内〉〈ていんさぐぬ花〉は民謡と言ったり童歌と言ったりしますが、民謡でいいかな、と思います。

〈安<sup>あさ</sup>里<sup>さ</sup>屋<sup>どうや</sup>ゆんた〉も民謡です。もともと〈安里屋ゆんた〉は八重山の曲なのですが、今回演奏しているのは八重山の古い〈安里屋ゆんた〉を沖縄本島バージョンのようにして演奏しています。どちらかというところと新しく編曲された〈安里屋ゆんた〉ですね。

——八重山の曲は歌詞も違うと教えてくださいましたが、先生は八重山の歌詞で歌われることもあるのですか。

**仲村** できないことはないのですが、どうしても偽物っぽくなってしまうのですよ。沖縄本島の歌、八重山の歌、宮古の歌はそれぞれ言葉が違います。たとえば、本土の方が沖縄の歌三線を最初にお勉強されるとき、その雰囲気が出るまでに時間が掛かるのと一緒に、僕らが八重山の歌詞を歌ってしまうと、ちょっと偽物感が出るので、今回は沖縄の歌詞で歌わせていただきました。

——本物に対する遠慮、ということですね。でも、歌わないこともないのではないのでしょうか。

**仲村** ないこともないですが、その機会は少ないです。たとえば沖縄の琉球舞踊・創作舞踊なんかに八重山の曲を使ったものがあったりするので、そういったときは、基本的には沖縄式というか、沖縄ふうの歌い方でやっています。どうしても八重山の歌は八重山の方が歌わないとその匂いが出ませんね。

——発声で心がけていることがありますか。

**仲村** 基本的には、本土の伝統芸能も全部一緒だと思いますが、お腹や丹田を意識した発声、深い呼吸、胸式ではなくて腹式でたくさん息を吸って、それを丹田に力を入れながら声を発することを教わっております。

——今日の楽曲の編曲ですが、これはオーソドックスなものでしょうか。

**仲村** そうですね。でも、もちろんもっと奇抜なこともできます。たとえば、洋楽のような和音を使って演奏することもあります。今回はあえてオーソドックスにやらせていただこうと思いました。趣旨からして伝統的な奏法のほうがいいかなと思い、ユニゾンに近い演奏の方法でさせていただきました。

——《体操》をしている方にも「これが沖縄の音楽なのだな」というのを知っていただきたいので、オーソドックスな奏法がよいと思いました。

**仲村** 森田先生からお声を掛けていただいたときに、小編成でも構わないと言われたのですが、せっかく沖縄の音楽を取り上げていただくのであれば、なるべく高いクオリティーで全楽器が入るほうがいいと思いました。

《体操》を通じて沖縄の音楽をいろいろな人に聞いていただける機会になると思うと、沖縄の音楽は華やかでいいね、と思っていただきたくて、5人編成に

しました。

——小編成でも、と申し上げたのは、予算の関係からですが、こちらの趣旨をご理解くださり、また、ご協力くださったことに感謝します。

この音楽を聞いたら、《体操》しようと思わなくても、気分よく自然と体を動かしたくなる感じになると思います。また、《体操》するにしても、完璧に動かなくても部分的に体をさすとかだけでも、すごくいい効果が出ると思います。こういう音源はなかなかないと思いました。

大学のオープン・キャンパスで高校生向けの模擬授業をやったときに、この《体操》の構想があったので、沖縄の音楽を探して、それを伴奏音楽にして、無理やり《体操》をしてみました。とても難しかったです。こんなふうに《体操》のための条件が揃っていませんでしたので。

**仲村** 森田先生からお話をいただいたとき、たとえば、テンポのご指定がありました。そのご指定のテンポが、その曲のいつものテンポよりは速かったり遅かったりする部分があります。いわゆるオーダーメイドの演奏ですから、本当に動きに合わせた音作りができたのだと思います。ご活用ください。

——「いつものテンポと違う」という例をあげると、最後にアップテンポのバージョンで〈ていんさぐぬ花〉を演奏していただきました。聞いていてとても楽しかったのですが、演奏された方は大変だったのではないのでしょうか。

**仲村** そうですね。でも気心知れたメンバーでしたので、「このテンポで演奏してほしい」とお願いしたら、快く応じてくれました。「いや、こんなテンポでは演奏したことがない」と言われてしまう場合があるかもしれませんが、今回のメンバーが皆さん、気持ちよく引き受けてくれてよかったです。

#### □師匠について

——先生のお声には少し濁りがあって、それがとても素晴らしいと思います。このような発声法は師匠から教わるのでしょうか。

**仲村** 基本的に正しい伝承法は人それぞれだと思います。私の場合、いかに師匠に似せるかが、伝統芸能の難しいところでもあり魅力でもあるのかな、と思っています。ですので、自分の個性というより、先生の芸、先生の声に近づけていくことに努めています。ある程度の年齢を重ねると、限界が出てくる、要するに似せられないところが出てくるので、そこからがその人の芸になっていくと師匠

からも言われました。沖縄県立芸大時代や若い頃はどれだけ先生に近づけるかを目標に、発声や歌い方をして、今のような声になったということでしょうか。

——先生はどなたですか。

**仲村** 比嘉康春先生です。県立芸大の教授をされ、学長もつとめられました。

——演奏家の方たちのなかには事務的でない方もいますが、仲村先生は違いますね。

**仲村** 私の場合は師匠が一般企業出身ということもあって、事務的な書類や対外的なことにもすごく完璧な方なので、師匠の背中を見てきたというか、なるべく私もそうありたいと意識しています。本当にいい師匠についたと思います。

——お小さいときから比嘉先生につかれていたのですか。

**仲村** じつはそうではありません。私の父が三線を弾いていて、母が踊りをやっていた。ただ、沖縄は本土の伝統芸能と違って世襲ではないところがあって、私も最初は父の影響で三線を始めて、沖縄県立芸大に入るのですが、そこで比嘉先生に出会って、いろいろと刺激を受けました。今後この道でやっていくのであれば、比嘉先生のところに行ったほうがいいのかということになりました。

——理想的な展開だったのではないのでしょうか。

**仲村** 父は要するに町の先生・村の先生で、舞台の一線で活動している人ではないので、今後、舞台でやっていくには、父の手には負えないというか、比嘉先生のところに行ったほうが良いとなって、理解を示してくれましたし、また比嘉先生も受け入れてくださいました。

——教員一般の話として、よい弟子がほしいということがありますね。

**仲村** 「弟子は師匠を選べない」という言葉があります。稽古を始めた頃は右も左もわからなくて、近くにいる人に習って、でも年を重ねていくと、あの先生のほうがよい、などといろいろと見えてきます。でも、逆も然りで、比嘉先生は、「師匠も弟子を選べない」とおっしゃっていました。図らずも私はよい巡り合わせがあって、師匠に引き取っていただいたので、よかったですね、本当に。

——先生の場合は、お父様が比嘉先生のところに行ったらどうか、と言ってくださったのですね。

**仲村** 親子ですので、芸大に入ったときからそういった話をいろいろしていました。ただ私が比嘉先生に弟子入りをお願いしたときに、最初、先生から断られてしまいました。お父さんに不義理になるので、ちゃんと道筋を通してください、ということでした。要するに芸大の先生がその学生を弟子として搾取しているような形になってしまうのはよくない、というのが理由でした。ですので、学生の間は親父の弟子ということでさせてもらいました。大学院を修了してから、正式に弟子入りをお受けいただきました。普通だったらおいでおいでと、自分の弟子を増やしてもおかしくないところを、先生は筋を通しなさい、とおっしゃったので、人間的にも尊敬できる師匠に巡り合うことができました。

——伝統芸能に限らず、どのようなジャンルでも、いい先生に出会えるかどうか重要です。

**仲村** そうなんです。師匠に恵まれることも大切だと思いますね。先生から、自分たちが十年、十五年掛かったものを君たちはほんの数年で持っていくんだよな、と言われたことがあります。それは本当に先生方が惜しげもなく教えてくださるからなんです。

#### □歌三線の演奏法

——先生のお声はとても素晴らしいのですが、《体操》の邪魔にならないような配慮も感じられます。踊りに合わせて歌う習慣があるからでしょうか。

**仲村** それはあるかもしれません。とくに我々<sup>じかた</sup>地方（<sup>じうてい</sup>地謡とも呼ばれる、舞踊の伴奏をつとめる演奏者）は舞踊の音楽や組踊の劇中音楽の仕事をずっとやっているんで、民謡のアーティストの方たちが舞踊の地方をするのとは少し違うのだと思います。ジャンルが違うというのが適当かもしれません。

——それが本当に心地よいというか、《体操》する自分を主役にしてくれる音楽のように感じます。

**仲村** とくに意識はしていませんが、やはり、地方をずっとやってきているからかもしれません。

——ということは、今日は、《体操》する人を引き立たせようという意識で歌っていたわけではないのですね。

**仲村** ではありません。もしかしたら、私たちの芸そのものがそうなのかもしれません。古典音楽演奏家は比較的こういった歌い方をする方が多いかな、と思います。

——古典音楽の場合、箏曲や胡弓の方たちは歌三線に遠慮していると聞きました。今日はいかがだったのでしょうか。

**仲村** たとえば琉球舞踊や組踊音楽のなかでは、やはり歌三線が主役で、その他の楽器、つまり箏曲や胡弓は伴奏という立場なんですね。ですが、今日のように楽器が主になる場面も最近は多く、それだけの技術を持ち合わせている若い世代も増えてきているのもあって、楽器だけでこのような演奏もできると思います。

——沖縄の三線のことを歌三線と言いますが、それは歌と三線が一体になっているからと、以前にご説明くださいました。今日は先生が歌を歌わず三線だけを演奏する場面がありました。これもこちらがお願いしたことでしたが、いかがでしたでしょうか。

**仲村** これはもちろん、伝統的奏法としてはあまりありませんが、先ほど申し上げたように、実力ある若手のメンバーが育っているので、こういうことができたのだと思います。

——先生ご自身はやりにくいと感じられたのでしょうか。

**仲村** やりにくかったです。やはり歌三線が沖縄の伝統音楽の中心なんでね。でも今回は、私が歌を歌うかわりに笛や胡弓が歌うようにメロディを演奏してくれて、私がそれに寄り添っていく形になりました。いつも主役をつとめていたのが、伴奏に回るという感覚になったので、ピッチに対して少しシビアになりました。収録後、少し音を上げる、または下げて修正しようとしたのは、歌いながら三線を弾く場合だとそこまで気にしないものが、伴奏という立場になるとピッチが気になったりするんです。いつもとは少し違う感覚になります。

——途中で何回か採り直しされていたのは、そういう理由からなのですね。

**仲村** そうですね。歌三線では歌がメインとなります。歌を歌っていると、三線

に何かあっても歌のほうに気が向いているので、通常ですと、そこまでピッチにシビアになったりすることはあまりありません。おろそかにしているわけではないのですが…。でも、楽器だけを演奏して、それを聞くと、ピッチが甘いなあ、ということが出て来たりします。

——歌三線の奏者が音楽的にも対外的にも代表的な役割を果たすのでしょうか。

**仲村** 音楽に関してはだいたい歌三線の人が他のメンバーを手配することになりますね。また、<sup>たちかた</sup>立方がいらっしゃる場合は、その先生が音楽はこの方で、という指定をされると思います。また、指定された音楽の先生が、では器楽は誰、と言われる形になっています。

——今回の歌なしの収録では、メロディを担当する楽器が基本的に三線、それに笛と胡弓が加わる、というようにバラエティーに富んでいたのも、それも素晴らしいと思いました。と同時に、《体操》をされる方にとって、どの楽器が自分に一番合っているか、その調査をする意味もあると思いました。

□その他

——以前、仲村先生が自分のお弟子に稽古をつける時間が取れないと言われていました。

**仲村** そうなんです、現在の沖縄芸能界が抱えている問題です。演奏活動だけやっている人が少ないので、どうしても夜型というか、舞台のためのお稽古を夜にやって、そうすると、普通の一般の人たちも日昼は仕事をして、習い事をするんだったら夜になってくる。片や舞台によく立つ人たちは夜に舞台の稽古をするので、弟子を取る時間がなくなります。平日の夜に舞台のための稽古をして、週末は舞台、という感じになるで、弟子の育成が難しく、忙しい人であればあるほど、そうなります。それをどうにか解決しようと、今、試行錯誤をしているところなんです。舞台の稽古を昼間にさせてもらえれば、僕たちは夕方以降、弟子を教えることができます。このようなことを国立に打診しています。

——少子化のこともあり、後継者の育成は伝統芸能の大きな課題ですね。

**仲村** ただでさえ減っているのに、今のように我々が弟子を取れないことが続くと、本当に死活問題なので、ここは変えていかないといけないですね。

——今までの慣習に安住してしまって、それに気づかない人たちがいるのではないのでしょうか。ですので、声を上げる意味は大きいと思います。

芸の修業上、沖縄県立芸大が果たす役割は大きいのではないのでしょうか。

仲村 そうですね。僕らにとって県立芸大出身というのが大きいかな、とまず思いますね。あと国立劇場おきなわの研修生という制度もありますが。芸大に集まることによって、流派の垣根を越えて高め合える。昔はお家のなかだけで解決していた世界が、善し悪しも見えてくるし、いいものを見れる人が増えてきていると思います。

——国立劇場おきなわは芸術監督を置いていますね。2019年に字幕サービスについて、芸術監督の嘉数道彦<sup>か かず</sup>先生に取材させて頂きました。

仲村 道彦さんは芸術監督を終えて今は沖縄県立芸大の准教授をしています。次の芸術監督は金城真次<sup>きんじょう</sup>さんです。年齢は33、4歳ぐらいだと思います。道彦さんも芸術監督になったときはそのくらいの年齢でした。その意識があったのではないのでしょうか。10年ぐらい芸術監督をされて、下にバトンタッチされて、再び若い世代の芸術監督が誕生したという感じです。

国立劇場おきなわの最初の芸術監督が幸喜良秀<sup>こう きりょうしゅう</sup>先生です。この方はもともと現代演劇の演出をなさっていた方です。この先生が若い方を育てようという意識がずっと念頭にあって、ご自身が昔からいろいろな劇団の演出をされていたのですが、沖縄芝居実験劇場という団体がありまして、戦後の大名優たちがいろいろな芝居をして、紀伊國屋演劇賞も頂いたのではないですかね。その団体を若手に引き継ぐということで、道彦さんや、今、玉城流<sup>たまぐすく</sup>の二代目玉城盛義<sup>せいぎ</sup>先生が代表になって、道彦さんや私が事務局をしながらと、若い世代が引き継がせていただいています。そういった兼ね合いもあって、幸喜先生が芸術監督を退任なさるときに、道彦さんを芸術監督に抜擢されたとうかがっています。ですので幸喜先生の功績は私は非常に大きいと思っています。

——貴重なお話を沢山お聞かせくださり、ありがとうございました。

（文責 三浦裕子）

# How price, quality and risk create customer-perceived value: The moderating role of COO label effect

Connie Chang

Researcher, Musashino University Creating Happiness Incubation

Associate Professor, Faculty of Global Studies, Musashino University

## Abstract

This study compares how the conditional effect of the Country-of-Origin (COO, thereafter) label moderates the relationship between price, quality, risk and customer-perceived value between Japan and Taiwan. The conceptual model is proposed and tested by SPSS PROCESS Macro V4.3. This study distributed a self-administered questionnaire that employed the convenient sampling method and obtained a total number of 125 cases. The results suggest that, in the Taiwanese sample, the COO label moderates the relationship between price and customer-perceived value. The COO label is positively related to quality and risk in purchasing a high-tech hybrid mobile device in both countries. In addition, this study finds out the COO label effects are significant on different groups in both countries which, in turn, influence customer-perceived value.

## 1. Introduction

Smartphones have become a necessity in today's world. Smartphones have gradually entered people's lives and have successfully transformed from luxury goods (Dubey, Sharma & Sheth, 2023) to economic necessities (Chan, 2018). A smartphone is not just a device for making a phone call or sending a text message. It provides several functional values to consumers, including communication, entertainment, shopping, wallet, learning and education, sharing information, transferring data and images, camera, internet access and so on. It seems that smartphones have revolutionized the whole world; from youths to the elderly, everyone has been impacted.

The average selling price for a 5G smartphone was \$643 in the U.S. in 2021 (Hamblen, 2021). Some premium smartphones even reached \$1,000 and above in 2022 (Mishra, 2022), indicating that consumers will spend more money acquiring a smartphone. For example, the average price of a smartphone made by Apple, Samsung or Huawei has increased by 52% since 2016. Although the purchase costs have become a heavy financial burden for some of consumers in different regions, smartphones have

nonetheless become one of humanity's basic needs in the contemporary world. In particular, consumers rely on their smartphone daily to deal with both work and personal matters. Regardless the brand, a smartphone's life cycle has been extended from 22.7 to 24.7 months in the U.S. and from 23.4 to 27.7 months in Great Britain (Ng, 2019). It indicates that the advancements in information technology and the price of a smartphone make consumers delay their desire to upgrade their devices. The purchase decision of a smartphone seems to be highly involved and consumers have to carefully evaluate all the benefits and drawbacks. Therefore, this paper considers how consumers price, quality and risk create customer-perceived value and compares how COO label effect impacts consumers' purchase decision in Japan and Taiwan. The main research objectives are (1) to understand and identify the major factors that are likely to influence customer-perceived value in Japan and Taiwan and (2) to compare the similarities and differences in terms of their choices and provide an appropriate explanation of the phenomenon.

## 2. Background, theoretical development, and research hypotheses

### 2.1 Culture and background

Historically, Taiwan was a colony of the Dutch from 1624 to 1668 (Andrade, 2006), Spain in 1626 (Andrade, 2005), and Japan from 1895 to 1945 (Reuters, 2015). Each country influenced the developments of Taiwan in the field of culture, economics, environment and so on. These developments were gradually integrated into local societies and people's everyday lives, whereas others faded. To be specific, these colonial effects remain influential and recognizable. For example, public education (e.g. compulsory education), reservoirs, military service and transportation systems (e.g. railways and highways) are a legacy of the period of under Japanese rule (Reuters, 2015). Both countries are alike in various ways.

The first phase deals with the similarities between two countries. Both Japan and Taiwan are island nations with limited natural resources (Yang, Panjaitan, Ujiie, Wann & Chen, 2021) and lands and they occasionally suffer natural disasters (e.g. typhoon, earthquake and flooding). These similarities are evident in Hofstede's cultural dimension for uncertainty avoidance which expresses the degree to which the members of a society feel uncomfortable with uncertainties and ambiguity (Hofstede, 1980). For example, both countries dispatched search and rescue teams to aid Turkey after the Turkey-Syria quake in February (The Asahi Shimbun, 2023; Wu & Shih, 2023). Specific social and economic characteristics between the two countries are shared. People in both societies experience very strong and close group affiliations and ties and are likely to maintain long-term relationships with each other. Both societies have

relatively large, densely populated urban areas and place a heavy weight on in-group harmony, namely, avoid letting someone lose their face in public. Thus, people tend to express their opinions indirectly or vaguely.

The second phase addresses the differences between the two countries. Both Japan and Taiwan seem to be similar; however, they are also different. The noticeable differences lie in economics (see Table 2.1), social structure, the environment and cultural factors. For example, Japan is considerably more economically advanced than Taiwan, and Japan's population is five times as large as Taiwan's. This results in a difference in market size. This inequality, combined with differences in per capita GDP, indicates that GDP and expenditure in Japan are many times larger than in Taiwan.

Table 2.1 Country characteristics, 2023

|                           | Japan    | Taiwan   |
|---------------------------|----------|----------|
| Population (millions)     | 124.621  | 23.932   |
| GDP (in \$U.S. trillions) | 4.94     | 1.277    |
| GDP/capita (\$U.S.)       | 39,312.7 | 32,811.0 |
| GDP origination (%)       |          |          |
| Agriculture               | 1.04     | 1.4      |
| Industry                  | 29.2     | 37.8     |
| Services                  | 69.47    | 60.8     |

(Sources: IMF, n.d.; World Bank, n.d.; Statistics Bureau, n.d.)

According to Hofstede (1980), Japan and Taiwan show differences in the individualism and masculinity dimensions. Firstly, Taiwan scores significantly lower (17 points) than Japan (46 points). Both societies consider loyalty to their companies or extended family members necessary; however, it seems more influential in Taiwan. People actively take responsibility for following members of their family or neighborhood. For example, the Taiwanese government asked all passengers arriving at the airport to use "epidemic-prevention taxis" to their quarantine hotels (Sui, 2020) and stay there for 15 days. People who failed to comply with this new rule and were fined up to one million NTD, and felt shame or loss of face. Everyone does their part to avoid being the black goat in the group, and the country and people's daily life suffers the most negligible economic impact.

Next, people in highly masculine societies such as Japan (95 points) pursue excellent quality in manufacturing products and providing services and packaging (Hofstede

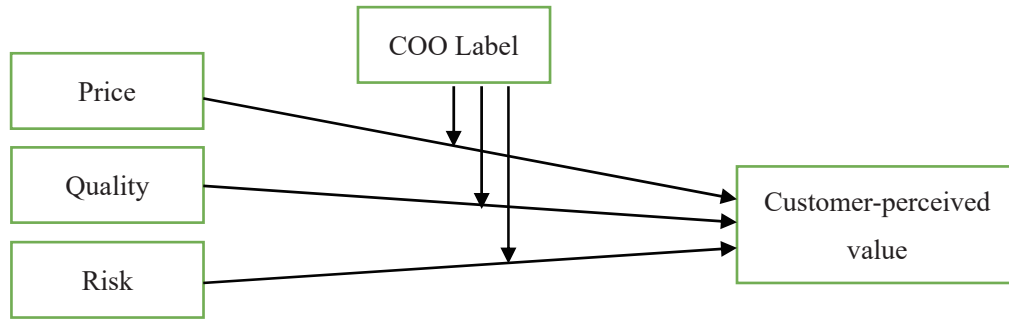
Insights, n.d.) rather than emphasizing assertiveness, strength or independence. On the other hand, some consider Taiwan as a slightly Feminine society (45 points). People in Taiwan highly value equality, supportiveness, warmth and quality in their working lives. For example, regardless age, nationality, gender, occupation or income, people in Taiwan had an equal opportunity to buy face masks once a week during pandemic by showing their national health card (Yuan, Hsu, Lee, Chen, Chou & Hwang, 2020). Moreover, male health officials launched a pink mask campaign challenging gender stereotypes in response to the bullying of male students (see Tu, 2020). After this campaign, various colors and designs of face masks emerged. Face masks are now viewed not only as personal protective equipment but also for fashion or marketing purposes. For example, people choose different face masks to match their outfits or support their favorable team.

## 2.2 Theory and model

The proposed causal framework (see Figure 2.2) describes the relationship between price, quality, risk, customer-perceived value and COO label effect. This framework is grounded in several bodies of knowledge, including Brady & Cronin (2001), Brady & Robertson, (1999), Chen & Dubinsky, (2003), Oliver, (1999), Roselius, (1971), and Zeithaml, (1988). Scholars have tested in different settings and countries. Moreover, Wang and Yang (2008) identify that the COO will likely moderate customers' attitude toward a product evaluation and purchase intention. It can be further assumed that the COO will probably influence other marketing variables such as *price*, *quality*, *risk*, and *brand image* when customers make their purchase decisions.

Although COO seems to be the most studied topic in management and marketing literature (Peterson & Jolibert, 1995; Pharr, 2005; Tan & Farley, 1987), Damanpour (1993) suggests the concept of COO may change over time in many cases. Multiple marketing variables and their interactions may cause it, so a consumer's idea may vary across time, situations and purposes. In addition, Amine, Chao & Arnold (2005, page 118) point out that "the point in history at which perceptions are measured" is critical, leading to occasional attitude changes. In addition, country familiarity and consumer adaptation to social media may accelerate customers' perception of a product or brand. Finally, customers may be misled when making a purchase decision due to the lack of COO information and misuse of the COO label on the package. These indicate that more extensive research is needed and that one will likely encountered significant challenges in COO research.

Figure 2.2 The proposed framework



### 2.3 Hypotheses

Several studies examine the relationships between *quality*, *risk* and *customer-perceived value* (Cronin et al, 2000; Oliver, 1999), indicating that quality and customer-perceived value are highly correlated. In addition, Cronin et al. (2000) suggest that risk affects customer-perceived value. In this study, the risk construct refers to performance, psychological, and social risk, whereas financial and time risks are excluded and subsequently being categorized in the price construct. This description of risk is in line with Monroe (2003), who proposes the price-quality-value relationship. In his research, the price construct contains both monetary and non-monetary costs.

Furthermore, Dodds et al. (1991) observed that increasing price negatively affects product value for money and perceived product quality. Price seems to have a dual role in customers' decision-making process. In the same study, Dodds et al. (1991) also suggest perceived quality significantly affects customer-perceived value. Therefore, the hypotheses are:

H<sub>1</sub>: The effect of price on customer-perceived value depends on COO label does not exist.

H<sub>2</sub>: The effect of quality on customer-perceived value depends on COO label does not exist.

H<sub>3</sub>: The effect of risk on customer-perceived value depends on COO label does not exist.

## 3. Research methods

### 3.1 Sampling and data collection

The sample was collected through a convenient sampling method. Respondents who were 18 years old, and above, of Taiwanese nationality, had purchased a smartphone at least once were invited. A questionnaire link and a short message were distributed

through companies' internal mail lists and received 125 responses within approximately three weeks. There was no missing data, as all the questions were required to be filled out. After data screening and cleaning, a total 125 cases were ready for data analysis. The Cronbach's Alpha value is .923 (N=35) which exceeded the threshold of 0.7 (Hair, Black, Babin & Anderson, 2019), indicating a good internal consistency of the variables in the scale. The results of descriptive statistics is shown in Table 3.1. There were 72 male and 50 female respondents, and three respondents chose not to reveal their gender identity, indicating more options are needed to express their gender identity. The results reflect the specific characteristics of feminine society in the Hofstede study.

Table 3.1 Descriptive statistics of demographic variables (n=125).

| Demographic variable |                            | Percentage (n) |         |                   |            |            |
|----------------------|----------------------------|----------------|---------|-------------------|------------|------------|
| Gender               | Male                       | Female         |         | Prefer not to say |            |            |
|                      | 57.6% (72)                 | 40% (50)       |         | 2.4% (3)          |            |            |
| Age                  | 30-39 years                | 40-49 years    |         | 50-59 years       |            |            |
|                      | 36.8% (46)                 | 44% (55)       |         | 15.2% (19)        |            |            |
| Education attainment | Junior high school or less | Undergraduate  |         | Post-graduate     |            |            |
|                      | 4% (5)                     | 70.4% (88)     |         | 25.6% (32)        |            |            |
| Monthly income       | 20k-40k                    | 40k-60k        | 60k-80k | 80k-100k          | 100k-200k  | 200k+      |
|                      | 9.6% (12)                  | 24.8% (31)     | 8% (10) | 18.4% (23)        | 17.6% (22) | 12.8% (16) |

### 3.2 Analysis

The hypothesized relationships were estimated using SPSS PROCESS V4.3. SPSS PROCESS has become a popular analytical software to test mediation and moderation effects in the field of psychology and management (Hayes, 2018). The preprogrammed moderation model (Model 1) tests the effect of focal antecedents on customer-perceived value moderated by the COO label effect.

### 3.3 Study 1-Japanese sample

The Japanese data were conducted in 2021 (n=121), and the results were reported in Chang (2021). The same measurement scale was applied. The only difference was the models of the mobile device - the iPhone 13 (launched in 2021) versus the iPhone 14 (launched in 2022). The iPhone 13 series, including iPhone 13, iPhone 13 mini, iPhone 13 Pro and iPhone 13 Pro max were all assembled in China. In contrast, the iPhone 14 and iPhone 14 Plus have been assembled in India since 2022, while the iPhone 14 Pro and iPhone 14 Pro max have remained in China (Cheng, 2022). This study cannot control the country-of-assembling (COA) effect. In this section, the results are

summarized in short. The study found that effect of *price* on customer-perceived value depends on COO label does not exist. However, the effect of quality and risk on customer-perceived value depends on COO label exists. Firstly, the COO label is positively related to quality among those relatively low, relatively moderate and relatively high in COO label. By employing the Johnson-Neyman technique, it is about 5.8<sup>th</sup> percentile of the distribution of the COO label and above is significant ( $p\text{-value} < .05$ ). Next, the COO label effect is positively related to risk among relatively moderate and relatively high COO label. About the 37<sup>th</sup> percentile of the distribution of the COO label and above is significant. Therefore, the effect of risk on customer-perceived value depends on the COO label exists.

### 3.4 Study 2-Taiwanese sample

The Taiwan data was conducted from December 31<sup>st</sup>, 2022 to January 13<sup>th</sup>, 2023 through an online questionnaire. A total number of 125 cases were received.

3.4.1 H<sub>1</sub>: The effect of price on customer-perceived value depends on COO label does not exist.

Table 3.4.1 summarizes the results of using PROCESS.

| R     | R-sq  | MSE   | F       | df1    | df2      | p     |
|-------|-------|-------|---------|--------|----------|-------|
| .7723 | .5965 | .6677 | 35.1814 | 5.0000 | 119.0000 | .0000 |

Table 3.4.1.1 Model

|          | coeff   | se     | t       | p     | LLCI    | ULCI   |
|----------|---------|--------|---------|-------|---------|--------|
| Constant | -4.1704 | 2.6802 | -1.5560 | .1224 | -9.4774 | 1.1367 |
| Price    | .8263   | .3372  | 2.4504  | .0157 | .1586   | 1.4940 |
| COO      | .6803   | .3517  | 1.9343  | .0554 | -.0161  | 1.3767 |
| Int_1    | -.0694  | .0439  | -1.5801 | .1165 | -.1562  | .0175  |
| Quality  | .1998   | .0756  | 2.6443  | .0093 | .0502   | .3494  |
| Risk     | .4154   | .0731  | 5.6813  | .0000 | .2706   | .5602  |

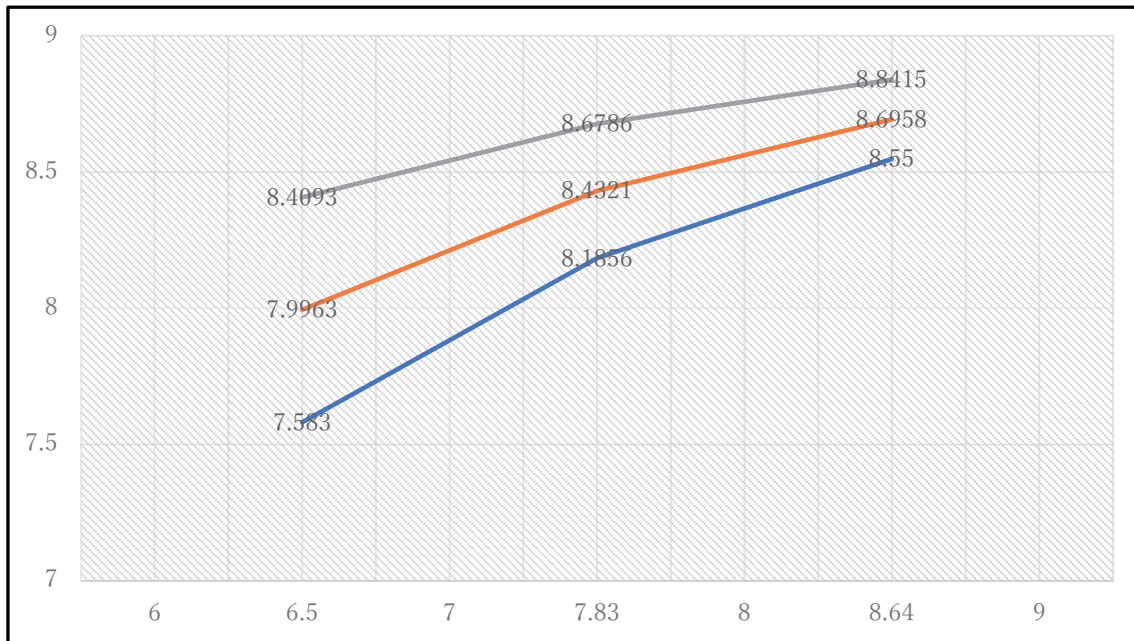
The model can be written as  $\hat{y} = -4.1704 + 0.8263X + 0.6803W - 0.0694XW$ , where  $X = \text{Price}$ ,  $W = \text{COO}$ ,  $XW = \text{the effect of price on customer-perceived value depends on COO label}$ .

Table 3.4.1.2 Test of highest order unconditional interaction

|     | R2-chng | F      | df1    | df2      | p     |
|-----|---------|--------|--------|----------|-------|
| X*W | .0085   | 2.4997 | 1.0000 | 119.0000 | .1165 |

According to Table 3.4.1.2, the p-value ( $p=.1165$ ,  $LLCI=-.1562$ ,  $ULCI=.0175$ ) is greater than 0.05 and the confidence interval contains zero, indicating it is not significant. Therefore, the null hypothesis is accepted. That is, the effect of price on customer-perceived value depends on COO label does not exist.

Figure 3.4. Moderation Chart



To further probe the moderation effect, a pick-a-point statistical test approach was employed to investigate the interaction (Hayes, 2018). The program selected three values of the moderator to estimate the conditional effect, and they are the 16<sup>th</sup> (value=5.4), 50<sup>th</sup> (value=7.2) and 84<sup>th</sup> (value=9.0) percentiles of the distribution of the COO label. Price is related to customer-perceived value among relatively low in the COO label ( $\theta_{x \rightarrow y|w=5.4}=.4517$ ,  $p=.0002$ ), relatively moderate in the COO label ( $\theta_{x \rightarrow y|w=7.2}=.3268$ ,  $p=.0000$ ) and relatively high in COO label ( $\theta_{x \rightarrow y|w=9.0}=.2020$ ,  $p=.0482$ ). There is statistically significant association between price and customer-perceived value. Moreover, the Johnson-Neyman significance region is between 13.6<sup>th</sup> (value=2.78) to 86.4<sup>th</sup> (value=9.0129) percentile of the distribution of COO label (see Table 3.4.1.3).

Table 3.4.1.3 Conditional effect of focal predictor at values of the moderator

| COO    | effect | se    | t      | p     | LLCI  | ULCI   |
|--------|--------|-------|--------|-------|-------|--------|
| 2.400  | .6598  | .2358 | 2.7977 | .0060 | .1928 | 1.1268 |
| 2.780  | .6334  | .2201 | 2.8776 | .0048 | .1976 | 1.0693 |
| 3.160  | .6071  | .2046 | 2.9675 | .0036 | .2020 | 1.0122 |
| 3.540  | .5807  | .1892 | 3.0692 | .0027 | .2061 | .9554  |
| 3.920  | .5544  | .1741 | 3.1845 | .0019 | .2097 | .8991  |
| 8.8600 | .2117  | .0973 | 2.1766 | .0315 | .0191 | .4043  |
| 9.0129 | .2011  | .1016 | 1.9801 | .0500 | .0000 | .4022  |

3.4.2 H<sub>2</sub>: The effect of quality on customer-perceived value depends on COO label does not exist.

Table 3.4.2 summarizes the results of using PROCESS.

| R     | R-sq  | MSE   | F       | df1    | df2      | p     |
|-------|-------|-------|---------|--------|----------|-------|
| .7689 | .5912 | .6764 | 34.4252 | 5.0000 | 119.0000 | .0000 |

Table 3.4.2.1 Model

|          | coeff  | se     | t      | p     | LLCI    | ULCI   |
|----------|--------|--------|--------|-------|---------|--------|
| Constant | 2.6189 | 2.9102 | .8999  | .3700 | -3.1436 | 8.3815 |
| Quality  | -.1079 | .3086  | -.3498 | .7271 | -.7190  | .5031  |
| COO      | -.2627 | .4076  | -.6445 | .5205 | -1.0699 | .5445  |
| Int_1    | .0419  | .0432  | .9705  | .3338 | -.0436  | .1275  |
| Price    | .2960  | .0776  | 3.8129 | .0002 | .1423   | .4498  |
| Risk     | .4441  | .0730  | 6.0813 | .0000 | .2995   | .5886  |

The model can be shown as  $\hat{y} = 2.6189 - .1079X - .2627W + .0419XW$ , where  $X$ =Quality,  $W$ =COO,  $XW$ =the effect of quality on customer-perceived value depends on COO label.

Table 3.4.2.2 Test of highest order unconditional interaction

|     | R2-chng | F     | df1    | df2      | p     |
|-----|---------|-------|--------|----------|-------|
| X*W | .0032   | .9419 | 1.0000 | 119.0000 | .1275 |

According to Table 3.4.2.2, the p-value ( $p=.3338$ ,  $LLCI=-.0436$ ,  $ULCI=0.1880$ ) is greater than 0.05, and the confidence interval contains zero, indicating it is not significant.

When further probing the interaction effect, the results show quality is related to customer-perceived value only among relatively moderate in COO label ( $\theta_{x \rightarrow y|w=7.2}=.1940$ ,  $p=.0121$ ) and relatively high in COO label ( $\theta_{x \rightarrow y|w=9.0}=.2695$ ,  $p=.0230$ ). Among relatively low in COO label ( $\theta_{x \rightarrow y|w=5.4}=.1185$ ,  $p=.2385$ ), there is no statistically significant association between quality and customer-perceived value. Moreover, the Johnson-Neyman significance region is below 32<sup>nd</sup> (value=6.264) and above 68<sup>th</sup> (value=8.0) percentile of the distribution of COO label (see Table 3.4.2.3).

Figure 3.4.2 Moderation Chart

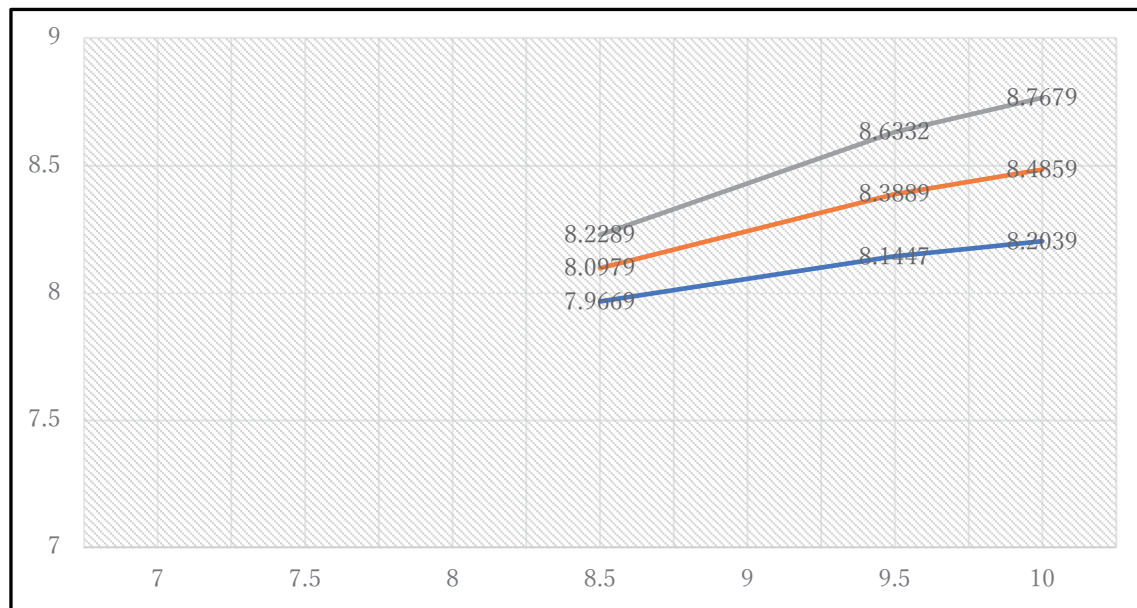


Table 3.4.2.3 Conditional effect of focal predictor at values of the moderator

| COO    | effect | se    | t      | p     | LLCI   | ULCI  |
|--------|--------|-------|--------|-------|--------|-------|
| 6.2000 | .1521  | .0815 | 1.8655 | .0646 | -.0093 | .3135 |
| 6.3292 | .1575  | .0795 | 1.9801 | .0500 | .0000  | .3150 |
| 6.5800 | .1680  | .0767 | 2.1901 | .0305 | .0161  | .3199 |
| 6.9600 | .1839  | .0753 | 2.4441 | .0160 | .0349  | .3330 |
| 7.3400 | .1999  | .0773 | 2.5842 | .0110 | .0467  | .3530 |
| 7.7200 | .2158  | .0827 | 2.6094 | .0102 | .0520  | .3796 |
| 8.1000 | .2318  | .0908 | 2.5534 | .0119 | .0520  | .4115 |

3.4.3 H<sub>3</sub>: The effect of risk on customer-perceived value depends on COO label does not exist.

Table 3.4.3 summarizes the results of using PROCESS.

| R     | R-sq  | MSE   | F       | df1    | df2      | p     |
|-------|-------|-------|---------|--------|----------|-------|
| .7773 | .6043 | .6549 | 36.3410 | 5.0000 | 119.0000 | .0000 |

Table 3.4.3.1 Model

|          | coeff   | se     | t       | p     | LLCI    | ULCI   |
|----------|---------|--------|---------|-------|---------|--------|
| Constant | -4.6454 | 2.1863 | -2.1248 | .0357 | -8.9745 | -.3163 |
| Risk     | .9379   | .2382  | 3.9376  | .0001 | .4662   | 1.4095 |
| COO      | .7980   | .3062  | 2.6026  | .0103 | .1917   | 1.4042 |
| Int_1    | -.0821  | .0371  | -2.2109 | .0290 | -.1556  | -.0086 |
| Price    | .3492   | .0780  | 4.4796  | .0000 | .1949   | .5036  |
| Quality  | .2052   | .0747  | 2.7447  | .0070 | .0571   | .3532  |

The model can be explained as  $\hat{y} = -4.6454 + .9379X + .7980W - .0821XW$ , where  $X = \text{Risk}$ ,  $W = \text{COO}$ ,  $XW = \text{the effect of risk on customer-perceived value depends on COO label}$ . According to Table 3.4.3.2, the p-value ( $p = .0290$ ,  $LLCI = -.1556$ ,  $ULCI = -.0086$ ) is less than 0.05, and the confidence interval does not contain zero, indicating it is significant. The null hypothesis is rejected. Moreover, risk is related to customer-perceived value only among relatively low in COO label ( $\theta_{x \rightarrow y|w=5.4} = .4947$ ,  $p = .0000$ ) and relatively moderate in COO label ( $\theta_{x \rightarrow y|w=7.2} = .3469$ ,  $p = .0000$ ), among relatively high in COO label ( $\theta_{x \rightarrow y|w=9.0} = .1992$ ,  $p = .1236$ ), there is no statistically significant association between risk and customer-perceived value. In addition, Table 3.4.3.3 shows that the Johnson-Neyman significance regions are between 23.2<sup>nd</sup> (value=5.8) to 76.8<sup>th</sup> (value=8.7536) percentile of the distribution of COO label.

Table 3.4.3.2 Test of highest order unconditional interaction

|     | R2-chng | F      | df1    | df2      | p     |
|-----|---------|--------|--------|----------|-------|
| X*W | .0163   | 4.8883 | 1.0000 | 119.0000 | .0290 |

Figure 3.4.3 Moderation Chart

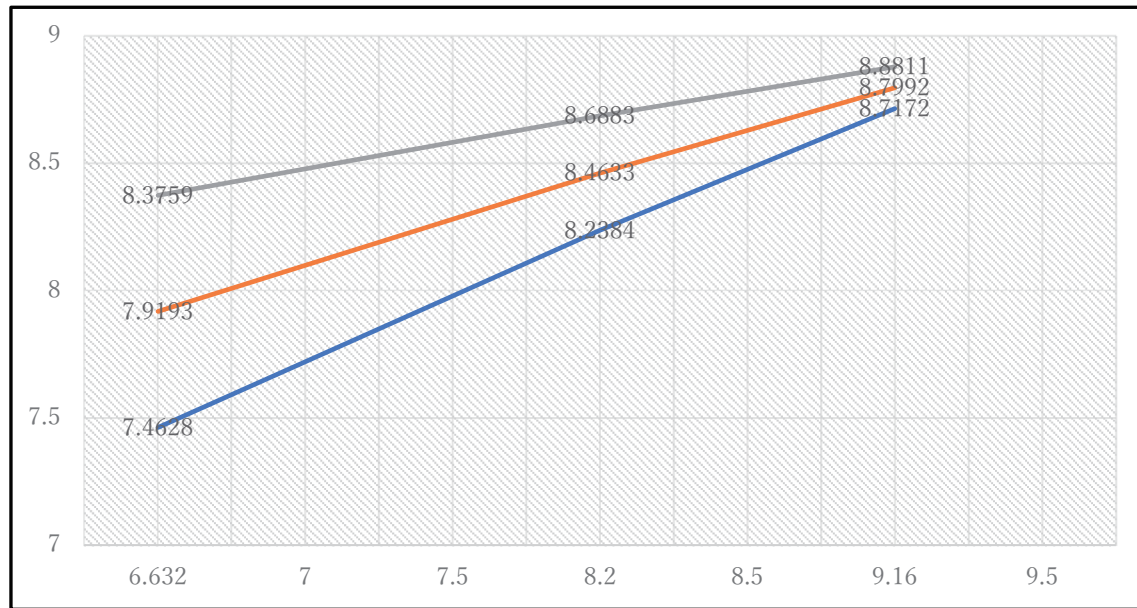


Table 3.4.3.3 Conditional effect of focal predictor at values of the moderator

| COO    | effect | se    | t      | p     | LLCI   | ULCI  |
|--------|--------|-------|--------|-------|--------|-------|
| 6.9600 | .3666  | .0778 | 4.7124 | .0000 | .2126  | .5207 |
| 7.3400 | .3354  | .0844 | 3.9726 | .0001 | .1682  | .5026 |
| 7.7200 | .3043  | .0928 | 3.2800 | .0014 | .1206  | .4879 |
| 8.1000 | .2731  | .1024 | 2.6678 | .0087 | .0704  | .4757 |
| 8.4800 | .2419  | .1129 | 2.1423 | .0342 | .0183  | .4654 |
| 8.6111 | .2311  | .1167 | 1.9801 | .0500 | .0000  | .4622 |
| 8.8600 | .2107  | .1242 | 1.6969 | .0923 | -.0352 | .4565 |

#### 4. Discussion

The results of study 2 (Taiwanese data) support H<sub>1</sub>, H<sub>2</sub> and H<sub>3</sub>. Firstly, the moderation analysis with the SPSS PROCESS Macro reveals the effect of price on customer-perceived value depends on the COO label exists. The results suggest that the COO label moderates the relationship between price and customer-perceived value. Since the market price of an iPhone 14 model has increased by 3,000 NTD (approximately 12,000 JPY), it seems to be additional financial burden for consumers, especially since some workers were vulnerable during the pandemic. Moreover, the average lifespan for an iPhone mobile has been extended from 4 year and three months (Dediu, 2018) to 6 years and more (Chouffani, 2023; Cohen, 2022). Technological advancement not only makes consumers rely on a mobile device more, but also makes consumers want to get their money's worth in terms of lifespan when they purchase a new device. In addition, this

study found out that price is related to customer-perceived value among relatively low in the COO label and relatively moderate in the COO label. When a lower or moderate amount of information displays on the COO label, it influences *price* the most. Customers become price sensitive when purchasing a new smartphone as they may not have adequate information to determine whether it is value for money or it is worth 200,000 JYP or 49,400 NTD for an identical iPhone 14 Pro Max in Japan or Taiwan. Those consumers must make the right decision and hope the gadget they chose will last longer.

There are slight differences between Japanese and Taiwanese consumers regarding their price perception. To begin with, it takes the Taiwanese 17.2 working days of their average monthly income to get an iPhone 14 Pro, whereas it takes the Japanese only 11.9 to afford one, according to the iPhone Index 2022 (Picodi, 2022). Taiwanese consumers must work an additional 5.3 working days compared to their counterparts, indicating the high price cost. Thus, consumers are likely to get more information to determine the value for money.

The second findings of this study are the effect of quality on customer-perceived value depends on the COO label exists in both the Japanese and Taiwanese samples. In both countries, consumers are influenced by the COO label when determining product and service quality. One reason is that in both nations, local companies are leading suppliers to Apple, including Sony, TSMC, Fujikura, Hitachi, Japan Display Inc., Kinsus, etc. Customers are more familiar with these companies, strengthening their perception of product quality. In addition, Apple publishes its global supplier list on its website and emphasizes the latest innovation technology in its products. Disclosing this kind of information enhances customer-perceived value. The only discrepancy between two nations is that quality is related to customer-perceived value only among relatively moderate and relatively high in COO label in Taiwan. It seems that the stronger the COO label effect, the higher value consumers hold.

Most importantly, this study suggests the effect of risk on customer-perceived value depends on COO label exists in the Taiwanese sample. In contrast, this effect only exists among relatively moderate and relatively high in COO label in the Japanese sample. Both countries score high in the uncertainty avoidance dimension (Hofstede, 1980), suggesting consumers are likely to minimize any risks that may occur in their decision-making process. They may search for more information (e.g. expert reviews), try the product at an Apple store or consult friends or family members. Moreover, consumers

do not want to lose face among friends or colleagues if they make a terrible choice. For example, consumers would feel regret if (1) their new phone malfunctioned quickly or (2) they did not choose to increase the storage capacity, which may shorten their phone's lifespan. Therefore, presenting more COO information would minimize customers' risk perception and increase customer-perceived value.

## 5. Conclusions

This study compares how consumers price, quality and risk create customer-perceived value and how the COO label affects consumers' purchase decision between Japanese and Taiwanese consumers. Since both countries have similar traits, this study identifies differences between Japan and Taiwan. The COO label effect significantly moderates the relationship between price and customer-perceived value only in Taiwan. It suggests that consumers utilize the information displayed on the label/packaging to determine its value for money. However, the iPhone price is identical in each country. It is not only on the purchase price but also on the maximum efficiency and effectiveness of the purchase. Next, the COO label is positive relative to quality and risk in both countries. This study finds that the COO label effects are significant for different groups in both countries. For example, the COO label effects on the relationship between quality and customer-perceived value are significant among Taiwan's relatively moderate and high COO label groups.

The first theoretical contribution of this study is to compare behavioral differences between Japan and Taiwan. Due to globalization, culture, and social media effects, Taiwan and Japan are similar; however, this study identified some different aspects. For example, both Japan and Taiwan are categorized in the collectivism dimension. However, consumers in both societies behave differently on specific occasions. It suggests that more comparative studies are needed to probe convergence and divergence in both societies. Next, this study further improves the pricing and COO literature by supporting the COO label effect moderates the relationship between price and customer-perceived value. Although Wang and Yang (2008) identify that the COO is likely to be a moderator, this study takes things a step further by investigating how the COO influences price, quality and risk on customer-perceived value. Finally, this study cross-validates the model in a different cultural and economically developed environment.

## Acknowledgement

This work was supported by the Creating Happiness Incubation Research Fund 2022 (Research theme: A comparative study of how country-of-origin labelling influences

customer-perceived value)

## References

1. Amine, L. S., Chao, M. C. H., & Arnold, Exploring the practical effects of country of origin, animosity, and price-quality issues: Two case studies of Taiwan and Acer in China, *Journal of International Marketing*, 13(2), 114-150.
2. Andrade, T, (2005). *How Taiwan became Chinese: Dutch, Spanish and Han colonization in the seventeenth century*. Columbia University Press,
3. Andrade, T. (2006). The rise and fall of Dutch Taiwan, 1624-1662: Cooperative colonization and the statist model of European expansion. *Journal of World History*, 17(4), 429-450.
4. Brady, M. K., & Cronin, J. J. Jr. (2001). Some new thoughts on conceptualizing perceived service quality: A hierarchical approach. *Journal of Marketing*, 65 (3), 34-50.
5. Brady, M. K., & Robertson, C. J. (1999). An exploratory study of service value in the USA and Ecuador. *International Journal of Service Industry Management*, 10 (5), 469-486.
6. Chan, M. (2018). Mobile-mediated multimodal communications, relationship quality and subjective well-being: An analysis of smartphone use from a life course perspective. *Computer Human Behavior*, 87(1), 254–262.
7. Chang, C. (2021). Does the coo label effect matter? How Japanese consumers respond to the effect on a mobile device? *Journal of Musashino University Creating Happiness Incubation*, 5(1), 18-48.
8. Chen, Z. & Dubinsky, A. J. (2003). A Conceptual Model of Perceived Customer Value in e-Commerce: A Preliminary Investigation. *Psychology & Marketing*, 20 (4), 323-346.
9. Cheng, T. (2022, September 26). Apple already building latest iPhone 14 in India moving a sign south Asian country is gaining importance in supply chain. Nikkei Asia. <https://asia.nikkei.com/Spotlight/Supply-Chain/Apple-already-building-latest-iPhone-14-in-India>
10. Chouffani, R. (2023, January 31<sup>st</sup>). *Understanding how long iPhones can last in the enterprise*.TechTarget. <https://www.techtarget.com/searchmobilecomputing/tip/Understanding-how-long-iPhones-can-last-in-the-enterprise>
11. Cohen, B. (2022, December 4<sup>th</sup>). *How long does an iPhone last?* Devicetests. <https://devicetests.com/how-long-does-an-iphone-last>
12. Damanpour, F. (1993). Temporal shifts of developed country images: A 20-year view.

- In N. Papadopoulos & L. A. Heslop (Eds), *Product-country images: Impact and role in international marketing* (pp. 357-378). International Business Press.
13. Dediu, H. (2018, March 1<sup>st</sup>). *Determining the average Apple device lifespan*. Asymco. <http://www.asymco.com/2018/03/01/determining-the-average-apple-device-lifespan/>
  14. Dubey, T., Sharma, S. & Sheth, A. (2023). A study to understand the usage of premium smartphones in India with special reference to Samsung v/s oneplus. *International Research Journal of Modernization in Engineering Technology and Science*, 5(2), 1620-1624.
  15. Hair, J. F. Jr., Black, W. C., Babin, B. J. & Anderson, R. E. (2019). *Multivariate Data Analysis*. (8<sup>th</sup> ed.). Cengage International.
  16. Hamblen, M. (2021, December 3). *Smartphone tally up 5% for year despite supply chain woes*. <https://www.fiercееlectronics.com/electronics/smartphone-tally-up-5-for-year-despite-supply-chain-woes>
  17. Hofstede, G. (1908). *Culture's consequence*. Sage.
  18. Hofstede Insights. (n.d.). *Country comparison*. Retrieved March 15, 2023, from <https://www.hofstede-insights.com/country-comparison/japan,taiwan/>
  19. IMF. (n.d.). Retrieved March 15, 2023, from <https://www.imf.org/en/Countries/JPN>
  20. IMF. (n.d.). Retrieved March 15, 2023, from <https://www.imf.org/external/datamapper/profile/TWN>
  21. Mishra, V. (2022, September 1). *Premium smartphone average selling price reaches record Q2 high*. <https://www.counterpointresearch.com/premium-smartphone-asp-reaches-record-q2-high/>
  22. Ng, A. (2019, May 16). *Smartphone users are waiting longer before upgrading-here's why*. CNBC. <https://www.cnbc.com/2019/05/17/smartphone-users-are-waiting-longer-before-upgrading-heres-why.html>
  23. Oliver, R. L. (1999). Value as excellence in the consumption experience. In M. B. Holbrook (Ed.), *Consumer behavior: A framework for analysis and research* (pp. 43-62). Routledge.
  24. Peterson, R. A., & Jolibert, A. J. (1995). A meta-analysis of country-of-origin effects. *Journal of International Business Studies*, 26(4), 883-900.
  25. Pharr, J. M. (2005). Synthesizing country-of-origin research from the last decade: Is the concept still salient in an ear of global brands? *Journal of Marketing Theory and Practice*, 13(4), 34-45.
  26. Picodi (2022, September 8). *iPhone index 2022: How many days do we need to afford Apple's newest flagship?* Picodi. <https://www.picodi.com/my/bargain-hunting/iphone-index-2022>
  27. Reuters (2015, October 25). *Taiwan president says should remember good things*

- Japan did. Reuters. <https://www.reuters.com/article/us-taiwan-china-idUSKCN0SJ03Y20151025>
28. Roselius, T. (1971). Consumer rankings of risk reduction methods. *Journal of Marketing*, 35 (1), 56-61.
29. Sui, C. (2020, April 24). In Taiwan, the coronavirus pandemic is playing out very differently. What does life without a lockdown look like? NBC News. <https://www.nbcnews.com/news/world/taiwanese-authorities-stay-vigilant-virus-crisis-eases-n1188781>
30. Tan, C. T., & Farley, J. U. (1987). The impact of cultural patterns on cognition and intention. *Journal of Consumer Research*, 13(4), 540-544.
31. The Asahi Shimbun. (2023, February 8). Japan, charities sending rescuers, aid to quake-hit Turkey, Syria. The Asahi Shimbun. <https://www.asahi.com/ajw/articles/14834800>
32. Tu, J. (2020, April 16). Taiwan challenges gender stereotypes with pink mask campaign. Women's Agenda. <https://womensagenda.com.au/latest/taiwan-challenges-gender-stereotype-with-pink-mask-campaign/>
33. Wang, X., & Yang, Z. (2008). Does country-of-origin matter in the relationship between brand personality and purchase intention in emerging economies? Evidence from China's auto industry. *International Marketing Review*, 25(4), 458-474.
34. World Bank. (n.d.). Retrieved March 15, 2023, from <https://data.worldbank.org/country/japan?view=chart>
35. Wu, J. & Shih, H. (2023, February 7). 2nd Taiwan search and rescue team Turkey bound following earthquake. Focus Taiwan. <https://focustaiwan.tw/society/202302070028>
36. Yang, S., Panjaitan, B. P., Ujiie, K., Wann, J. and Chen, D. (2021). Comparing of food values for consumers' preferences on imported fruits and vegetables within Japan, Taiwan and Indonesia. *Food Quality and Preference*, 87, 1-10.
37. Yuan, E. J., Hsu, C., Lee, W., Chen, T., Chou, L. & Hwang, S. (2020). Where to buy face masks? Survey of applications using Taiwan's open data in the time of coronavirus disease 2019, *Journal of the Chinese Medical Association*, 83(6), 557-560.
38. Zeithaml, V. A. (1988). Consumer perceptions of price, quality and value: A means-end model and synthesis of evidence. *Journal of Marketing*, 52 (3), 2-22.

## 【研究報告】

# 持続可能な地域づくりに向けた統合転換を担う人と組織 ～気候変動の緩和と適応、SDGs の推進を中心として

白井 信雄 (武蔵野大学 工学部 サステナビリティ学科 教授)

## 要約

地域における気候変動への緩和と適応、SDGs の推進が地域政策の重要なテーマになっているなか、「つなぐ（統合する）」「かえる（転換する）」という観点から、異なる分野や主体をコーディネートする人（統合転換コーディネイター）とその活躍の場としての中間支援組織の必要性が高まっている。

このため、本研究では、コーディネイターに関連する既往研究を踏まえて、SDGs 未来都市等における中間支援組織の現状調査を行った。この結果、①統合転換コーディネイターや中間支援組織を設けていない地域が多いこと、②統合転換コーディネイターや中間支援組織を設置したとしても、その役割を担う人材の確保や育成が十分ではないこと、③統合転換コーディネイターが活躍する地域はあるものの、その継続性に課題があること、を明らかにした。これを踏まえ、統合転換コーディネイターの要件と中間支援組織の配置のあり方を整理し、さらに統合転換コーディネイターを育成・支援するデジタルプラットフォームの構想を検討した。

今後は、①本研究の成果をたたき台にしてデジタルプラットフォームの試験運用と評価・見直し・普及を進めていくこと、②関連する政策の分析と課題解決の方法の提案を精緻化することが研究課題となる。

## 1. はじめに

気候変動による非常事態が露わになるなか、ゼロカーボンに向けた緩和策（温室効果ガスの排出削減）の加速化と、緩和策の最大限の実施でも避けられない気候変動の影響に対する適応策の推進が最優先の取組課題となっている。地域においては、国の政策に追随するだけでは政策の受容性と効果を高めることができず、地域特性に応じた地域主導の気候変動への緩和策と適応策の推進が必要となっている。また、地域においては、人口縮小、高齢化、地域産業の衰退等の

社会経済的な面での地域課題が深刻であり、これらのローカル SDGs に関わる課題の解決が待ったなしとなっている。

こうした中、ゼロカーボン宣言に基づく地域づくり、地域気候変動適応センターを核とした気候変動適応策の計画、あるいは地域課題の解決を目指して環境と経済・社会の統合的発展を図る SDGs 未来都市の事業が進められている。具体的にいえば、「2050 年までに二酸化炭素排出実質ゼロ」、すなわちゼロカーボンを宣言した地方自治体は 934 地域（46 都道府県、888 市区町村）となっている（2023 年 3 月末時点）。2018 年の気候変動適応法により設置が努力義務となっている地域気候変動適応センターについては、設置済の地方自治体は 56 地域（41 都道府県、15 市区町村）となっている（2023 年 4 月時点）。SDGs 未来都市については、毎年、約 30 地域が選ばれ、2022 年までの 5 年間で 154 地域となっている。

これらの取組みは 1 つの地域において同時並行的に進められている場合が多いが、気候変動への緩和と適応、ローカル SDGs、あるいは地域課題の解決に関する取組みは相互に関連していることから、連携させて統合的に進めるべきものである。例えば、地域における再生可能エネルギー事業は緩和策であるとともに、非常時の電源確保につながる適応策でもある。加えて、再生可能エネルギーの事業収益を地域課題の解決に活用することができる。

また、これらの取組みに共通して必要かつ重要な方向性として、筆者は「つなぐ（統合する）」ことと「かえる（転換する）」ことが重要であると考えている。「つなぐ」ことについては、気候変動の緩和と適応、SDGs への取組みをつなぐことに加えて、様々な側面でつなぐべき対象がある。特に、①行政内の担当部署間や産学官・地域間の連携・共創、②環境・SDGs 対策と産業振興とウェルビーイングの向上等との統合のデザインが重要である。「かえる」ことについては、③リフレーミングによる慣性の規範や方法の変革・転換とともに、④Z 世代等の若い世代の参加と主導による転換が重要である。

こうした「つなぐ」ことと「かえる」ことを重視する取組みを包括して、「統合的アプローチによる転換のコーディネイト（略して、統合転換コーディネイト）」と呼ぶことにする。

本研究では、統合転換コーディネイトに関して、日本国内での動向と課題を整

理し、統合転換コーディネイトを担う人と組織のあり方を検討する。さらに、統合転換コーディネイトを担う人が育つ仕組みとして、デジタルプラットフォームのプロトタイプを企画する。

## 2. 統合転換コーディネイトに関連する制度や研究

### (1) 様々な分野での統合転換コーディネイトを担う人材に関する研究

統合転換コーディネイトを担う人材、すなわち統合転換コーディネイターに相当する制度は様々な行政分野にみられる(表1)。これらは、〇〇マネジャー、あるいは〇〇コーディネイター(以下、文献によってはコーディネーターと表記する場合もあるが、コーディネイターに統一して表記)と名前がつけられ、それぞれの定義や育成方針が検討され、支援施策や資格制度が設けられ、研究や報告がなされている。そのうち、本研究の対象に示唆を与えてくれる研究として、消費者教育コーディネイター、多文化共生コーディネイター、産学官コーディネイターに関する注目すべき研究をまとめる。

柿野(2019)は、消費者行政と教育行政の縦割りを乗り越える相互の意思疎通の仕組みである「消費者教育コーディネイター」に着目し、縦割りを越えた組織同士の公式ルートでの連携が難しいのであれば、「非公式な人の多重成員性」であると指摘している。特に、「教育行政との分断を乗り越えて学校現場と繋がっていくためには、教員経験者や校長経験者、教育委員会経験者の『成員性』(membership)が有効であり、教育行政、学校現場の成員性を持つ人物を政策的に配置していくことにより、人のつながりによって組織を乗り越えることが可能になる」としている。人材の持つ他分野での経験を活かして、分野統合を図ることの可能性については、気候変動やSDGsにおける分野統合の場合においても同様であろう。

齊藤(2013)は、教育、労働、医療、地域活動等の分野にまたがる外国籍市民の支援を担う「多文化共生コーディネイター」について、横浜市の実態を分析し、可能性を検討している。その結果、「多文化共生コーディネイター」という専門性の高い人材を一般職として採用する可能性は少なく、嘱託職員としての採用になるが、その場合、一般職員へのアドバイスや市民相談等に業務が限定され、試作や計画策定に関わることは難しいと考察している。このため、

表1 統合マネジャーに関連する国内の制度の例

| 分野 | マネジャー制度の例                                                   |
|----|-------------------------------------------------------------|
| 教育 | ESD コーディネイター、地域・教育魅力化コーディネイター、消費者教育コーディネイター、生涯学習コーディネイター    |
| 福祉 | ケアマネジャー（介護支援専門員）、福祉住環境コーディネーター、生活支援コーディネーター、多文化社会コーディネイター   |
| 医療 | 臨床研究コーディネイター、治験コーディネイター、リスクマネジャー                            |
| 地域 | 公共政策マネジャー、地域づくりコーディネイター、まちづくりコーディネイター、協働コーディネイター、移住コーディネイター |
| 災害 | 事業継続マネジャー、防災コーディネーター、災害ボランティアコーディネイター、被災者支援コーディネイター         |
| 産業 | 産学官連携コーディネイター、医工連携コーディネイター                                  |

自治体組織外に専門家としてコーディネイターを置くという制度が望ましいとしている。コーディネイター人材の外部化の必要性もまた、気候変動や SDGs における分野統合の場合においても同様であると考えられる。

佐藤（2021）は、組織間関係論に基づく産学官連携メカニズムを踏まえて、「産学官連携コーディネイター」の機能を論じている。組織間関係論によれば、「産」と「学」とが互いに有する資源の有用性を相互に認識するところから、組織間関係が始まる。このことから、互いの存在を知る機会をつくり、相互の資源の有用性を気づかせる「翻訳機能」を持つのがコーディネイターだとしている。また、産学官連携のプロセスを、①研究・技術シーズの価値判断、②産学マッチング、③プロジェクト形成、④プロジェクト推進、⑤事業化達成後の事業活動に分け、各プロセスにおけるコーディネイターの果たすべき機能を整理している。

以上のように、本研究の対象と異なる分野において、コーディネイターの人材要件、配置する組織、プロセスと機能に関する検討がなされており、それらは本研究の分野にも参考にすべき研究成果である。

## （２）環境分野での統合転換コーディネイトを担う中間支援組織に関する研究

統合転換コーディネイトを担う組織に関連して、中間支援組織に注目した研究がある。持続可能な地域づくりの分野では、平岡（2007）が市の環境条例と環境基本計画策定における市民参加の中間支援のプロセスについて、平岡（2016）が地域再生可能エネルギー事業に関する中間支援組織について、研究をまとめている。前者では、実際の地方自治体における事例において、コーディネイターが行政と市民という異なる主体間の「橋渡し」の役割と、計画書をまとめるうえでの「支援者」としての役割を果たしたとしている。そして、コンサルタントとの違いとして、コンサルタントは行政が担う業務の代替、いわば行政の下請け的な存在であることに対して、コーディネイターは異なる主体の間にたち、協働による作業を支援する役割を持つとしている。

後者の地域再生可能エネルギー事業に関する中間支援組織として、徳島地域エネルギー、下川町ふるさと開発振興公社クラスター振興部、オーストリアのエネルギー研究所フォーアールベルクの３つを調査し、それぞれが持つ機能を、①調査研究・提言、②助言・ノウハウ提供、③ネットワーキング・コーディネート、④教育の４機能に整理している。

## （３）統合転換コーディネイトを担う人材の役割について

ここまで示した既往研究では、統合転換コーディネイトを担う人材の役割を理論的かつ実践事例から抽出している。これらに加えて、より包括的に統合転換コーディネイターの役割をまとめた成果もある。例えば、Van Der Wal（2017）は、パブリック・マネージャーの新しい役割として、①ストーリーテラー、②リソースウィーパー、③システムアーキテクト、④ナビゲーターといった役割を指摘している。地域にある資源を物語としてつなぎあわせ、それを市民やユーザーに示していくという役割である。地域資源の活用や物語化は地域づくりの先進地にみられる方法であるが、気候変動と地域活性化を両立させ、地域住民等の受容性を高める場合等においても、その方法が有効であり、パブリック・マネージャーの役割の発揮が期待される。

また、白井ら（2022）は、SDGsをテーマとする地域の取組みにおいて、SDGsをメガネのように用いて、地域を再照射するという観点から、SDGsをコーディ

ネイトする人材の要件を整理している。5 つにまとめられた要件を以下に示す。

- ① SDGs の理念や内容をかみ砕き、農山漁村や中小企業に伝える翻訳家としての役割、広い視野で言葉や表現を選ぶコミュニケーション能力
- ② SDGs に関わる諸問題の連環や根幹を捉えることができる俯瞰的な役割と能力、諸問題に対する基礎的な知識とシステム思考
- ③ 社会起業やビジネス・プランニング、協働等を専門的に支援する役割、企画・実践・見直し等のプロジェクト・ステージに応じた調整能力
- ④ 問題の解決への思い、関係者に寄り添い、こつこつと積み上げることができる伴奏者としての役割、伴奏者としての社会的意識、ボランティア精神
- ⑤ 特に社会経済的な弱者からの信頼、弱者の視点を自分ごととして捉えることができる共感力・一人ひとりを大切にする姿

### 3. 研究の目的と方法

既往研究から、統合転換コーディネイトを担う人と組織が持つ機能、その課題と克服の方法について、おおよその知見を得ることができる。ただし、それらの知見は、気候変動への緩和と適応や SDGs 未来都市に関する直接的なものではないことから、本研究では気候変動への緩和と適応や SDGs 未来都市に関する統合転換コーディネイトの実態を調査するものとする。

そのうえで、これらの分野における統合転換コーディネイトを担う人と組織のあり方を論じる。そして、このあるべき姿を実現するために、統合転換コーディネイトを担う人材を育成、支援する仕組み、特にデジタルプラットフォームの活用注目し、そのデザインを行うものとする。

コーディネイターの育成となるといわゆる研修事業が考えられるが、一過的な研修では十分な学習成果が得られない。むしろ、研修の場で社会関係資本が形成され、それが研修後に活用され、情報交流や意見交換がなされることが重要であると考えられる。この情報交流や意見交換の場としてデジタルプラットフォームを構築し、統合転換コーディネイトを属人的なノウハウや先進地域の特殊解にしないように、コーディネイター相互の情報共有と学習を支援する動きを起こすことが本研究の最終的な目的である。デジタルプラットフォームとしては、オープンソースの参加型民主主義プラットフォームである Decidim の活用

可能性を検討する<sup>1</sup>。

また、上記の検討にあたり研究会を設置し、検討を行った<sup>2</sup>。この検討の成果は、持続可能な地域創造ネットワークの2022年度全国大会（武蔵野大学有明キャンパスにて開催）の分科会で報告し、持続可能な地域づくりに取り組む地方自治体の首長や職員達と意見交換を行った<sup>3</sup>。

#### 4. 気候変動への緩和と適応に関する統合転換コーディネイトの概況

##### （1）気候変動への緩和の統合転換コーディネイター

気候変動への緩和としては、ゼロカーボンシティ宣言を行った地方自治体での動きもあるが、よりアクティブな動きとしては「地域脱炭素ロードマップ」（2021年6月9日国・地方脱炭素実現会議決定）及び「地球温暖化対策計画」（2021年10月22日閣議決定）によって位置づけられている「脱炭素先行地域」の指定がある。これは、地方自治体と地元企業・金融機関が中心となり、環境省を中心に国も積極的に支援しながら、少なくとも100か所を「脱炭素先行地域」として指定し、ゼロカーボン社会の実現を地域からドミノ倒しのように進めていこうという施策である。2022年度と2023年度の2回の募集により、全国で29都道府県66市町村の46提案が採択されている。

第1回の地域選定の総評にあるように、「住民等の需要家の合意等に向けた仕組みや方策、地域企業等と一体となった連携体制、地方自治体の強いリーダーシップが求められる」とし、その実施体制が具体化されていることが選定条件となっている。このため、選定された地域では、推進体制として行政庁内に推進本部を設置し、関係部署を横断的に調整する機能をもたせている場合が多い。また、進捗管理体制として、事業関係者とともに外部の人材を配置している。全体的に、各地区で実施するプロジェクトの内容と役割分担は決まっており、それを実行することに主眼があり、新たな主体を巻き込みながら、さらにプロジェクト創出を図ろうというものではない。このため、統合転換を創出するようなコーディネイターの存在の必要とする状況ではないと考えられる。

また、「脱炭素先行地域」では、市民参加による協働や市民の学習等を進めるというプロジェクトは含まれていない。これも短期的に二酸化炭素の排出削減を実現してみせるという「脱炭素先行地域」の特性といえる。しかし、地域づく

りの観点からいえば、より多くの地域住民や地元の中小事業者等の参加と協働を促すコーディネイトを行う仕組みがないまま、ドミノ倒しが起こっていくことで十分とはいえない。地域づくりは、地方自治体と一部の事業者だけで行うべきものではなく、地域の主体が誰一人取り残されることなく、それぞれのペースで参加し、学習し、成長しながら、自発的に動きだすべきものであるからである。

## （２）気候変動への適応の統合転換コーディネイター

気候変動の影響は地域条件（自然条件、産業構造、ライフスタイル・文化）等によって異なることから、地域毎に影響を評価し、地域に密着した適応策をきめ細かく立案、推進することが求められる。このため気候変動適応法では地方自治体に「地域気候変動適応センター（以下、地域センター）」の設置を求めている。

地域センターは地域の気候変動影響及び気候変動適応に関する情報の収集、整理、分析及び提供並びに技術的助言を行う機能を担う。地域センターは地域の公設環境研究所が担うことが期待されるが、同研究所で気候変動問題に対する経験が不十分である場合、あるいは人材が不足する場合に地域センターを設置したとしても、その運営は容易ではないと考えられる。

適応策担当の行政職員がローテーションのために、専門性を蓄積しきれない、あるいは他部署との関係形成による調整機能を果たしきれない等を考えると、行政の政策形成や調整を行う機能を地域センターが持つことが期待される。

こうした中、特徴的かつ先駆的な活動をしていると考えられる地域センターもある。各地域センターのWEBで公開されている情報をもとに、茨城県、埼玉県、京都府、滋賀県の地域センターにインタビューを行った。

茨城県の地域センターでは茨城大学が運営主体であることが特徴であり、幅広い分野をカバーする文系理系を問わない研究者を活用し、地域の適応計画の支援、地域の人材育成や教育活動を展開している。ただし、市町村から依頼があった場合に検討会委員等として参画しているということであり、能動的に適応策の創出に踏み出しているわけではない。

京都気候変動適応センターは、総合地球環境学研究所が研究主体となり、①京都ならではの対策、②気候変動の緩和と適応の両立<sup>4</sup>、③適応策の自立的な普及に向けた適応ビジネスの創出という方針を打ち出している。これらの取組みは

他の地域センターにない画期的なものである。ただし、現在では、新型コロナの影響があり、これらの活動が進められているわけではない。

以上のように、地域の気候変動適応策の中間支援組織として、期待される地域センターであるが、統合転換コーディネイターとして、分野をつなげたり、これまでにない新たな取組み（追加的適応策という<sup>5</sup>）を創出する段階にはないといえることができる。これは、地域における気候変動適応策が行政内部の関係部署における適応策の検討の場をつくることに注力しており、広く関係者を巻き込んで、それぞれの主体的な取組みを創出していく段階に至っていないためである。

## 5. SDGs 未来都市における統合転換コーディネイトの事例

### （１）「三側面をつなぐ統合的取組み」と主な中間支援組織

地域の気候変動への緩和策と適応策において、統合転換コーディネイトが活発化している状況ではないことに対して、SDGs 未来都市では統合転換コーディネイトが重要な役割をもっている。これは、SDGs 未来都市に計画においては、環境・経済・社会の三側面ごとの取組みを進めるとともに、「三側面をつなぐ統合的取組み」が重視されているためである。

表１に、SDGs 未来都市における中間支援組織の主なものを示す。このうち、大都市として横浜市と北九州市、地方都市として珠洲市、農山村として西栗倉村の事例をとりあげ、コーディネイトの成果、課題等を調査した結果をまとめる。

表１ SDGs 未来都市における主な中間支援組織

| 市町村名    | 中間支援組織の名称          |
|---------|--------------------|
| 北海道下川町  | SDGs パートナシップセンター   |
| 神奈川県横浜市 | ヨコハマ SDGs デザインセンター |
| 石川県珠洲市  | 能登 SDGs ラボ         |
| 富山県南砺市  | 南砺幸せ未来基金           |
| 奈良県広陵町  | 広陵町産業振興機構（なりわい）    |
| 岡山県西栗倉村 | むらまると研究所           |
| 山口県宇部市  | 宇部 SDGs 推進センター     |
| 福岡県北九州市 | 北九州市 SDGs クラブ      |
| 鹿児島県大崎町 | 大崎町 SDGs 推進協議会     |
| 長野県     | 信州地域デザインセンター       |

## (2) 中間支援組織のコーディネート機能とコーディネイター人材の特徴

4 つの中間支援組織の機能と人材の特徴を表2にまとめた。横浜と北九州はSDGs 未来都市における、相談・マッチング機能(つなぐ機能)を持っているが、横浜は事業所の SDGs への取組みの認証といった事業を行っており、北九州は金融機関と連携した経営サポートも行っているなど、それぞれの特徴がある。また、珠洲では教育、西粟倉村では研究開発・実証というように、特定の機能に特化した活動を行っている。

運営主体としては行政の関与は不可欠であるが、いずれも民間事業者との共同体制をとっている。コーディネイター人材は行政外部の人材を活用している。特筆すべきは横浜である。ヨコハマ SDGs デザインセンターは15名の専門分野が異なるコーディネイターが任命され、さらに全体を調整する人材も配置されている。

表2 SDGs 未来都市における主な中間支援組織のコーディネート機能と人材

| 中間支援組織                   | 運営主体                           | 機能                                                   | 人材                                     |
|--------------------------|--------------------------------|------------------------------------------------------|----------------------------------------|
| ヨコハマ SDGs デザインセンター       | 横浜市温暖化対策総括本部<br>民間事業者          | ・相談・マッチング<br>・プロジェクト推進<br>・情報発信・イベント<br>・企業の認証制度     | ・分野別にコーディネイターが存在                       |
| 北九州 SDGs クラブ/SDGs ステーション | 北九州市企画調整局地方創成SDGs 推進部<br>民間事業者 | ・相談・マッチング<br>・プロジェクト推進<br>・情報発信・イベント<br>・SDGs 経営サポート | ・コーディネイターはこれまでは行政、これからは民間事業者           |
| 能登 SDGs ラボ               | 珠洲市<br>大学<br>商工会議所<br>金融機関 等   | ・相談・マッチング<br>・自然環境教育<br>・SDGs 教育                     | ・元行政職員(付属研究機関の研究員)、県産業創出支援機構のメンバーもフォロー |
| 西粟倉村むらまると研究所             | 西粟倉村<br>民間事業                   | ・研究開発・実証事業の推進                                        | ・環境コンサルタントや地域おこし協力隊                    |

出典) 麻生智嗣氏のインタビュー調査結果をもとに作成

### （３）中間支援組織におけるコーディネイター人材の課題

表２に示す中間支援組織へのインタビュー調査から、コーディネイター人材に関する課題を次のように整理することができる。

#### ① 環境・経済・社会（特に経済面）を統合的できる人材の不足

企業間のマッチングなどを行うなど、企業に詳しく、経済面に貢献できるコーディネイターが不足している。このため、環境、経済、社会の三側面の課題を一気通貫で考えることのできるコーディネイトが不十分となる。

#### ② 行政職員に依存したコーディネイトにおける異動問題

官民連携で実施しているが、「官」に依存したコーディネイト機能になっており、異動により、「官」の機能が急激に弱まる状況が発生し、それを埋めるために時間とコストがかかる。

#### ③ 民間のコーディネイターへの属人的な依存

民間のコーディネイターが活躍していても、少数による属人的な働き方になっており、そのボランティア精神やプロボノ精神に依存している状況である。その人材がいなくなった場合に、運営が機能しなくなる可能性がある。

## ６．東近江市の三方よし基金の事例

東近江市は、地域の選択として、あえてSDGs未来都市としての採択を得ていない地域であるが、食、エネルギー、福祉等の多分野において、多種多彩のコミュニティ・ビジネス<sup>6</sup>が立ち上げられている。このコミュニティ・ビジネスを、資金面で支援している中間支援組織が「公益財団法人東近江三方よし基金（以下、三方よし基金）」である。

三方よし基金による支援には投資、融資、助成の３つがある。重要なことは、三方よし基金は資金的支援だけでなく、調査・研究、情報提供等の機能を持ち、事業への伴走、関係者をつなぐといった役割を果たしていることである。

さて、この三方よし基金において、コーディネイターを務めているのが、事務局局長である山口美知子氏である。林業の技術職として滋賀県庁に採用され、庁内の環境政策の担当課で仕事をしていたときに、異なる業界をつなぐ政策を作る仕事にはまり、その継続を希望した結果、東近江市の職員となった。東近江市では第二次環境基本計画の策定等をサポートし、同計画で示された施策が三方よ

し基金であったことから、その実現を担おうと市の職員を退職し、三方よし基金の常務理事兼事務局長となった人物である。

三方よし基金という中間支援組織の状況から、コーディネイトを担う組織と人材のあり方として、次の3点を指摘することができる。

#### ① 中間支援組織の担う役割の位置づけ

三方よし基金の環境・経済・社会の統合的向上が必要だという理念は、2030年の東近江市の将来像を市民・事業者・行政の対話により検討する場として、市内外で活躍するキーパーソン26名で構成された「環境円卓会議」で確立され、共有されたものである。また、ここで地域資源の再評価と地域経済循環の意義が確認され、それが三方よし基金の設立につながっている。こうした理念的な基盤をもって、中間支援組織が意義づけられていることがその意義を正当化するうえで重要である。

#### ② 立場の異なる仕事を経験し、俯瞰的な視点を持ったコーディネイターの存在

三方よし基金のコーディネイターを務める事務局長は、県、市の仕事を経験し、俯瞰的な視点を学んできたからこそ、実践を担うコーディネイターとしての役割が果たせている。

#### ③ 中間支援だけではない、役割の異なるキーパーソンの重要性

東近江市のアクティブな状況は、コーディネイターだけでなく、市民協働を進めた首長（プロデューサー）、地域活動のリーダー（ディレクター）、中間支援組織のスタッフ（コーディネイター）、地域活動を評価し、支援する地域外の研究者（アドバイザー）といった役割を持つ人々によって、生成・継続・波及されてきた。

### 7. 統合転換コーディネイトを担う人と組織のデザイン

#### （1）統合転換コーディネイターの要件

ここまでの研究成果をもとに、統合転換コーディネイトを担う人材の要件として、2点を示す。

#### ① 異なる対象・分野につながる基盤となる多重成員性

統合転換コーディネイターは異なる対象・分野をつなぐことが仕事となるが、異なる対象・分野のそれぞれについて、知識や経験、あるいはネットワークを持

っていることが重要である。例えば、環境と経済をつなぐのであれば、環境問題を学んだうえで、ビジネス経験をもっていることがコーディネイターとしての仕事を円滑なものとする。地域の活動をつなぐのであれば、地域の人的ネットワークを持っていることが必要となる。

こうした異なる対象・分野への理解と親和性を確保するうえで、コーディネイター人材の多重成員性（柿野 2019）、すなわち異なる対象・分野への所属による仕事の経験が重要である。仕事の経験によって得られるものは基礎的な知識だけでなく、人的ネットワーク、対象に応じた翻訳力（コミュニケーション力）、対象を理解し、寄り添う伴走力、立場を超えて考えることができる俯瞰力である。

## ② 統合転換に関する理論的正当性の学習と確立

統合転換コーディネイターにも、仕事に取り組む動機が必要である。東近江市の三方よし基金の場合では環境円卓会議で形成された地域づくりのビジョンが中間支援組織の必要性と正当性を確立させ、そこで学習した人材がコーディネイターとして仕事をしている。中間支援においては、どのような地域をどのような方法で実現していきたいか、目指す社会の理想とは何か等について、学習を経た人材の確保が必要である。

ゼロカーボンや気候変動適応においては、気候変動対策と地域活性化を両立させる社会についての思索や実践を経て、目指すべき 2050 年の社会について理想と理念を持った人材が不可欠である。SDGs 未来都市についても、SDGs の重要な理念である社会的包摂等について、深い理解とその実現に向けた思いを確立している人材がコーディネイターとなる必要がある。

統括転換コーディネイトの理論的正当性を持たないと、ボランティア精神や社会貢献意識が十分に発揮されないだろう。

## （２）統合転換コーディネイターが活躍できる組織の配置

統合転換コーディネイターという人材さえ確保できれば、地域づくりが円滑に動き出すわけではない。統合転換コーディネイターが活躍できる組織をつくり、その組織が機能する仕組みをつくる必要がある。この仕組みの構想を図 2 にまとめた。以下に説明する。

### ① 基礎自治体（市町村）の行政内部に分野横断的な統括部署を設置するととも

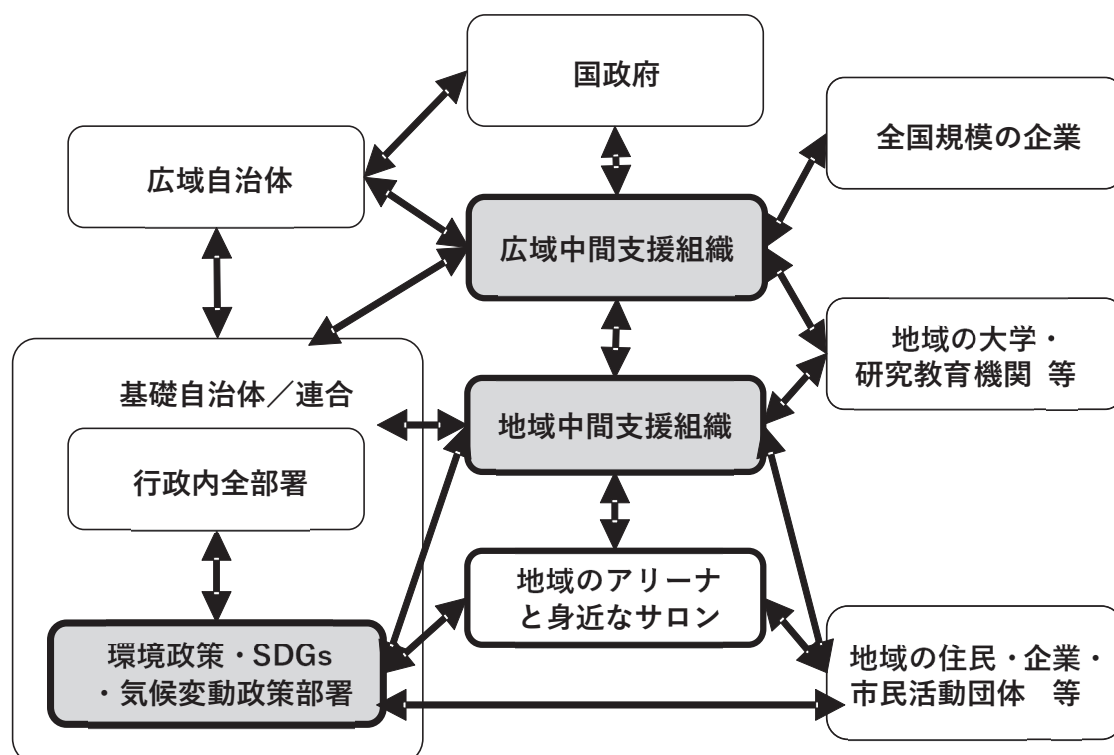


図2 地域における統合転換コーディネイトを担う人と組織のデザイン

に、行政外部に中間支援組織を設置する。

- ② 基礎自治体（市町村）の規模やこれまでの実績等から、中間支援組織を設置することができない場合、複数の基礎自治体の連合による中間支援組織の設置を行う<sup>7</sup>。
- ③ 広域自治体（都道府県）レベルでの中間支援組織を設置し、基礎自治体における中間支援組織の支援、あるいは基礎自治体の直接支援を行う。
- ④ 中間支援組織に統合転換コーディネイターが信頼され、良い待遇が得られるように、ポストやチームを確立する。
- ⑤ 中間支援組織におけるチームは、地域の企業、大学・研究機関等と連携して構築・運営する。

なお、この仕組みの中で、基礎自治体レベルの中間支援組織が担う機能としては、次のことが考えられる。

- ① （気候変動への緩和と適応、SDGsを一体として推進する）持続可能な地域づくりに関連する計画策定・進行管理機能
- ② 関連する地域内で連携して進めるプロジェクトの企画・推進機能
- ③ 関連する地域内の行政、企業、市民活動団体等の活動への助言・ノウハウ提供機能
- ④ 関連する地域内の行政、企業、市民活動団体等のマッチング、交流促進機能
- ⑤ 関連する調査研究、専門的な知見の情報共有、普及啓発、教育機能

## 8. デジタルプラットフォームを活用した人材育成・交流の場のデザイン

### （1）デジタルプラットフォームを用いた人材育成・交流の場の必要性

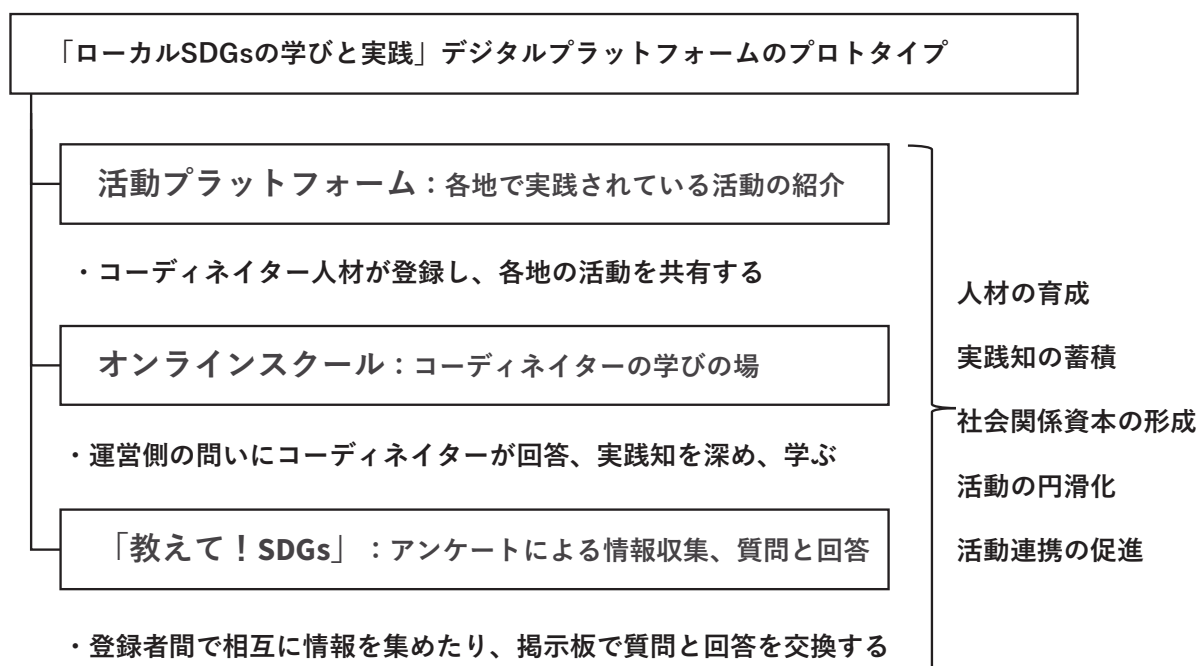
統合転換コーディネイターの要件とその活躍のための組織配置のあり方を示したが、さらに課題となるのは、統合転換コーディネイターとしてのスキルを持った人材が各地域にいるわけでないことである。かといって、先進地で活躍する統合転換コーディネイターのような人材の登場を漫然と待っているわけにはいかない。そこで、統合転換コーディネイターとしての可能性をもった人材（多重成員性を持った人材）を任命し、その育成のための研修と実践を通じた育成の仕組みをつくる必要がある。

この育成のためには、一度きりの研修では不十分であることから、研修を繰り返し行う仕組み、さらには研修での学びを活かし、活動を行い、その活動での課題を持ち寄り、さらに研修を行うような学習と実践を往還するような場をつくることが期待される。また、日常的な業務の中で出てきた課題について意見交換を行う場をつくり、それによる業務支援と学習を行うような仕組みも考えられる。

こうした学習と実践の往還、あるいは一体化を図る場として、デジタルプラットフォームが有効である。オンラインの場合は、参加者が自分のペースや都合に合わせてアクセスする自由度があり、投稿内容が蓄積されることで実践知の蓄積ができるからである。

### （2）「Decidim」を活用したデジタルプラットフォームの構成イメージ

上記のような考え方から、「Decidim」というオープンソースを活用したデジ



出典）東健二郎氏の資料より

図3 コーディネイターを育成し、活動を支援するデジタルプラットフォーム

タルプラットフォームの構成イメージを図3のように作成した。

プラットフォームのユーザーは、気候変動への緩和と適応、SDGs 等に取り組む仕事をしている中間支援組織のコーディネイター（あるいはその候補者）である。構成においては、オンラインスクールという学習の場だけでなく、各地での活動を紹介するコーナーや参加者へのアンケートを持ち、参加者に役だつ情報が蓄積、発信される場となることも狙っている。

この構想に基づくプラットフォームのプロトタイプは既に作成済みであり、プロトタイプを用いた試行的運用を行い、その結果をもとに見直し、統合転換コーディネイトの現場に役立つ仕組みを構築していくことが考えられる。

## 9. まとめと今後の課題

本研究では、今日の持続可能な地域づくりにおいて、重要な取組課題となっている気候変動への緩和と適応、SDGs の推進について、関連するこれらの取組みを統合転換コーディネイターとその活躍の場としての中間支援組織を取り上げ、

地域の調査と考察を行った。

この結果、①統合転換コーディネイターや中間支援組織を設けていない地域が多いこと、②統合転換コーディネイターや中間支援組織を設置したとしても、その役割を担う人材の確保や育成が十分ではないこと、③統合転換コーディネイターが活躍する地域はあるものの、その継続性に課題があることを明らかにした。

これを踏まえ、本研究では、統合転換コーディネイターの要件と中間支援組織の配置のあり方を整理し、さらに統合転換コーディネイターを育成・支援するデジタルプラットフォームの構想までを示した。

今後は、本研究の成果を出発点として、実践の場でのデジタルプラットフォームの試験運用を行い、評価、見直し、普及を進めていくことが今後の研究課題となる。

また、関連する政策の分析と課題解決の方法の提案を精緻化することも今後の課題である。統合転換コーディネイターが活躍することを考えると、既存の脱炭素先行地域、地域気候変動適応センター、SDGs 未来都市等の政策が不十分な点もみえてくる。そもそも、リソースに制約がある地方自治体においては、これらの政策を別々に推進することは困難であり、より一体的に推進することが必要となる。では、「気候変動の緩和と適応、SDGs を統合的に推進する政策とはどのようなものか?」。このリサーチクエストに答えることが次の研究課題となる。

また、統合転換を進める具体的な方法論や統合転換コーディネイターの仕事に用いる社会技術を具体的に明らかにすることも研究課題となる。本報告の最初の方に、「つなぐ」ことについては、①行政内の担当部署間や産学官・地域間の連携・共創、②環境・SDGs 対策と産業振興とウェルビーイングの向上等との統合のデザインが重要であると記した。また、「かえる」ことについては、③リフレーミングによる慣性の規範や方法の変革・転換とともに、④Z世代等の若い世代の参加と主導による転換が重要であるとした。これらに関連する理論知と実践知を収集、整理し、統合転換コーディネイターに提供していくことが必要である。「中間支援の現場に使える統合転換のための社会技術とはどのようなものか?」。このリサーチクエストに答えることもまた今後の研究課題である。

## 謝辞

本報告は 2022 年度しあわせ研究費（研究テーマ：地域政策転換のマネジメント・コーディネイトを担う人材・体制・道具のデザイン～ゼロカーボン・気候変動適応・ローカル SDGs の先行地域の調査とデジタルプラットフォームの活用を中心として）の助成を受けたものである。

## 注釈

- 1 Decidim は、2016 年にスペイン・バルセロナで誕生した参加型合意形成プラットフォームである。プログラムのソースコードを自由に利用・改変・再配布できるオープンソースとして開発され、2022 年時点では世界各地 450 以上の組織で利用されている。日本では、一般社団法人コード・フォー・ジャパンが中心となって Decidim の日本語化を進め、兵庫県加古川市で日本初の取り組みがスタートし、その後、全国各地での活用が進められている。
- 2 研究会は筆者が代表を務め、下記のメンバーで構成される。このうち、麻生氏が SDGs 未来都市の中間支援組織の調査、東氏がデジタルプラットフォームの構想を担当した。  
白井 信雄 武蔵野大学工学部サステナビリティ学科 教授  
東 健二郎 一般社団法人コード・フォー・ジャパン Decidim 担当  
麻生 智嗣 合同会社サスティナブル・デザイン都市戦略研究所  
小澤 はる奈 環境自治体会議環境政策研究所 理事長  
高橋 敬子 未来のための ESD デザイン研究所 代表  
増原 直樹 兵庫県立大学環境人間学部 准教授  
松本 明 高知大学地域協働学部 准教授
- 3 持続可能な地域創造ネットワークの全国大会は、2023 年 2 月 9 日・10 日、武蔵野大学 有明キャンパスを会場として、オンライン併用で開催された。
- 4 熱中症対策としてのエアコン使用という適応策は、エネルギー消費量を増やすというように、緩和策と適応策がトレードオフの関係になる場合がある。一方、再生可能エネルギーの使用は化石燃料による発電を代替することで、二酸化排出量を減らす緩和策であるが、同時に豪雨や台風による停電の際に独立電源として使えるという意味で適応策であり、シナジーを発揮する。トレー

ドオフを解消し、シナジーを発揮できる緩和策と適応策の両立策を進めることが求められる。

- 5 従来より熱中症対策や農作物の高温障害対策、水土砂災害対策等といった気象災害対策は進められてきた。これらは適応策といわれていなかったものの適応策に相当する潜在的適応策であるが、こうした従来の対策を適応策として位置づけるだけでは不十分であり、従来の対策に追加する追加的適応策の創出が必要となる。例えば、長期的な水災害の進行を想定した土地利用の変更を進めること、気温上昇を想定した作物の転換等を図ることなどが追加的適応策に相当する。
- 6 コミュニティによるコミュニティのためのビジネスのこと。ボランティア活動や行政による地域施策と同様に公益性を目的とするが、活動による一定の利益を得ることでビジネスとして実現しようとしている点が異なる。
- 7 オーストリアの気候変動適応モデル地域では、1つの地方自治体を指定するのはなく、2つの地方自治体のペアを指定しているとしている（高橋敬子氏の調査による）。2つの地方自治体をペアとすることで、地域間の比較分析や連携による事業創出が可能となる。

## 参考文献

- 柿野成美（2019）「地方自治体における消費者教育コーディネーター 配置上の課題-学校との連携を目的とした人材に着目して」『消費者教育』39 巻, pp.99-108.
- 齊藤由実子（2013）「自治体組織における多文化社会コーディネーターの可能性」『シリーズ多言語・多文化協働実践研究』
- 佐藤暢（2021）「組織間関係論にもとづく産学官連携メカニズムの解明とコーディネータの機能」『高知工科大学紀要』
- 平岡俊一（2007）「市民参加型環境政策形成におけるコーディネーターとしての環境 NPO—京都府城陽市の事例から—」『ノンプロフィット・レビュー』7 巻 1 号 pp. 13-2.
- 平岡俊一（2016）「地域再生可能エネルギー事業における中間支援組織の活動と機能」『環境情報科学論文集』Vol.30

Wal, Zeger van der. (2017) The 21st Century Public Manager: Challenges, People and Strategies, London: Palgrave, pp. 1—5.

白井信雄・大和田順子・奥山睦編著 (2022)『SDGsを活かす地域づくり：あるべき姿とコーディネイターの役割』晃洋書房

# SDGs 意識・行動変容調査

## ～学習効果によるコンピテンシーの変化～（その 3）

白鳥 和彦

Musashino University Creating Happiness Incubation 研究員  
武蔵野大学 環境学研究科教授

薄羽 美江

Musashino University Creating Happiness Incubation 客員研究員  
株式会社エムシープランニング 代表取締役

### 要約

ミレニアル世代や Z 世代の SDGs の意識や行動の変化を調査した。令和 3 年、4 年に続き、都内私立大学の学生を対象として、SDGs に関する 5 つのコンピテンシーのレベル（想像力、情報力、学習力、行動力、達成力）評価および定性的な意見調査を、前期初めと後期末の 2 回行った。学習により SDGs の学習力、情報力が向上していることはこの 2 年間と同様であった。また、行動力が変化していないことも同様の傾向であった。コロナ禍の影響が引き続き残っているためと思われる。環境経営系科目での学修が学生の意識を引き上げる傾向が明確となった一方で、経済的な側面や生活圏の制約などから、身近な事例には意識を持つものの地球環境や社会課題などへの関心に結びつかないことも見て取れる。学生の状況に即した事例から、SDGs、地球環境問題、社会課題などに繋げていく学修や実体験を通しての学修が効果的であることが再認識された。

### 1. はじめに

#### （1）背景

ミレニアル世代や Z 世代の SDGs に対する認知度は高い一方、それら世代があらゆる環境・社会問題に意識的であると必ずしも言えない状況であるなか、これからの社会を担う若者世代が SDGs を知り、SDGs を意識した行動を取るために、学校での授業をはじめとして、教育機関の学習が果たす役割は大きい。

筆者（白鳥）は、2020 年度、2021 年度と、学生の SDGs への関与度と意識・行動の変容について、都内私立大学（B 大学）の学生を対象として行った。前期末/後期初めに 1 回目、後期末に 2 回目の調査を行い、この間における変化を比

較分析した。過去2年間の調査では、環境・社会問題に関する何らかの学習をすることにより、想像力、情報力、学習力が向上していた。また、行動力や達成力についてはあまり向上が見られなかった。この傾向はこれらの世代が共通する傾向であるのか、どのような教育機会や学習内容が意識向上や行動変容に有効なのか等について継続的に研究していく必要がある。

## （2）本研究の目的

本研究では、学生のSDGsに関する意識・行動変容につながる要因を調査し、どのような学習や行動が効果的にSDGsに関する意識・行動変容を向上させていくかの検討に資することを狙いとしている。

環境やSDGsに関する学習が多いと、SDGsの意識や行動レベルが高くなることが想定出来ることから、属性や学習効果によりSDGsに関する意識・行動変容の差異を見出すことを狙いとする。

この変容の差異や若者世代の傾向について、継続的に行うことが必要であると考え、環境・社会問題に関する学習効果について3回目の調査分析を行った。今年度は、他の属性との比較や、学生の意見（後述する定性アンケート）に焦点を当て分析を行うこととした。

## 2. 研究の方法

昨年、一昨年に続き都内私立大学経営系学部の学生（以下B大学という）を対象<sup>1</sup>として下記の方法をとった。

- ① オンラインによる「SDGs サーベイ」<sup>2</sup>を利用し、上期講義の初めおよび下期最後の講義時の2回実施し、その間の意識や行動の変化について比較。
- ② 上記サーベイ結果の分析を補足するために、サーベイ回答後に、学生自身が意識や行動の変化をどのように認識したか等について定性的なアンケートを実施。

### （1）定性アンケートについて

「SDGs サーベイ」を行った後に表示される5つのコンピテンシー（想像力、情報力、学習力、行動力、達成力）のレベルに対し、高い点数が出たコンピテン

シーに対する自分なりの意見、低い点数が出たそれらに対する自分なりの意見、さらに、「こんな学習があれば、こんな体験があれば、SDGs の意識が高くなりそうだと思うこと」について、自由記述にて調査した。定性アンケートの収集は同大学の LMS で回収した<sup>3</sup>。

## （2）調査対象および実施時期

B 大学で経営系の学部で「環境経営」に関する講義を 2022 年度に受講した 2 ～ 4 年生を対象とした。カリキュラム上では環境系の講義は少ない。「SDGs サーベイ」および定性アンケートは、昨年度と同様な方法とし、1 回目を 2022 年 4 月下旬（一部は遅れての回答あり）、2 回目を 2022 年 12 月に行った。サーベイの実施にあたっては、学生に対し「SDGs サーベイ」の URL および入力方法を伝え、各自が自由時間にサーベイへの回答を行った。サーベイへの回答では、個人が公開されることのないように注意しつつ、1 回目と 2 回目の回答、および定性アンケートの回答が関連付けられるような調査回収を行った。

## 3. 調査結果

### （1）調査回答数

「SDGs サーベイ」については JEI のシステムより、対象学生の回答データ（50 問の素点）を抽出した<sup>4</sup>。1 回目の有効回答数は 214 件、2 回目は 198 件であった。定性アンケートは、前期後期 2 回の調査結果の比較が出来る回答として、172 件の回答が得られた。

### （2）サーベイ結果分析

JEI のシステムより抽出した第 1 回目、第 2 回目の回答データより、5 つのコンピテンシーレベルについて、回答者全体の平均ポイントを算出した。図 3.1 に示す。また、比較のため、昨年度一昨年度の平均ポイント図を併記する（図 3.2）。

過去 2 年間の調査と比較して同様に、1 回目より 2 回目のコンピテンシーが向上している。「SDGs サーベイ」では、知らない、わからないという回答を中心に、行動できていないという回答は、環境負荷を与え続けるものとしてマイナス回答が掲出される設計となっている。環境経営系の授業を受けて、その後に全体

的にレーダーチャートの5つのコンピテンシーが伸長を見せているのは、それまでの知らなかったことを知ることができている結果であろう。

一方で、3年間とも行動力の低さが顕著に示されている。特に2022年度の行動力の伸長が低かった。

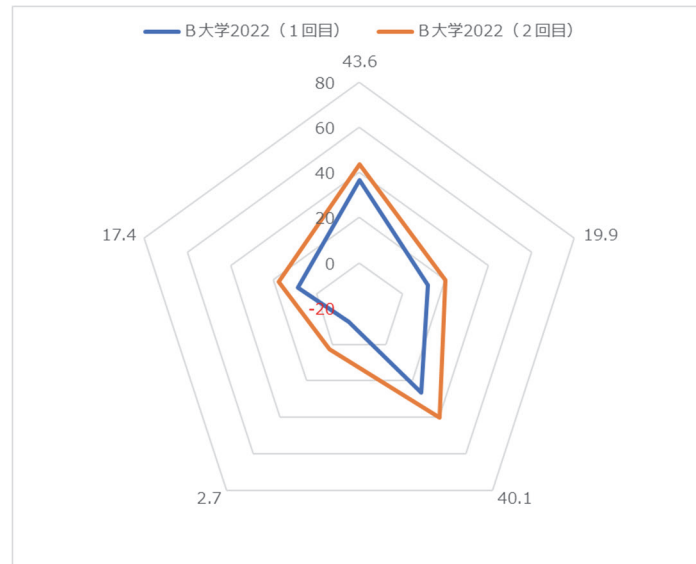
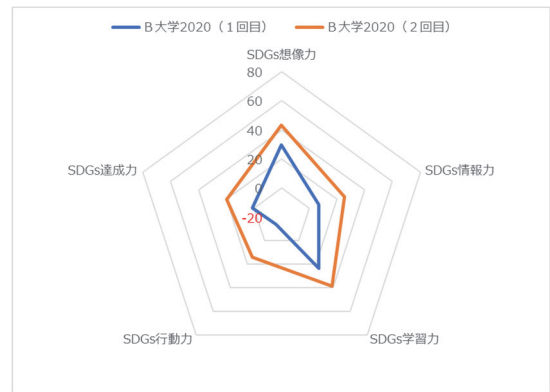


図 3.1 B 大学のコンピテンシーレベル（1回目、2回目の比較）



a) 2021 年度

1 回目 275 人、2 回目 168 人



b) 2020 年調査

1 回目 168 人、2 回目 127 人

図 3.2 B 大学コンピテンシーレベル 過去年度の比較

「SDGs サーベイ」50 問の設問毎の平均ポイントについて、1 回目と 2 回目それぞれのポイントおよびその差を図 3.3 に示す。この図の横軸は「SDGs サーベイ」50 問の設問となっている。

図 3.3 に相当する過年度データは、ここでは図示しないが、3 年間で傾向には変化がない。

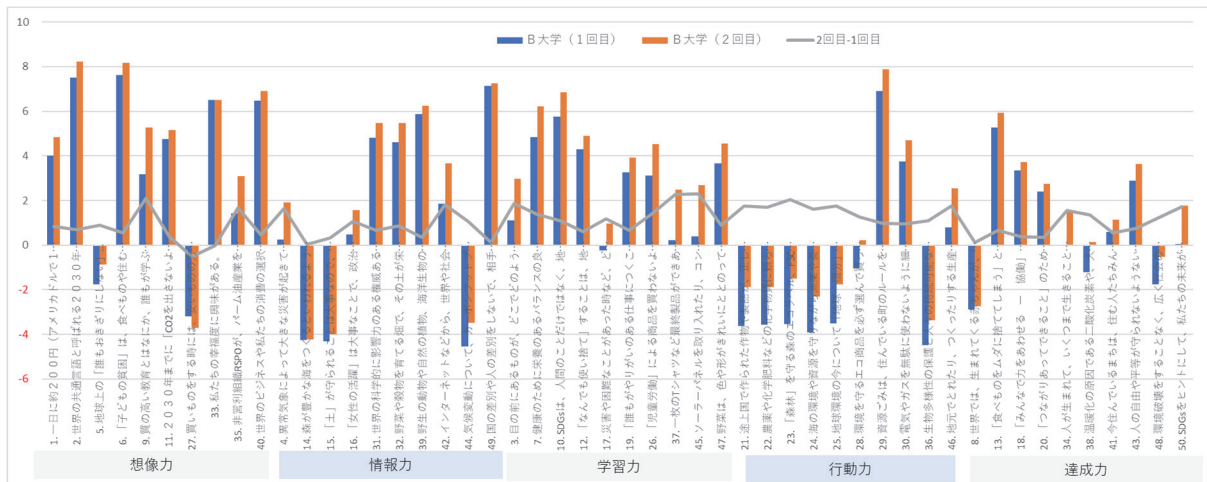


図 3.3 サーベイ回答ポイント（1 回目と 2 回目の比較）

想像力、情報力、学習力では概ね得点が高いが、「森が豊かな海をつくるといわれるように「水」を守ることは大事なので、川や湖や海を汚すことがないか、山や森がどのように守られているか、地域の人たちと調べることがある。」「土」が守られることは大事なので、どのような種がどのような畑でどのように育てられ、どのような作物が私たちの毎日の食事の栄養になっているか、日本や外国のことを調べることがある。」との設問においては得点が低い。

行動力、達成力は全般に低い得点であり、「途上国で作られた作物や製品が、正しく取引されていると認められているフェアトレードのマークがついている商品があれば、必ず選んで買う。」「農薬や化学肥料などの化学物質に頼らない、自然界の力で生産されたと認められている有機 JAS マークがついている農産物、加工食品、飼料、畜産物があれば、必ず選んで買う。」「森林」を守る森のエコラベル、FSC マークがついている紙や鉛筆、文房具や家具があれば、必ず選んで買う。」「海の環境や資源を守りながら漁業や養殖の持続可能な環境を配慮し

た MSC や ASC マークがついている魚、加工品があれば、必ず選んで買う。」。  
「地球環境の今について「地球一個分」の暮らしを考えることがある。」との設問に対しては2回目、すなわちある程度の学修をしたのちでも得点が低い状況となっている。

### （3）定性アンケート結果

定性アンケート（自由意見）から、コンピテンシーのレベル（想像力、情報力、学習力、行動力、達成力）が高い項目、または低い項目に対する理由（学生自身の意見）、今後の意識や行動向上に向けた方策を分析した。分析にあたっては、回答数が二百以上と十分な回答があることから、テキストマイニングを用い<sup>5</sup>、要因やキーワードを把握した。なお、テキストマイニングにあたっては、学生の記述した文言のなかで、以下の分析に不要でかつ出現頻度の高い言葉（「SDGs について・・・」、「・・・と思う」など）を削除している。

代表的なマイニング結果を図 3.4～図 3.8 に示す。これらは昨年度と同様な単語の出現が見られた。また代表的な意見を列記する（          は筆者加筆）

#### ■ 名詞 - ■ 動詞

| 名詞 - 動詞               | スコア  | 出現頻度     |
|-----------------------|------|----------|
| からだ - 思う              | 0.77 | 5        |
| 知識 - 得る               | 3.00 | 3        |
| 機会 - 増える              | 2.00 | 3        |
| 授業 - 学ぶ               | 0.92 | 3        |
| 環境経営論 - 学ぶ            | 0.92 | 3        |
| 想像 - できる              | 0.52 | 3        |
| 環境 - 考える              | 0.29 | 3        |
| 点数 - 出る               | 2.00 | 2        |
| 責任 - 気づく              | 2.00 | 2        |
| ニュース - 見る             | 1.50 | 2        |
| 問題 - いける (否: 100.00%) | 1.50 | 2 (否: 2) |
| 身 - つく                | 1.20 | 2        |
| 知識 - 知る               | 0.86 | 2        |
| 幸せ - 感じる              | 0.50 | 2        |
| 行動 - できる              | 0.26 | 2        |

図 3.4 想像力が高い理由について定性意見 係り受け解析

<想像力が高い理由についての代表的意見>

- ・この1年間で社会的な問題や環境問題について学ぶ機会が増え、それについて考え、意見を持つことが増えた。
- ・ニュースやインターネットでSDGsや世界の状況を調べて、自分には何ができるのか考えることが多い。
- ・何をしたら温暖化が軽減できるか、苦しんでいる児童を救うことができるのかというようなことについて考えることができている。
- ・様々な内容を学んだため、視野がひろがった。何故、このようなマークを付けるようになったか、何故このような問題解決に取り組んでいるかなどを知った。
- ・授業を通して環境について学んだことで、「未来の世界がこうなったらいいのに」と想像できるようになったと考える。学んで環境問題についての状況を知った。
- ・自分の中で環境のために何か出来ることはないかと考えることがあるから。

■ 名詞 - ■ 名詞

| 名詞 - 名詞    | スコア  | 出現頻度 |
|------------|------|------|
| 環境経営論 - 授業 | 0.77 | 4    |
| 授業 - 学習    | 0.39 | 3    |
| 講義 - 受講    | 1.50 | 2    |
| 環境経営論 - 講義 | 0.40 | 2    |
| 大学 - 講義    | 0.40 | 2    |
| 環境経営 - 講義  | 0.40 | 2    |
| 授業 - 就職活動  | 1.00 | 1    |
| 授業 - 履修    | 1.00 | 1    |
| 授業 - 先生    | 1.00 | 1    |
| 授業 - ゼミ    | 1.00 | 1    |
| 授業 - 紹介    | 1.00 | 1    |
| 授業 - テーマ   | 1.00 | 1    |
| 講義 - おかげ   | 1.00 | 1    |
| 学習 - 高さ    | 1.00 | 1    |
| 環境経営論 - ゼミ | 1.00 | 1    |

図 3.5 学習力が高い理由について定性意見 係り受け解析

<学習力が高い理由についての代表的意見>

- ・講義で学ぶ機会がたくさんあり、自分でも買い物をする際に考えることが多々ある。
- ・SDGsを目にすることが多いし、授業でも触れたことから学習力が高くなっていると思う。
- ・授業やニュースで問題を知った時に、なぜそれが起こっているのかを考えることを意識しているし、それが自然とできるようになってきた。
- ・地球で起こっている問題を講義で知ってさらに自分で調べたりしていた。
- ・深くはないが知ろうとする、学ぼうとする力はあると考えるから。
- ・授業の学習だけでなくリアクションペーパーなどで授業とは別に調べる機会があったため、SDGs 学習力が高くなった。

| 名詞・動詞                | スコア   | 出現頻度      |
|----------------------|-------|-----------|
| 行動 - 移せる (否: 13.33%) | 15.00 | 15 (否: 2) |
| 行動 - 移す              | 9.75  | 12        |
| 商品 - 買う              | 4.20  | 6         |
| 行動 - 思う              | 0.84  | 6         |
| 行動 - 起こす             | 3.00  | 3         |
| マーク - つく             | 1.33  | 3         |
| 環境 - 考える             | 0.29  | 3         |
| 原因 - 考える             | 0.29  | 3         |
| 個人 - できる             | 0.26  | 3         |
| 理由 - 思う              | 0.24  | 3         |
| 行動 - 繋がる             | 2.00  | 2         |
| 記事 - 読む              | 2.00  | 2         |
| 身 - 着ける              | 2.00  | 2         |
| 行動 - とる              | 1.50  | 2         |
| 頭 - わかる              | 1.20  | 2         |

図 3.6 行動力が低い理由について定性意見 係り受け解析

<行動力が低い理由についての代表的意見>

- ・取り組みのある商品を購入したり、自身の貯金を自由に使える財力がまだ無いから行動に移せていない。
- ・環境について行動することができるのは大企業など資金に余裕のある企業だけであり、人でもお金に余裕のある人しか環境について考えることのできる人がいないのではないか。

- ・行動していることはゴミの分別など簡単なことであり、環境ラベルがついている商品購入やそれに伴う知識がない。
- ・マイバッグやマイボトルを持ち歩いたり、通学に公共交通機関よりも徒歩や自転車を選択するということに、小さな行動はしています。しかし更にレベルの高い行動がとれているかどうかを問う質問が多かった。
- ・想像することは出来ても、いざ行動するといったときにその方法の知識不足で行動に移せていない。
- ・世界で起こっている問題の深刻さをわかっていない。
- ・知っていてもなかなかその商品に値段的な問題で手を出せなかったり、ひとつの行動をするときに、SDGs のことが頭にないことが多く、まだ染み付いていない。
- ・行動を起こすところまで行くのは、ハードルが高いと感じます。
- ・金銭的な問題から、どうしても値段が安い商品を選んでしまう傾向がある。
- ・友達や周りの人と積極的に SDGs について議論などを行うことが殆どない。
- ・ネットショッピングの際だと、これは環境問題に対して努めている商品だとすぐわかるのでそのような商品を購入することができるが、実際に外で買い物する際は自分で商品の裏面などを見るという作業が必要。
- ・興味があっても実際に何をしたらいいのか分からなかったり、自分だけが何か行動したところで変化が起こるのかなど考えてしまい、どこか他人事のように感じてしまっているからだと思う。
- ・環境ラベルを理由に商品を購入するということはまだ少なく、たまたま欲しかった商品に環境ラベルが付いていたり、機能や価格に差がなかった時などは選ぶようにしているが、最初にラベルを意識して購入することはほとんどない
- ・私よりも母が買い物をすることのほうが多いので、意識もしないし考えることがないから、家族で環境マークの意味の共有とかを行うことができればいいのではないか。
- ・食べ残しはしない、ゴミの分別をするなどの簡単なことはしている。しかし、資金を寄付したり、ボランティアに参加したりすることはなかった。
- ・講義で学び、知識は最低限ついたと思うが、それを実際に自身の生活で行動に移すまでのハードルが高いからだと感じた。頭ではわかっているけど、実際に行動できなかったため、今後は積極的に行動に移したい。

| 名詞・動詞                  | スコア  | 出現頻度     |
|------------------------|------|----------|
| 行動 - 移せる (否: 66.67%)   | 3.00 | 3 (否: 2) |
| 行動 - 移す                | 2.40 | 3        |
| からだ - 思う               | 0.60 | 3        |
| 行動 - 伴う                | 2.00 | 2        |
| 商品 - 買う                | 1.00 | 2        |
| 食材 - 買う                | 1.00 | 2        |
| 行動 - うつせる              | 1.00 | 1        |
| 行動 - 始める               | 1.00 | 1        |
| ニュース - 取り上げる           | 1.00 | 1        |
| 話題 - 出る                | 1.00 | 1        |
| きっかけ - 作る (否: 100.00%) | 1.00 | 1 (否: 1) |
| 知識 - つける               | 1.00 | 1        |
| 商品 - 選ぶ                | 1.00 | 1        |
| 授業 - 学ぶ                | 1.00 | 1        |
| 授業 - 受ける               | 1.00 | 1        |

図 3.7 達成力が低い理由について定性意見 係り受け解析

<達成力が低い理由についての代表的意見>

- ・ SDGs に関しては国や企業規模の話であるという意識がどこかにあって自身のことには置き換えられていない。
- ・ 家族や友人と会話の中で SDGs の話をする機会がない。自分から話すきっかけを作れていない。
- ・ 知識はあっても、いざ自分が行動や発信をするのは難しいと感じる。
- ・ 問題意識は持つことができるが、私が行動したところで世界に対して影響はないと感じる。
- ・ SDGs に関して考えることはあるが、実行は全くしていない。
- ・ 学習力や想像力が高くても、実行に移すことができていない。
- ・ エシカルな消費に関してはそもそもあまりモノを買わないので環境ラベルなどを見ることも少なく、実行できるタイミングが少ない。

| 名詞 - 名詞     | スコア  | 出現頻度 |
|-------------|------|------|
| 環境 - 配慮     | 6.22 | 7    |
| 商品 - 購入     | 3.82 | 6    |
| 中学校 - 高校    | 4.00 | 4    |
| イベント - 参加   | 1.18 | 4    |
| ボランティア - 参加 | 1.18 | 4    |
| 世界 - 現状     | 0.91 | 4    |
| 学習 - 機会     | 0.44 | 4    |
| 行動 - 学習     | 0.43 | 4    |
| 生活 - 体験     | 0.39 | 4    |
| 小学校 - 中学校   | 1.71 | 3    |
| イベント - 開催   | 1.50 | 3    |
| 体験 - 学習     | 0.26 | 3    |
| イベント - 企画   | 2.00 | 2    |
| 商品 - ラベル    | 1.50 | 2    |
| 一般的 - 販売    | 1.50 | 2    |

図 3.8 コンピテンシーを高めるための方法についての意見に対するテキストマイニング 係り受け解析（名詞一名詞）

#### <コンピテンシー向上に向けての特徴的な意見>

- ・実際に私たちが貧困の人々を救うためにはどのような施策を行うべきか考え、実践するプロジェクトなどがあれば、知識が深まるだけでなく今後の行動を変える一歩になると思う。
- ・国際交流プログラムや、国際協力プロジェクト、国際会議など、様々な教育プログラムを通じて、学生たちが異なる文化や地域の人々と協力して、世界中の課題を解決するためのアイデアを提案する機会を学校が積極的に導入していくことが大切だと思う。そうすることで、学生たちが国際的な視野を持つことができる。
- ・環境に良い商品を選ぶことや環境問題を意識することによってどれだけの効果があるのか目に見えてわかりやすく体感することができたらよい。
- ・大学生にでもできる取り組みを学べる機会。世界が直面している環境問題などは知っていても、あまりにも自分の生活とのスケールが違いすぎて、「私なんかには何もできることはない」とってしまう。
- ・教育環境が整っていない地域の状況をリモートで繋いで、現状を把握することで、先進国に住む私たちがどれだけ不自由なく生活できているのかを実感できるのではないかな。

- ・自らが直接現地に赴き、向き合うべき課題を目の当たりにすることでより環境に対する配慮や責任感をもつ。
- ・自分の行動がどの環境へ影響しているのか、SDGs への対策はできているか可視化する。スマホアプリなどで、身近なもので自分が地球環境の改善にどれだけ貢献したか可視化できるようにし、ポイントをつけるなど、個人個人が環境について気軽に貢献し SDGs への意識も高くなっていく。
- ・SDGs の取り組みに貢献できているという実感を体感する。
- ・自分の目で見えて、変化を感じられるような体験ができるとより良いと思う。
- ・近隣住民との関わりを増やす。地域の人と環境保護について話し合う。一地域、小さい範囲においても取り組みが必要である。
- ・学校以外で SDGs について触れる機会が少ないので、体験学習のような機会がもっとたくさんあるまたは周知する機会がもっとたくさんあれば意識が高くなるのでは無いか。
- ・お金をあまり持っていない大学生でもできる SDGs の活動。例えば、安価かつ、どのような商品を選択すれば環境に対してよい影響をおよぼすか。
- ・普段の生活の中で SDGs というものに触れる回数を多くするべき。

## 4. 考察

### （1）他の属性における SDGs 意識調査との比較

筆者（薄羽）は、本研究と同様な SDGs 意識に関する調査研究を、高校生を対象に行っており（薄羽 2022）、その結果との比較を試みる。

比較対象となる属性は、国内において文科省・環境省が推進している ESD（Education for Sustainable Development=持続可能な開発のための教育）プログラムにおいて、「高校生国際 ESD シンポジウム」を主催している T 高校（坂戸市）で、2019 年より「SDGs サーベイ」を用いて継続的に調査をしている。

2021 年度に行った調査は図 4.1 のようであった。

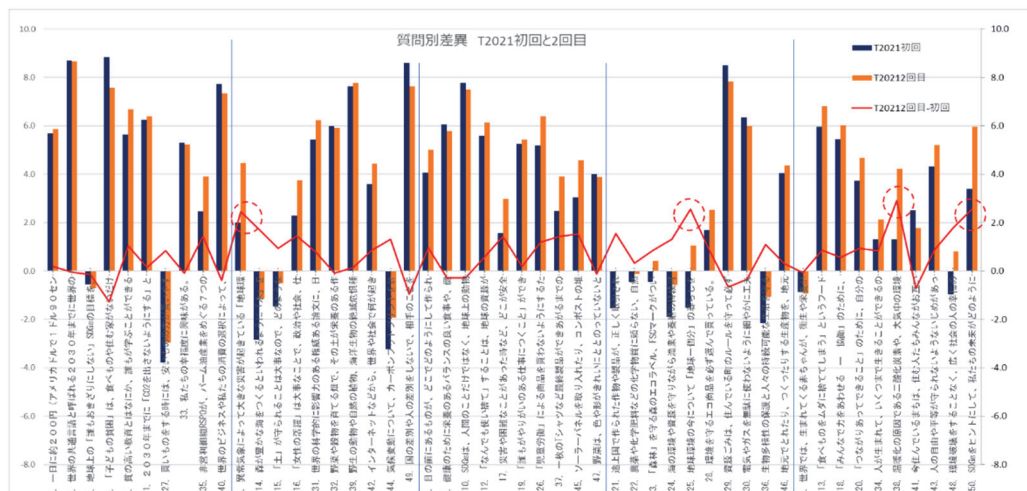


図 4.1 T 高校における SDGs サーベイ回答ポイント

T 高校の 2 回目の調査では、「異常気象によって大きな災害が起きている「地球環境の危機的状況」について、世界の情報を知っている。」（情報力）、「地球環境の今について「地球一個分」の暮らしを考えることがある。」（行動力）、「温暖化の原因である二酸化炭素や、大気中の環境汚染の原因となる二酸化硫黄の排出のことなど、世界規模のつながりあい話を話し合うことができる。」（達成力）などの設問ポイントが時に伸びている。「「子どもの貧困」は、食べものや住む家がないだけではなく、親が貧しいと子どもが教育を受けることができないという目に見えにくい問題なので、社会全体で解決しなくてはならない問題だ。」（想像力）、「国の差別や人の差別をしないで、相手のことをもっと知りたいと思う。」（情報力）、「資源ごみは、住んでいる町のルールを守って必ず分別して、しっかりきっちり出している。」（行動力）は 2 回目の調査でも高いポイントであるが

やや下がっている。

B 大学の結果を、これと比べると、情報力の 2 設問、行動力が低い傾向と同様である。

また、T 高校における 2019 年度の調査で、「SDGs サーベイ」後に自己診断を通じたアンケートからは、「行動が乏しい・認証商品マークの意味を知らない。学習を活かせていない。つまり、実行への知識が欠如。経験を積む。」「勉強はしていても行動につながっていない。クレジットカードを持っていないから寄付ができないが、それ以上の自分ができることを考えていなかった。」「良いことの想像力はあるのに行動ができていない。人から与えられたらできるが、自分からは取りに行っていない。」「行動力が低い。知っていてもやらない。お金を使うことには非積極的。想像や学習をしていても達成力には結びついていない。」といった意見があった。これらは、本研究で B 大学生が回答している達成度が低いことへの自己分析において定性アンケート回答に寄せられているコメントと近似している。

## （2）定性アンケートからの考察

「SDGs サーベイ」1 回目から 2 回目に得点がアップすることについて、定性アンケートの結果を分析すると、次のようなことが言える。

### ① 得点が高いコンピテンシーにおいて高い回答になった理由の推察

第一段階として、学生自らが情報を獲得している（テレビやニュース、授業を通じて）という実感コメントが想像力・情報力の高得点を支えている。

第二段階として、情報の「多さ」だけでなく、そこから関心を持ち、真因を考える「深さ」とグローバルアジェンダに向かう「広さ」に及んでいるという自己認識回答が高得点へのトリガーとなっている。

第三段階として、自らの内に閉じることなくとどまることなく、他者との連携、対話、情報伝達、行動など、自らの外への働きかけや環境配慮の実践を自己認識できているレベルに達している。

### ② 得点が低いコンピテンシーにおいて、なぜ低い回答になったかという理由の推察

第一段階として、日頃から自分から調べて情報を得ようという意識がなく情報が不足、または偏りがある

第二段階として、学んで得られた知識を自分ごととして理解ができていない。

どこか遠い他人事のように感じている。

第三段階として、知っても時間的理由や経済的理由から行動に移せていないし、情報を知っているだけで人に伝えるなどということがなかった。

以上のことを踏まえ、SDGs に対する意識・行動をさらに向上させるためには、

- ・実際に行動してみること、体験することから情報を得ること、自ら情報を取りに行くこと
- ・現地・現実・現状に触れることから認識をするリアリティを実際のボランティア活動などから得られること
- ・教育の重要性、初等教育から SDGs を身近にするような学習機会の必要性

といったことが必要であることが読み取れる。

T 高校の得点変化は、テーマやプログラム設定によって、着実に意識と行動変容が得られている事例とも言える。インドネシアフィールドワーク、コロナ禍中にあってはオンラインによる海外コミュニケーションなどを経験しており、現地・現物・現状把握を通じた実感を得ている。

SDGs 学習については、文科省の学習指導要領においては、3 年前に小学校に導入され、その後に中学、昨年 2022 年度に公民のカリキュラムに高校への導入がアクションラーニングを通じて活発に行われている。現大学生は、この点、SDGs 情報を大学授業で学び知識として得ることはできても、その活用や社会的影響においては自分自身の存在意義と結実させることにおいては未然と予測できる。定性アンケートに回答されているコメントのプラス原因には、知らなかったことを知ることができて世界観の広がりや現実的なリアリティの獲得がトリガーとなっており、一方、マイナスにとどまる原因には、情報を自らとの乖離として、授業にとどまっているためであろう。

## 5. まとめ・今後に向けて

以上のように、3 年間に亘り同大学・学部の学生を対象に、「環境経営」に関する講義を受講することによる意識・行動の変容を、「SDGs サーベイ」および直接の定性アンケートを用いて調査してきた。5 つのコンピテンシーにおいて、講義受講前に比べ受講後はそれぞれ向上しているものの、情報力や学習力は高

く、行動力や達成力は低いままであった。3年間同様な傾向であった。一連の研究期間はコロナ禍で学生は自ら行動することが制限されていたこともひとつの要因であろうが、行動力や達成力の得点が低いのは、多くの学生の傾向であると思われる。本研究から得られたことを要約すると、

- ・与えられた情報のみで自分が自ら関心を持って調べることができないことにより授業のための SDGs 理解となり、自分自身の中で一過性のものとなっている。

- ・頭でわかっているにもかかわらず金銭的に猶予可能な範囲の制限からもエシカル消費は高くつく意識が働き、安いものを選ぶことが必然となり、より良いはずのエシカル行動選択の上では実際にできていないことが多い。

- ・世界の状況を知ることがないので、狭まっている自分の身の回りの環境のことで世界観が閉じてしまっているため、SDGs は学習しても自分ごとにならずに遠くのことのように感じて行動に移せていない。

といったことが明らかになった。

意識・行動変容に向けては、身近なリアリティがあること、社会参画などの用意により今後の行動変容が期待されることと考えられる。

SDGs 17 のゴール達成は 2030 年アジェンダとされているが、2030 年を通過点としてその先に継続されなくてはならないものである。それは今回対象として回答した学生たちの人生そのもの環境変化、社会情勢、世界経済等に直結するものとなる。その実感をどのように得ることができうるか、5つのコンピテンシーを向上するためには、実践そのものを通じた個人の「ありたい姿」としての幸福感や達成感の醸成をはかる教育が、社会責任のひとつとして問われていくこととなろう。

ユネスコ（国際連合教育科学文化機関）の憲章全文の最初の部分には「戦争は人の心の中で生まれるものであるから、人の心の中に平和のとりでを築かなければならない」とある。この「築かなければならない」心の中の平和を尋ね、そのための自らの幸福を探究することの教育と、本 SDGs 教育がともにあることの、未来開発について能力開発が行われる HDI（人間開発指数）と SDGs の連携なども今後の課題として見つめていきたい。

## 謝辞

本論文は 2022 年度しあわせ研究費（研究テーマ：SDGs 意識・行動変容調査研究）の助成を受けたものです。

本研究を進めるにあたり、「SDGs サーベイ」およびアンケートに協力頂いた学生諸君に感謝申し上げます。

## 注釈

- <sup>1</sup> 対象となる学生は、同一属性（同大学・学部）であるが、同一学生ではない。
- <sup>2</sup> 「SDGs サーベイ」は、一般社団法人日本エシカル推進協議会（以下 JEI という）のエシカル教育ワーキンググループが開発したプログラムである。SDGs に関する 5 つのコンピテンシーのレベル（想像力、情報力、学習力、行動力、達成力）を評価するひとつのツールである。概要および設問は白鳥（2020）を参照。
- <sup>3</sup> 定性アンケートの回答内容については、個人情報や個人的な表記も含まれるため、集計した結果および代表的意見のみ本論文で掲載する。
- <sup>4</sup> 一般に公開されているサーベイでは 50 問それぞれの回答内容は得られない。
- <sup>5</sup> テキストマイニングは、ユーザーローカル社の AI テキストマイニング（Web 版）を使用した。

## 参考文献

- 薄羽美江（2021）「エシカル教育推進ワーキンググループオンライン自己診断ツール JEI SDGs Survey 実施調査 2018-2020 報告」2021 年 2 月。  
（<https://www.jeijc.org/ethical-summit-week/> 2022 年 3 月 8 日アクセス）
- 薄羽美江（2022）「JEI SDGs Survey -持続可能な開発目標の評価と EX -エシカル・トランスフォーメーション・考-」『産業と教育』No.831, pp.14-19
- 加渡いづみ・薄羽美江(2020)「SDGs 学習の視点から考える持続可能な能力開発のステップ：キャリアデザインのためのコンピテンシーの開発」『消費者教育』40, pp.47-57。
- 白鳥和彦（2021）「SDGs 意識・行動変容調査―（その 1）学習効果によるコンピテンシーの変化―」『武蔵野大学しあわせ研究所紀要』第 4 号, pp.58-74
- 白鳥和彦（2022）「SDGs 意識・行動変容調査―学習効果によるコンピテンシ

ーの変化ー（その2）」『武蔵野大学しあわせ研究所紀要』第5号, pp.123-137  
日本エシカル推進協議会(2017)「JEI SDGs online Survey」。

（<https://www.jeijc.org/topics/jei-sdgs-online-survey/> 最終アクセス 2023 年 3 月  
30 日）

# ジャンル準拠指導による英語ライティング指導の高校生への効果

渡辺 英雄 (武蔵野大学教育学部教育学科)

池田 達哉 (南山高等学校・中学校女子部)

## 要約

高等学校でのライティング指導の充実は課題であり、パフォーマンステストの導入が謳われる学校英語教育の中でこれまで以上に重要である。日本の高等学校においてこれまでライティング指導は単文レベルのものが多く、どのように英語の文章を指導するかは多くの学校で課題である。本研究では選択体系機能言語学の中で発達したジャンル準拠指導が高等学校における学習者のライティングに与える影響をテキスト分析、質問紙調査、インタビュー調査により明らかにした。分析により、ジャンル準拠指導により文章構成、文法の用法の向上が見られた。また、学習者はジャンル準拠指導について自身の長期的な英語学習の目標に貢献すると考えた。このことから、ジャンル準拠指導は学習者の英語ライティング能力と英語ライティングに向かう態度を向上させることがわかった。

## 1. はじめに

ライティング指導は日本国内外の学校教育において課題として扱われることが多い。そこには複数の要素がある。主要な要素の一つとして挙げられるのはライティング指導が単文レベルに焦点を当てた伝統的な指導法に留まっていることである。これは特に日本の学校教育に見られる傾向である。例えば石神、伊東（2008）の高等学校におけるライティング指導の授業改善の研究では、ライティング指導においては多くの高等学校では文法・訳読式の授業が行われており、英作文の問題集を学習者が取り組み、それを板書した英文を教員が訂正する指導が一般的であるとされている。もう一つのライティング指導の主要課題は理論と実践の乖離である。Grabe & Kaplan（1996）は中等教育や高等教育におけるライティング指導は研究成果とは独立して成り立っていることが多いと指摘している。具体的にはアメリカの高等教育及び高等教育の準備を行う中等教育のライティング指導ではプロセスライティングの方法が取られることが

多いがこの指導法が高等教育でのライティング活動にとってどれ程有効かという検証はあまり行われない。またライティング研究の中で、ライティング指導の理論を高等教育に応用している例は多いが、その場合ライティング指導の研究者が指導者となり効果を測定している。学校教育の多くの場面で研究の中で発達した理論を指導に活用されるためには、学校教員によって行われるライティング指導理論に基づいた指導においてどのような学習者の変化が見られるかを探求する必要がある。

上記の状況から本研究では、「ジャンル準拠指導というライティング指導の方法が学習者のライティングとライティングへの意識をどのように変えるか」を研究課題として行った。

## 2. ジャンル及びジャンル準拠指導法に関する先行研究

### (1) ジャンルとジャンル準拠指導

本研究では選択体系機能言語学 (systemic functional linguistics) で発達したジャンルの概念を用いた。選択体系機能言語学は Michael Halliday (Halliday & Matthiessen, 2014) によって考案された言語的枠組みである。この言語的枠組みの特徴は、言葉は文化的、社会的な背景により意味が作られ、解釈されると考えられていることである。またそのような文化的、社会的な背景の中で人々は言葉を選択して使用しているとされる。より具体的に言えば言語的

(textual)、概念的 (ideational)、人間関係的 (interpersonal) な要素から言語使用は選択されていると言える。Martin (1984) はジャンルとは段階があり、目的がある社会的な活動であると定義している。具体的なジャンルの種類は、Humphrey et al. (2012) が示す種類から見てとれる (図 1 参照)。それぞれのジャンルは目的を持ち、特定の文章構造と言語的特徴を有する。

図 1. ジャンルの種類とそれぞれの目的、文章構造、言語的特徴

| ジャンル                   | 目的                                 | 文章構造                               | 言語的特徴                                    |
|------------------------|------------------------------------|------------------------------------|------------------------------------------|
| 物語文<br>(Storytelling)  | 物語を伝える                             | 導入→出来事の<br>列挙                      | 具体的な登場人物、動詞の過去<br>形など                    |
| 反応文<br>(Response)      | 読んだ作品などについ<br>自分の意見を伝える            | 背景→意見                              | 評価する言葉、動詞の現在形な<br>ど                      |
| 手順文<br>(Procedure)     | 何かを行う手順を伝<br>える                    | 目標→材料→<br>手順                       | 命令文、具体的な言葉 (50ml な<br>ど)                 |
| 振り返り文<br>(Chronicling) | 歴史的な事柄につい<br>て伝える                  | 背景→出来事<br>の列挙→評価                   | 具体的な登場人物、登場人物に<br>関する描写など                |
| 描写文<br>(Description)   | 何かに関する数値や<br>特徴の情報を伝える             | トピックの特<br>定→描写                     | 特定の動詞や形容詞を使って細<br>かに描写する言葉など             |
| 説明文<br>(Explanation)   | ある事象がなぜ起こ<br>るのか因果関係など<br>を含めて説明する | トピックの紹<br>介→順を追っ<br>ての説明(因<br>果関係) | 因果関係を表す動詞 (英語では<br>lead to など) など        |
| 説得文<br>(Exposition)    | ある視点や考えが正<br>しいことを読み手に<br>説得する     | 背景→意見の<br>表明→議論→<br>意見の再表明         | 評価する言葉、関連を表す動詞<br>(英語では represent など) など |

このようなジャンルの種類を用いて行う指導に「ジャンル準拠指導」がある。ジャンル準拠指導では指導はサイクルであると考えられ、一つのジャンルの指導・学習が終わると次の指導につながっていくと考えられる。そして一つのサイクルは①指導背景・目標の設定、②モデル文の提示、③共同的ライティング、④自立的ライティングという4つのステップで構成されている

(Paltridge, 2001)。①指導背景・目標の設定では学習者が置かれた状況から指導を行うために適切なジャンルを設定する。②モデル文の提示では指導を行うジャンルのモデル文を提示して、文章構成や言語的特徴を学習者に示す。③共同的ライティングの段階では教員と学習者が協力してライティングを行う。各学習者に必要な活動を考えることが重要である。④自立的ライティングでは学習者が自ら設定されたライティング活動を行う。

## (2) ジャンル準拠指導法に関する先行研究

ジャンル準拠指導はこれまで多くの研究で指導効果が測定されてきた。米国などの英語が第二言語として扱われている地域では英語学習者はジャンル準拠指導により、ライティング能力を伸ばしたことが報告されている。例えば、Harman (2013) の研究では小学校の学習者はジャンル準拠指導により物語文における語彙結束性が向上した。Bunch and Willett (2013) の研究では、中学生の英語第二言語学習者が説得文のライティング能力を向上させたことがわかった。また学習者はジャンル準拠指導の中で明示的に指導された言語的特徴を使ったことがわかった。de Oliveira and Lan (2014) は物語文のライティング能力向上に関する事例研究を行った。ジャンル準拠指導により、単語・文法、文章構成の面でライティング能力が高まったとわかった。

英語を外国語として学ぶ環境でもジャンル準拠指導が英語学習者のライティング能力向上に役立つことがわかっている。Emilia and Hamied (2015) はインドネシアの大学で説得文を指導した際に学習者の説得文のライティング能力が上がり、学習者自身もその向上を認識した。同様に Wang (2013) と Yasuda (2011) の研究では、それぞれ中国と日本の大学でのジャンル準拠指導の学習者のライティング能力向上への効果が確認された。

これまでの研究によりジャンル準拠指導が学習者のライティング能力を伸ばすことは明らかになっている。ただこれまでの研究では物語文と説得文にジャンルの種類が偏っている。また学習者のライティング能力に焦点を当てた研究が多く、学習者がジャンル準拠指導をどのように捉えたか、今後の学習にどのようにつなげるかのような学習者の意識についての調査はあまりない。ジャンル準拠指導は英語ライティングの学習サイクルを促すことが特徴であるため学習者の意識についても調査が必要である。

## 3. 研究方法

本研究はジャンル準拠指導がどのように学習者の英語ライティング能力及び意識に影響するかを調べた。テキスト分析、調査紙分析、インタビュー分析を用いて分析を行った。学習者のライティングの文章構成、文法的特徴の観点からジャンル準拠指導実施前と実施後の比較分析を行った。調査紙ではジャンル準拠指導に関する意識や指導を受けてからの学習についてどのように捉えたかを調査した。インタビュー分析では半構造化インタビューを行い学習者のジャンル準拠指導に関する意識を分析した。

ジャンル準拠指導は第2回パフォーマンステスト向けにのみ行い、第1回パフォーマンステストと第2回パフォーマンステストの学習者によるライティングの比較テキスト分析を行うことにより、ジャンル準拠指導のライティング学習への効果を示す。第2回パフォーマンステストに向けてジャンル準拠指導を用いた事前指導・事後指導を各1回行った。事前指導ではモデル文の提示、文章構成の説明、「描写」のそれぞれの段階で特徴的な英語表現を具体的に示した。また学習者にはAIによる自動英文添削ツールの EasyBib (Chegg Service, 2020)を用いて単語・文法の修正を行うよう指導を行った。これはジャンル準拠指導の共同的及び自立的ライティングの段階で必要とされるフィードバックを行う手段である。事後指導では教員及び他の学習者から内容・構成面のフィードバックを受けて、学習者が自分自身のライティングを振り返る機会を提供した。第1回パフォーマンステストでは「あなたの好きな（または興味のある）スポーツについて、80語以上の英文を1段落で書きなさい。」という課題が出され、第2回パフォーマンステストでは「あなたにとって大切な地元の文化について、100語以上の英文で紹介しなさい。」という指示のもと学習者は英語ライティングを行った。

#### 4. 研究対象

研究対象は県立高等学校普通科1学年に在籍する学習者69名である。テキスト分析には17名が抽出されて、ジャンル準拠指導前に行った2022年実施第1回パフォーマンステストと第2回パフォーマンステストの英作文が比較分析された。調査紙分析は69名を対象とし、回答の内容分析が行われた。インタビュー分析は半構造化面接形式で2名の学習者を対象にして行った。

#### 5. 結果

##### (1) 英作文分析

対象者17名の2022年度実施の第1回及び第2回パフォーマンステストの英作文をジャンルの文章構成 (Humphrey et al., 2012) と文法的特徴 (Martin & White, 2005) の観点から分析した。

まず Humphrey et al. (2012) の分析的枠組みを用いて英作文がどのような段階を踏んで構成されているかを調査した。文法的特徴は人称代名詞の使用と Martin & White (2005) の評価に関わる分析的枠組みを使用した。この分析的枠組みでは、評価する言語使用を人に対する評価 (judgement)、物事に対する

評価(appreciation)、人の心情(effect)の3つの観点から分析する。

文章構成では第1回、第2回のパフォーマンステストともに全対象者がそれぞれのテストで同じ文章構成を用いた。第1回のパフォーマンステストでは「導入」、「理由」、「結論」の文章構成であった。第2回のパフォーマンステストの英作文では「特定」、「描写」、「省察」の順にライティングが構成されていた。第1回のパフォーマンステストの文章構成では「導入」と「結論」が1文で構成されていることがほとんどであった。「導入」では“My favorite sport is basketball.”のような1文が使われることがほとんどであった。また「結論」では、“For those reasons, I like basketball.”のような1文が一つの段階を作っていた。第2回パフォーマンステストの英作文では各段階が複数の文で構成されていることが多かった。「特定」では“From now on, I’ll introduce the food culture of Togo in Aichi. People in Togo love Togo vegetables.”のように2文以上を用いて構成されていることがわかった。また「省察」でも“I remember going to see it with my friends. So this culture is very important to me.”のように2文以上で構成されていることがほとんどであった。このように文章構成はどちらのパフォーマンステストでも明確に示されていた。相違点は各段階の構成方法にあった。

次に第1回パフォーマンステストの「理由」の段階と第2回パフォーマンステストの「描写」の段階における人称代名詞と評価に関する言語使用の分析結果を示す。第1、2回のパフォーマンステストで、研究対象者はどのように人称代名詞を使用したのか比較分析した。今回の分析ではI, we, youの使用回数を分析した。これらの人称代名詞を使用する場合、個人的な活動を示す時に多く使われることが多い。また普通名詞を使う場合は一般化された情報が伝えられると考えられる。第1回パフォーマンステストの英作文の「理由」の段階では平均で6.9回の人称代名詞が使用されていた。個人的な出来事や思いを示すことが多く“I feel great”、“I practiced every day”などの記述が見られた。一方、第2回パフォーマンステストの「描写」では人称代名詞の平均使用回数は1.8回であった。またそれぞれの学習者の変化を見ても、2名は人称代名詞の使用回数が同数であったがそれ以外の学習者は第2回パフォーマンステストの「描写」で大きく減少した。

次に Martin & White (2005)の評価に関わる言語使用の分析的枠組みを用いた分析結果を示す。人称代名詞の分析同様に第1回パフォーマンステストの「理由」の段階と第2回パフォーマンステストの「描写」の段階における言語

使用を比較した。第1回パフォーマンステストの「理由」では評価する単語が平均で2.4回使用されたのに対して、第2回パフォーマンステストの「描写」では平均1.1回であった。第1回パフォーマンステストの「理由」の段階では、“unforgettable”、“I’m glad”、“It is very fun”（下線は筆者追加）などの評価を表す言葉が使われていた。一方、第2回パフォーマンステストの「描写」では“people in Inazawa love the hadake festival.”や“we can enjoy “Mikoshi””（下線は筆者追加）などの評価に関する言語使用が見られた。

## （2）質問紙分析

ジャンル準拠指導の理論を取り入れた事前指導について、「十分に役に立った」、「ある程度役に立った」、「あまり役に立たなかった」、「全く役に立たなかった」の質問に回答してもらった。結果は、「十分に役に立った」が93.4%（57名）、「ある程度役に立った」が13.0%（9名）、「あまり役に立たなかった」が0%（0名）、「全く役に立たなかった」が4.3%（3名）であった。

また、回答の理由について自由記述させた。「十分役に立った」、「ある程度役に立った」の中では、書き方が分かった、文章構成を知ることができたとうかがえるコメントが多数見られた。また、AIの使い方が分かった、文法、単語、表現などを知ることができた、モデル文が役に立ったというコメントも複数見られた。「全く役に立たなかった」という回答の生徒3名は事前指導の授業を休んでいたからという記述であった。

## （3）インタビュー分析

インタビュー調査では、事前指導、パフォーマンステストの設定課題、事後学習がどのように学習者に影響したかを明らかにする。質問項目一覧は附属資料に提示している。インタビュー調査では2名の学習者に調査を行った。事前指導については、この課題を行う上で使える単語及びフレーズ集、英作文を行う際のテンプレートにより英作文の準備を始めやすかったことがわかった。またAIによる自動英文添削機能があるEasyBib (Chegg Service, 2020)を用いた指導では学習者は書いた英文を何度も添削にかけていたことがわかった。その理由として、間違いのない、ネイティブスピーカーのような英文を書けるようになりたいという思いがあったことが挙げられる。

第2回パフォーマンステストは描写文というジャンルを設定して行われた。これに対してインタビュー対象者は、新しい英文の種類を書くことができるよ

うになる機会と捉えて、自分が持つ将来の英語学習の目標とも関連していると回答した。

第2回のパフォーマンステストへの取り組みがどのように今後の英語ライティング学習に影響するかについては、インタビュー対象者はAIによる自動英文添削、英語表現例の提示により自分自身の英語ライティングの精度が高まり、英語表現の幅が広がっていくと考えた。

## 6. 考察

上記の分析結果から高等学校の学習者に対するジャンル準拠指導の有効性を考察する。まずこれまでの日本の高等教育において英語ライティング指導は単文レベルの焦点が当てられることが多かった。本研究により、文章レベルの指導は学習者のライティング能力向上に大きく貢献することがわかった。日本の高等学校は1クラスにおける学習者数が40名程度であることが多く、各学習者にフィードバックを与えることが難しかった。しかし、本研究で行ったようにAIによる自動英文添削ツールを用いるとこのような指導環境でも文章レベルの指導は有効である。

ジャンル準拠指導の特徴である文章構成や単語、文法の使用例の明示的提示はライティング向上に大きく寄与すると考える。まずジャンル準拠指導を受けた第2回パフォーマンステストでは「特定」、「描写」、「省察」のどの段階でも複数文が用いられており、課題として設定された「描写文」が適切な文章的段階を踏んで書かれていた。これは英語ライティングを単に「トピックセンテンス」、「本文」、「結論」とだけ捉えるのではなく文章の種類により、適切な文章構成を用いる気付きへとつながったと考える。

第1回パフォーマンステストで学習者が書いた「理由」の段階と第2回パフォーマンステストで学習者が書いた「描写」の比較では人称代名詞や評価を示す言語使用は大きく異なった。これは事前指導の際にそれぞれのジャンルの文章を書く際に有用となる言語的特徴が示されていたためであろう。また、このことから教員がジャンルの視点から英語ライティング指導を行う重要性がわかる。教員が課題設定の際に、どのジャンルを指導することが適切かを学習者のニーズや英語力から考え、課題として設定したジャンルを書く際に必要な文章構成や単語・文法の特徴を説明する必要があるからである。

文章構成、人称代名詞、評価に関する言葉の使用の分析から、本研究のジャ

ジャンル準拠指導により学習者は「描写文」というジャンルの英語ライティング能力を向上させたと言える。これまで物語文や説得文でジャンル準拠指導の有用性は示されていたが本研究により描写文の指導に対する有用性も高いことがわかった。

## 7. 結論

ジャンル準拠指導は高等学校における学習者が英語ライティング能力を向上させることに寄与すると言える。学習者はジャンル準拠指導によりジャンルに適切な文章構成、単語・文法を用いて英語ライティングを行った。また事前指導において、モデル文の提示、ジャンル特有の単語及び文法使用例の提示があることにより、学習を進めやすくなっていた。

AIによる自動英文添削は学習者に肯定的に捉えられ、多くの学習者がライティング学習のために活用した。AIの活用が自律的学習を促進するための有効な手段ではないかと思われる。

## 謝辞

本論文は2022年度しあわせ研究費（研究テーマ：ジャンル理論の中等教育での英語ライティング指導・学習への応用）の助成を受けたものです。

## 参考文献

- Bunch, G. C., & Willett, K. (2013). Writing to mean in middle school: Understanding how second language writers negotiate textually-rich content-area instruction. *Journal of Second Language Writing*, 22(2), 141–160.
- Chegg Service. (2020). EasyBib. <https://www.easybib.com/>（2023年3月10日アクセス）.
- de Oliveira, L. C., & Lan, S.-W. (2014). Writing science in an upper elementary classroom: A genre-based approach to teaching English language learners. *Journal of Second Language Writing*, 25, 23–39.
- Grabe, W., & Kaplan, R. B. (1996). *Theory and practice of writing: An applied linguistic perspective*. Routledge.
- Halliday, M. A., & Matthiessen, C. M. (2014). *Halliday's introduction to functional grammar*. Routledge.

- Harman, R. (2013). Literary intertextuality in genre-based pedagogies: Building lexical cohesion in fifth-grade L2 writing. *Journal of Second Language Writing*, 22(2), 125–140.
- Humphrey, S., Droga, L., & Feez, S. (2012). *Grammar and meaning*. Newtown: PETAA.
- Martin, J. R. (1984). Language, register and genre. In R. M. Bunbury, F. Christie, S. Dawkins, & Deakin University School of Education. *Open Campus*, (Eds.), *Language studies, children writing* (pp. 21–30). Waurin Ponds: Deakin University.
- Martin, J. R., & White, P. R. (2005). *The language of evaluation*. Basingstoke: Palgrave Macmillan.
- Paltridge, B. (2001). *Genre and the language learning classroom*. University of Michigan Press.
- 石神政幸, 伊東英. (2008). 英語 「ライティング」 の授業改善: 岐阜県立長良高等学校の実践から. *岐阜大学カリキュラム開発研究*, 25(2), 38-45.

#### 附属資料

##### インタビュー質問項目

1. 第2回パフォーマンステストの事前指導についてどのように思いましたか。
2. AIによる自動添削ツール Easybib は使用しましたか。どのように使い、どの程度役立ちましたか。
3. パフォーマンステストの課題はしっかり取り組めば自分の英語力を高めてくれると感じましたか
4. パフォーマンステストの課題は将来における自分の英語学習の目標と合っていると思いますか。
5. 事後指導での先生からのコメントはこれからの英語学習に役立つと思いますか。
6. 事後指導で自分自身の取り組みや英作文を振り返った際、どのようなことが良くて、どのようなことに改善が必要だと思いますか。
7. 次のパフォーマンステストや英作文の課題には今回のパフォーマンステストの経験が役立つと思いますか。

## 【総説】

# 子ども理解に保育者の幼少期の経験が及ぼす影響に関する一考察 —保育場面の読み取りと幼児の心情理解の分析から—

小川 房子（武蔵野大学教育学部准教授）

石田 由紀子（武蔵野大学しあわせ研究所客員研究員）

兼間 和美（武蔵野大学しあわせ研究所客員研究員）

## 要約

本研究は、保育場面の読み取りや幼児の心情理解に見られる「多様性」の要因に焦点を当て、保育者の幼少期の経験が影響を及ぼしているという仮説を検証するために取り組んだ。また、複数の保育者の異なる視点が幼児教育・保育の多様性と捉えるのではなく、その多様な読み取りを尊重し合い、学び合うことにより個々の保育者が多視点で子ども理解を図ることを幼児教育・保育における理想的な「多様性」と捉え、それが幼児教育・保育の場で乳幼児の情緒を安定させ、その子らしさを発揮し生き生きと生活するという「しあわせのカタチ」実現につながるものと考えて、子ども理解に保育者の幼少期の経験が及ぼす影響について質問紙調査及び保育者へのインタビュー調査を実施し関連性を考察した。

## 1. はじめに

世界保健機構（WHO）の憲章に用いられたウェルビーイング（Well-being）は「健康とは、単に疾病や病弱な状態ではないということではなく、身体的、精神的、社会的に完全に良好ですべてが満たされた状態である」という広義の健康の定義づけの中の「満たされた状態」を意味する。つまり、感情としての幸せを表すハピネス（Happiness）よりも包括的な「しあわせ」を意味すると捉えることができる。また、幼児教育・保育をフィールドとする本研究において、「身体的、精神的、社会的に完全に良好で、すべてが満たされた状態である」を捉え直すとするならば、「主体的な活動を通して心と体を共鳴させるための安定した情緒、友達や保育者との豊かな関わり、安心安全な居場所を得ている状態」と表現できるのではないだろうか。本研究では、「しあわせ」をウェルビーイング（Well-being）として捉え、用いることとする。

## 2. 研究の目的

### (1) 幼児教育・保育の重要性と保育者の存在について

OECD が 2030 年に向けて身につけることが望まれるコンピテンシーを検討するなど、非認知的能力を育てることの重要性と幼児教育・保育への新たな期待が高まっている。ジェームズ・J・ヘックマンは『幼児教育の経済学』において、ペリー就学前プロジェクトやアベセダリアンプロジェクトの追跡調査の結果を根拠として「幼少期の環境をゆたかにすることが認知的スキルと非認知的スキルの両方に影響を与え、学業や働きぶりや社会的行動に肯定的な結果をもたらす<sup>1</sup>」と述べている。IQに関しては幼少期に身につけたことが持続しないものの、非認知能力を含むそれ以外の能力については持続することも明らかにしている。このことは幼少期にこころの知能指数である EQ を向上させる重要性を示唆するものであり、その後の人生に大きなプラスの影響を及ぼすということである。これは、すでに述べたウェルビーイング (Well-being) につながる。

では、非認知的能力はどのように育成されるのだろうか。非認知的能力の育ちにはアタッチメントが大きな影響を及ぼすことがこれまでの研究で明らかになっている。そのため、幼児教育・保育の場で乳幼児にとって「安全な避難所」であり「安心の基地」である保育者がその場面やその子を理解する際に、保育者の幼少期の経験が及ぼす影響を追究し、保育者が乳幼児を捉える多様な視点をもつことに寄与したい。また、レイチェル・カーソンは、代表作『センス・オブ・ワンダー』の中で、「子どもたちの世界は、いつも生き生きとして新鮮で美しく、驚きと感激に満ちあふれています。残念なことに、私たちの多くは大人になる前に澄みきった洞察力や美しいもの、畏敬すべきものへの直観力をにぶらせ、ある時は、まったく失ってしまう<sup>2</sup>」「持って生まれた子どものその感性をいつも新鮮に保ち続けるためには、世界の喜び、感激、神秘などを子どもと一緒に再発見し、感動を分かち合ってくれる大人が、少なくともひとり、そばにいた必要がある<sup>3</sup>」と述べている。乳幼児の非認知的能力の育ちを支えるには、センス・オブ・ワンダー（神秘さや不思議さに目を見はる感性）を持ち続けた保育者の受容的な関わりが不可欠と言えよう。そして、共感できる保育者がいることが乳幼児にとって「しあわせのカタチ」の基盤になると考える。

## （２）幼児教育・保育における理解とその多様性

保育のある場面を切り取って、その時の子どもの行動や表情・しぐさなどを手掛かりとし、子ども理解の方法や技術、子どもを理解する力の向上を目的とした研究は多く、すでに成果が積み上げられている。しかし、その場면을捉える際に保育者の幼少期の経験が及ぼす影響に焦点を当てた研究は希少である。事実、保育場面やその子の心情の読み取りは答えが一つとは限らない。さらには、それが保育の奥の深さであり、個々の捉え方の違いが幼児教育・保育における多様性であることはすでに語られ、定説となっているとも言える。しかし、複数の答えが存在する要因は明確になっていない。そのため、幼児教育・保育の現場では、その個々の捉え方の相互理解を図ることを目的のひとつとして、保育カンファレンスなどを行っているが、保育が複雑で難しいと捉えることや複雑に見えるその状況が保育における人間関係の難しさとして挙げられ、離職の理由となることも現実としてある。中坪史典らは『質的アプローチが拓く「協働型」園内研修をデザインする 保育者が育ちあうツールとしての KJ 法と TEM』の中で、園内研修で保育者が感じるプレッシャーとして①同調プレッシャー②評価プレッシャー③経験年数プレッシャー④完成度プレッシャー<sup>4</sup>の４項目を挙げている。これらのプレッシャーは、他者の意見に同調すべきかどうかという迷い、自分の意見がどのように評価されるのかという不安、経験年数に見合った豊富な知識を有した存在であることを披露しなければならないという責任、他の保育者に的確に伝えなければならないという困惑、などから生まれるものである。経験年数や他者の存在にかかわらず自分らしく考えを伝えられる環境が整っていない状況は、多様性を軽視した結果として生み出されるものではないだろうか。

マシュー・サイドは『多様性の科学』において、多様性の力、もしくはそれを軽視する危険性を指摘し、「組織や社会の今後の繁栄は、個人個人の違いを活かせるかどうかにかかっている。賢明なリーダー、政策、建築デザイン、科学的探究などによって多様性をうまく活用できれば、組織にも社会にも大きな恩恵がもたらされる<sup>5</sup>」と述べている。保育者が個々に異なる子ども理解や場面の捉え方をすることが保育の多様性ではなく、個々が多視点で子ども理解や場面の捉え方をすること、また、保育者集団を一つの組織としてみたときには、異なる視点から子どもを理解し、場面の読み取りをすることが幼児教育・保育の多様性と

捉えるべきではないだろうか。その際、本研究で仮説とする、幼少期の経験がそれらに及ぼす影響があるとすれば、保育者個々の幼少期の経験も踏まえて相互理解を図ることは必要不可欠と考える。保育の場面や子どもの心情をどのように捉えたかを様々なプレッシャーの中で語る前に、他者に批判されるものではない自分自身の幼少期の経験、その経験から生まれた心情を他の保育者に分かりやすく伝えることから始まる同僚性もあるのではないだろうか。さらには、一人一人の保育者がキャリアを重ね、多視点での場面の読み取りや子ども理解が可能になることと、それを的確に伝えられるようになることは、保育者の成長の側面から考えても、保育者集団としての組織の側面から考えても、大いに意味のあることと言えよう。

### （３）幼児教育・保育の現場における心理的安全性の構築について

保育者が捉える自己の専門的成長につながる園内研修の特徴を中坪史典らは『質的アプローチが拓く「協働型」園内研修をデザインする 保育者が育ちあうツールとしての KJ 法と TEM』において、保育者を対象に自由記述調査を行った結果から①議論の流れが良くてやりとり相互性がある②話し合いや発言の質が高い③雰囲気や関係性が良くて協議する対象に理解がある④保育の振り返りや構想がある、の４項目を提示している。その中のひとつ、子どもについて話し合うとき、全員で理解しようとする、公開保育をした保育者と話し合うときその保育者を批判するのではなく、共感しようとする同僚の状態を意味する「雰囲気や関係性が良くて協議する対象に理解がある<sup>6)</sup>」に特に着目したい。幼児教育・保育の質向上、保育者の資質向上を考えれば、保育者個々の専門的成長のみならず、組織としての成熟は欠かせないものである。そのためには日常の保育の中で直面する課題や解決すべき問題を共有し、向き合い、雰囲気や関係性が良くて協議する対象に理解ある組織へと成熟する必要がある。また、保育者一人一人が気兼ねなく意見を述べることができ、自分らしくいられる文化を意味する心理的安全性<sup>7)</sup>を築き、対人関係の不安は最小限であり、保育者集団としての成果を最大限に発揮できる組織となる必要があるのではないだろうか。

心理的安全性の構築のためには、保育者一人一人の子ども観・保育観を協働する者同士が相互理解を図る必要がある。本研究で仮説としている子ども理解に

保育者の幼少期の経験が影響を及ぼすという観点からも保育者一人一人の子ども観・保育観への相互理解を図ることが欠かせない。幼児教育・保育において保育者が多視点で乳幼児理解を図り、受け入れ、乳幼児が生き生きと自己を発揮できる環境の基盤づくりに寄与する研究を蓄積することが本研究の目的の一つである。乳幼児のよりどころとなる保育者自身が生き生きと自己を発揮して保育者の職務を全うするために現場に還元できる研究をし、幼児教育・保育の質を向上させることが乳幼児のしあわせをカタチにすることであり、本研究の意義であると考えている。

#### （４）研究の課題

保育場面の読み取りとその場面で見られる幼児の心情を理解する内容を分析し、子ども理解に保育者の幼少期の経験が及ぼす影響を明らかにする。

### ３．本研究で用いる保育場面の選定について

#### （１）保育場面選定の方法

本研究の課題を明らかにするために取り上げる保育場面は、コロナ禍での研究活動であることを考慮するとともに、同じ環境や状況、同じ情報量で読み取ることが目的として、教材として市販されている映像を候補とし選定することとした。共同研究者３名が保育の数場면을視聴し、その場面の読み取りと幼児の心情をテキスト化しテキストマイニングの一種である、計量テキスト分析（KH Coder）によって、キーワードを抽出し、選定する。

#### （２）保育場面の選定結果

数場면을視聴した結果、保育者と幼児が心を通わせながら過ごしている場面や幼児の情緒が安定していると見て取れる場面では各共同研究者の言語記録には共通点が多く見られた。一方で幼児が課題に直面している場面では、担任保育者との関係性に焦点を当てる、対象児が抱える不安に焦点を当てる、情緒の安定に焦点を当てる、など抽出されるキーワードに幅がみられた。そのため、調査協力者の保育場面の読み取りや心情理解との関係性を考察するために、幼児が課題に直面する場面を選定することとした。

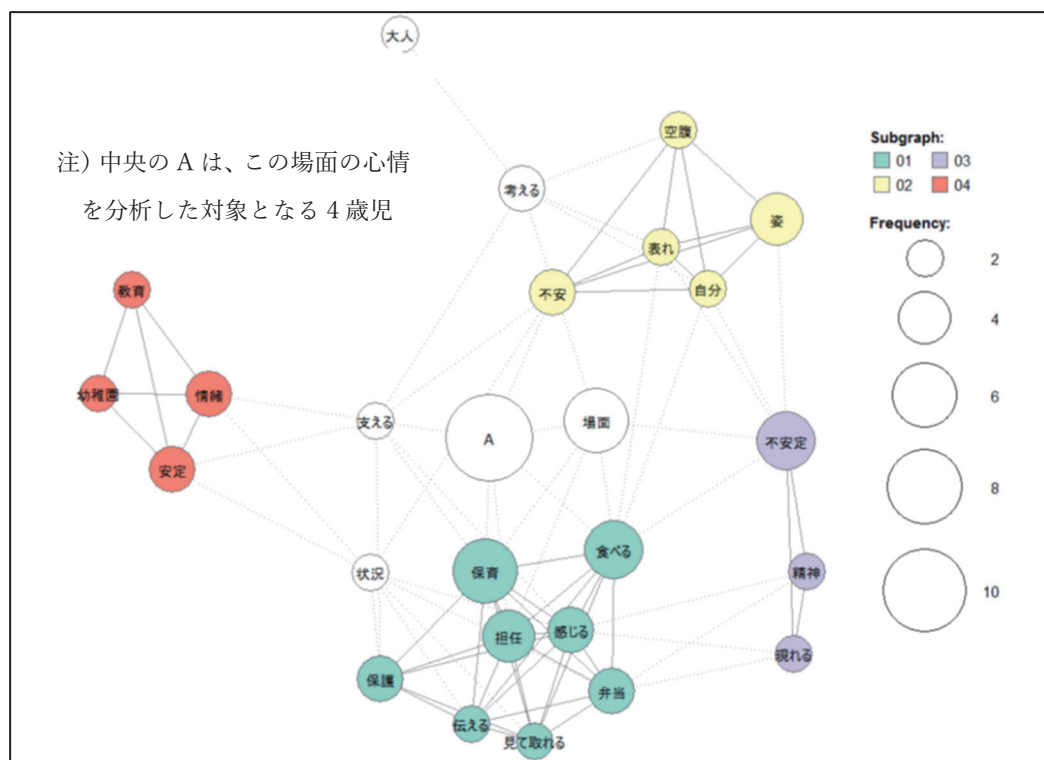


図 1 計量テキスト分析 (KH Coder) によって抽出されたキーワード

### (3) 本研究で取り上げる保育場面の概要

2 学期開始直後の 4 歳児クラス。対象児は、3 年保育で入園した男児（以後、対象児と表記）。4 歳児クラスに進級し、1 学期は保育者や 3 歳児クラスから関わっていた特定の男児との関わりを中心に過ごしていた。2 学期に入り、担任保育者は友達との関わりを広げてもらいたいと考え、対象児とは 1 学期よりも距離を置いている。そのため、対象児は一人で過ごす時間が増えることとなった。そのような個別指導計画が背景にある夏休み明けの一場面である。

登園時に母親から「お弁当を食べない」と言っていることが担任保育者に伝えられていた。対象児は数日間、昼食を食べずにいる。この日も昼食の時間にお弁当を広げること、出すことさえもせず、対象児は座っている。時には他児が食べ物を口に運ぶのを目で追う姿が見られる。

## 4. 倫理的配慮

日本保育学会倫理綱領に則り、調査協力園の園長に研究の趣旨を伝え、研究協力の承諾を得た。その上で調査協力者へ文書で調査趣旨を説明するとともに口

頭にて補足説明を行った。個人情報保護を遵守し実施することを伝え、調査協力の同意を得た。本研究における調査協力園と調査協力者はすべて仮名で記載し、人権に配慮した。また、研究に用いた市販の映像についても、研究での使用許可を得て使用し、映像に登場する園や対象児についても仮名とした。

## 5. 研究方法

### (1) 質問紙調査

選定した保育場面の映像を調査協力者が視聴した後、その場面や対象児の心情を読み取り、質問紙調査を行った。1) 回答の場面や心情の読み取り内容を一覧化し考察する。また、2) 幼少期の経験との関連性を考察する。調査協力者は27名。保育歴の内訳は表1の通りである。

#### <質問紙調査の内容>

1) 動画の場면을視聴し、その場面や対象児の心情をどのように感じ取りましたか？（自由記述）

2) あなたの幼少期はどのような「こども」でしたか？（自由記述）

|       |                                                   |     |                    |
|-------|---------------------------------------------------|-----|--------------------|
| ●協力園1 | 富山県内私立保育園                                         | 調査日 | 2022年10月11日        |
|       | 5年1名、7年2名、12年1名、16年1名、20年2名、44年1名                 |     |                    |
|       | 計8名                                               |     |                    |
| ●協力園2 | 富山県内私立保育園                                         | 調査日 | 2022年10月11日        |
|       | 2年1名、6年2名、7年1名、18年1名                              |     |                    |
|       | 計5名                                               |     |                    |
| ●協力園3 | 徳島県内私立保育園                                         | 調査日 | 2022年10月20日・10月21日 |
|       | 1年1名、3年4名、5年1名、7年2名、12年2名、14年1名、15年1名、24年1名、30年1名 |     |                    |
|       | 計14名                                              |     |                    |

表1 各研究協力園と研究協力者の経験年数

### (2) インタビュー調査

質問紙調査の協力者27名を保育歴によりA群（5年未満）、B群（5年以上10年未満）、C群（10年以上20年未満）、D群（20年以上）に分け、偏りが出ないようにバランスよく各群から2名ずつ選出する。また、質問紙調査の結果により①明らかな関連性が認められる②聞き取りによって関連が見出される可能性あり③今回の事例では関連性が認められない、に分類し偏りなく選出し、インタビュー調査から幼少期の経験と子ども理解の関連性について考察する。

## 6. 結果と考察

## (1) 質問紙調査の結果

## 1) 回答の場面や心情の読み取り内容に関する結果

27名の調査協力者が同じ保育場面の動画を視聴した後、「その場面や対象児の心情をどのように感じ取りましたか？」という設問への回答（自由記述）の結果、65の読み取りの自由記述が抽出できた（表2）。

| 場面と心情の読み取り内容         | 数  |
|----------------------|----|
| 保育者との関わりを求めている場面     | 14 |
| 対象児の自己表出が困難な場面       | 11 |
| 友達との関係性の困難さが表れている場面  | 7  |
| 対象児が強い意志を示している場面     | 5  |
| 保育者の対象児への関わりを認めている場面 | 5  |
| 精神的な不安定さが表れた場面       | 3  |
| 対象児が自己表現できずにいる場面     | 3  |
| 対象児と保育者の信頼関係が見られる場面  | 2  |
| 対象児が抵抗している場面         | 2  |
| 対象児が寂しさを感じている場面      | 2  |
| 対象児が怒りの感情を抱いている場面    | 2  |
| 保護者と保育者の信頼関係が見られる場面  | 1  |
| 対象児の自信の無さが表れている場面    | 1  |
| お弁当の中身を嫌がっている場面      | 1  |
| 対象児が苛立ちを感じている場面      | 1  |
| 対象児が悲しさを感じている場面      | 1  |
| 対象児が反抗している場面         | 1  |
| 対象児がつらくしんどい場面        | 1  |
| 対象児のプライドが許さない場面      | 1  |
| 対象児が混乱している場面         | 1  |

表2 質問紙調査で抽出された読み取りと数

注) 一人の言語記録から複数の抽出有

## 2) 幼少期の経験との関連性に関する結果

質問紙調査の「あなたの幼少期はどのような「こども」でしたか？」の設問の自由記述の内容を読み、保育者の幼児期の経験と保育場面や心情の理解との関連性については、「明らかな関連性が認められる」は13名、「聞き取りによって関連が見出される可能性有り」は9名、「今回の事例では関連性が認められない」は5名であった（表3）。

| 保育者の幼児期の経験と保育場面や心情の理解との関連性について |      |
|--------------------------------|------|
| 明らかな関連性が認められる                  | 13 名 |
| 聞き取りによって関連が見出される可能性有り          | 9 名  |
| 今回の事例では関連性が認められない              | 5 名  |

表3 幼少期の経験との関連性に関する結果

## (2) 質問紙調査の考察

## 1) 回答の場面や心情の読み取り内容に関する考察

27名の調査協力者が同じ保育場面の動画を視聴した後に実施した、「動画で感じ取った場面や対象児の心情をどのように感じ取りましたか？」という質問紙調査の設問において65の読み取りが抽出できた。一人当たり平均して3～4通りの読み取りをしている。このことは、幼児教育・保育における保育者それぞれの子ども理解における「多様性」を裏付ける結果と捉えられるのではないかな。

## 2) 幼少期の経験との関連性に関する考察

「あなたの幼少期はどのような「こども」でしたか？」という質問紙調査の設問の自由記述の内容から「聞き取りによって関連が見出される可能性有り」に分類された9名は、今回の保育場面が自分の経験と合致する要素が少なかつただけで、自分の経験を基盤にして読み取ろうとしていることが推察される共通点がある。自分の経験の中から、本研究の対象となる保育場面と類似した事柄を想起して、場面やその子の理解を図ろうとしているのではないだろうか。今後のインタビュー調査によってより深く聞き取ることの必要が強く感じられる。また、「今回の事例では関連性が認められない」5名については、他の場面の読み取りや、心情理解で対象となる保育場面と類似した事柄を想起して、場面やその子の

理解を図ろうと試みる可能性もあり、今後、異なる保育場面での調査をしたいと考える。

### （３）インタビュー調査の結果

調査協力者１～４が勤務する協力園３は、１２月後半よりコロナウイルス感染症が園内で流行し、予定していたインタビュー調査を延期することとなった。園長からの希望もあり、年明けの感染状況を見て実施することとし、調査協力１～３はＺＯＯＭで２０２３年１月２５日に、調査協力者４は２０２３年１月３０日に対面で実施した。調査協力者５～８は対面で２０２２年１２月１３日から１２月２３日に実施した。（インタビュー調査の詳細は資料参照）

### （４）インタビュー調査の考察

この考察は、インタビューを担当した研究者１および研究者２が終了後に記録した資料を基に改めて考察としてまとめたものである。

#### １）調査協力者１に関する考察

質問紙調査の記述内容から「１年目」に着目しインタビュー対象者とした。以前は看護師として病院勤めをしていた。その後、３人目のこどもを出産し育児休業中に、今後の子育てについて家族と相談し、看護師として協力園３に再就職し、保育歴が１年目となったことをインタビューの中で知ることとなった。前職の経験を踏まえた保育実践となっているが、看護や子育ての経験から質問紙調査の内容も、調査協力者１なりの養護と教育両面から子ども理解がなされていると考えられ、子どもの心情に寄り添った回答となっている。また、質問紙調査では幼少期の経験との関連について本人も「自分が経験したことも踏まえて、共感できるところがあるので、多少は影響していると思います。」と答えている。幼少期の自分が記憶している心情や小学生になって自己覚知していく段階で、周囲の友だちや大人との関係性が思い出され、今の自分の保育実践や子どもの心情理解に繋がっていると考えられる。

## 2) 調査協力者2に関する考察

時間制限のある中でのZOOMによるインタビューとなったため緊張のあまり言葉数が少なかったが、質問紙調査の回答は自分の考えが素直に表現できていると読み取れた。インタビューを進めるうちに、現在の協力園3は2か園目であり、以前の園では自分の居場所を見つけられず不安な日々を抱えながら5年間頑張ってきたが、自分で環境を変えることも必要と心機一転し、現在に至っていることを語ってくれた。また、この経験は自分にとって、子ども理解に対する穏やかさをもたらしてくれたと打ち明けてくれた。自分の幼少期とどこか似ている対象児の言動が自身の幼少期の経験と重なり、調査協力者の幼少期の振り返りに、「人見知りで恥ずかしがりだったので、なかなか友達の輪に入れなかった時は、(担任の先生が)仲立ちをしてくれ、優しくったと思います。」という記述があり、対象児の心情理解に大いに役立っていると推察できる。また、幼少期の自分の心情と対象児の心情が、どこか似ていることから、対象児の心情理解に共感できる部分が多く「影響している。」との回答内容であると考えられる。

## 3) 調査協力者3

保育歴24年、しかも、協力園3の開園時より保育を実践してきた経緯があり、保育者となった自分の保育の実績、今まで自分なりに確立してきた保育観が自身の幼少期の経験以上に役立っていると自負してのインタビューとなった。幼少期は食への興味より友達と遊ぶ方が楽しいとの思いがあり、対象児の食べないという姿を自分の「食べない」とは違った見方で捉えていると考えられる。インタビュー調査において「幼少期はあまり記憶にない。」と述べており、質問紙調査でも幼少期の経験との関連性は「どちらともいえない」を選択している。物静かで穏やかな印象で、インタビューでも言葉を選びながら丁寧に受け答えする姿勢は、保育歴24年の経験を物語っていると思われた。長年のキャリアと中堅保育士としての自信とやりがいが見え、示唆される質問紙調査の回答やインタビュー内容であった。

## 4) 調査協力者 4

質問紙調査では「幼少期の記憶がほとんどなく覚えていない。」と回答しているが、インタビューを進めていくうちに、周囲の大人から大切に育てられ、自己中心的言動であっても、周囲が認めてくれていたという幼少期の経験を振り返ることとなった。保育歴 14 年目であるが挫折を経験し、園長に説得され協力園 3 の開園時に移り仕事をする事になって 6 年目となる。長年保育をしてきた先輩保育者と、園にとって初めての 5 歳児 25 名を卒園させたという経験が自信につながった。また、その後子育てを経験し、子ども理解という観点が大きく変わったと実感している。幼少期の経験は「影響していない。」との質問紙調査の回答であった。しかし、インタビューをしていくうちに、自分の幼少期の経験が大いに影響しており、仕事のやりがいや実践者としての大きな自信となっているとインタビュー終了後に調査協力者が幼少期の経験との関連性を自覚した一例となった。

## 5) 調査協力者 5

保育歴 2 年目で自分が憧れていた保育者になり、質問紙調査など意欲的に参加しようとする姿があり、回答も詳細に書いている。しかし、心情まで読み取る力は途上のであり、対象児のことを考えているつもりであるが、相手の気持ちに寄り添うまでの心情に届かず、映像を見た表面的な捉え方や、自分に置き換える読み取り方が優先している。自分の幼少期に食べるのが遅かったことを意識し、対象児が食べなかったことを弁当の中身が自分の嫌いなものであったために食べたくないと言っていた。

幼少期の経験と対象児の心情を読み取る際の影響については、どちらとも言えないと言っている。対象児はお弁当の中身が嫌いなもの苦手なものが入っていたために食べたくないと言っているが、自分の場合は食べたくないわけではなく、食べるのが遅かっただけであると振り返っている。食事に関して幼少期の経験から対象児も少し似ている部分があるとの考えをもっている。

## 6) 調査協力者 6

18 年の保育歴が、子どもにやさしく寄り添う気持ちの強さにつながっている。子どもへの関わりや保護者への対応の際に相手の気持ちになって接する姿勢は、保育経験を積み、得られた成果であり、今の保育者としての在り方につながっているのではないか。担任保育者の対象児に対する関わりを素敵だと捉えているが、反面、対象児に寄り添う方法を自分なりに探り、対象児のどうしようもない気持ちを理解しようとしている。自分の幼少期の経験は「影響していない」と回答していたが、インタビューが進むにつれ幼少期の自分の姿を話すうちに、うまく自分の気持ちをコントロールできない、気持ちを伝えられないなどの共通点に気付くこととなった。自分の幼少期を改めて振り返ることから、自分では意識していなかった幼少期の経験が影響しているという結果に驚きを隠せない姿があった。

## 7) 調査協力者 7

幼少期から周りの空気や大人の目を気にして良い子として行動することにより、周囲に波風を立てずに生活してきた自分の育ちを振り返ることとなった。自分ではどうしようもない心の内を吐露しつつ、対象児の心の叫びを汲み取り、言葉にできない対象児の姿にもどかしさを強く持っているように見て取れた。家庭環境の中で唯一自分の気持ちに正直になれた楽しい思い出を鮮明に記憶し、心のよりどころとしている。現在も周りに気遣い、自分の思いを抑えて生活しており、捌け口がないままの良い人であることの辛さを引きずっている。

自分にはできなかった対象児が反発した言動で表現している姿を「偉い」「なかなか根性ある」などの言葉で称賛し認めている。対象児の成長に願いを込めた担任保育者の対応とその方向性に理解を示しながらも、対象児の心情に寄り添った関わりの必要性を語っている。

幼少期の経験が子ども理解に関連性があるかに対しては「成長の中で変わって行く」と答え、認めることは自分の確立した地位を揺るがすことにつながる不安からか、頑として認めなかった。しかし、実は幼少期の経験は子どもの心情理解に大いに関連していると自分自身が一番分かっていると捉

えられる結果となったのではないだろうか。

## 8) 調査協力者 8

対象児の言動から本当の気持ちに気づき、自分が関わる時にはこうしてあげたいという思いを強めている。対象児と保育者の信頼関係の構築が見られることを踏まえ、担任保育者が対象児の成長を願う対応だが気持ちは通じていない現状にもどかしさを感じている。それは、幼少期に自分の気持ちに寄り添ってくれた保育者の存在が大きく、今の保育者としての自身のあり方を導いていると捉えていることが感じ取れた。子どもの話をしている笑顔の表情からは、本当にかわいいという気持ちが伝わり、それが対象児のどうにも理解してもらえない葛藤を歯がゆい思いで受け止めているように感じた。調査協力者 8 は、幼少期の経験が子どもの心情理解に大きく関連している。

## 7. 総合考察

### (1) 仮説：「子ども理解に保育者の幼少期の経験が影響を及ぼす」の検証

本研究は、保育場面の読み取りや幼児の心情理解に見られる「多様性」の要因に焦点を当て、保育場面の読み取りと幼児の心情理解をする際の多様な捉え方の根底に保育者の幼少期の経験が存在し、影響を及ぼすという仮説の検証に取り組んだ。その結果、記憶の有無にかかわらず、幼少期の経験は少なからず保育場面の読み取りと幼児の心情理解に影響を及ぼすことが示唆される結果となった。保育場面の読み取りと幼児の心情理解をする際に幼少期の経験が影響を及ぼすという仮説が検証された結果と言える。子どもとしての自分、保育者としての自分、大人としての自分を理解することが保育場面の読み取りと幼児の心情理解をする際に保育者の幼少期の経験はプラスに作用するのではないだろうか。

### (2) 子ども理解に保育者の幼少期の経験が及ぼす影響の自覚の有無について

記憶の有無は幼少期の経験が影響するか否かの自覚の有無と関連するものと考えられる。インタビュー調査を実施する際には、事前に実施した質問紙調査の回答内容から、聞き手は関連性の自覚の有無を予測していたが、どのような問いかけが本人の気づきに繋がるのか難しさを感じていた。しかし、インタビューが進む

につれ、保育者の幼少期の経験と子どもの心情理解につながる糸口が見つかり、聞き手の問いかけに対し、改めて冷静に考えることで意識していなかった対象児との関連性を発見し、幼少期の経験が影響していると自覚し驚愕する姿が見られた。このことから、保育者一人一人の子どもの見方、子どもの心情理解の原点は、それぞれの保育者の幼少期の経験が影響しているという研究成果と言えるのではないだろうか。

本研究においては。保育歴の長い保育者の方が保育歴の短い保育者よりも無自覚に近いことも分かった。このことは、保育歴が短く保育経験が浅い保育者には、その場面やその子の心情を理解するために必要な知識や経験から導き出される情報も少なく、自己の幼少期の経験を引き出し、保育場面の読み取りや幼児の心情理解をするための判断材料として活用していることが推察される。一方で、保育歴が長く保育経験が豊富な保育者は、その場面やその子の心情を理解するために必要な知識や経験から導き出される情報が多く、特にこれまでの保育実践における経験を判断材料としていることが推察された。幼少期の経験を判断材料として活用する頻度が自覚の有無と関連すると考える。

### （３）「多様性」の要因についての考察

本研究において仮説が検証できたことはすでに述べた通りである。しかし、この結果は、保育者一人一人の子ども観・保育観に与える影響と捉えるべきではないかという新たな考えに至った。幼少期の経験が保育歴の短い保育者の子ども観・保育観の形成に影響を及ぼし、保育歴を重ねることにより経験から導き出されたその保育者の子ども観・保育観の確立につながり、保育場面の読み取りや幼児の心情理解に見られる「多様性」の要因になると言えるのではないだろうか。

## ８．おわりに

インタビュー調査終了後に「こんな方法で、子どもに目を向けることも、また、自身の保育の質的向上に繋がると感じました。」という感想が聞かれた。保育場面の読み取りや乳幼児の心情理解の力量形成は、保育者としてのキャリアと同時にスタートすると捉えがちであるが、子ども観・保育観の根底にあるものを自己認識することにより、保育場面の読み取りや幼児の心情理解の力量形成に組

織的に取り組む必要性を感じる研究活動となった。引き続き、保育場面の読み取りと幼児の心情理解に関する「多様性」に焦点を当てて、さらに様々な角度から研究を進めていきたい。また、今後は乳幼児の「しあわせのカタチ」にとどまらず、保育者が生き生きと保育をするための研修のあり方を追究することにも視野を広げ、保育者の「しあわせのカタチ」を実現する研究に取り組みたい。

## 謝辞

本論文は 2022 年度しあわせ研究費（研究テーマ：子ども理解に保育者の幼少期の経験が及ぼす影響に関する一考察）の助成を受けたものです。調査にご協力いただきました 3 園 27 名の保育士の皆様に感謝申し上げます。

## 引用文献

- 1 ジェームズ・J・ヘックマン（2015）『幼児教育の経済学』東洋経済新報社 p29・p33
- 2・3 Rachel Carson（1996）『センス・オブ・ワンダー』新潮社 pp23～24
- 4・6 中坪史典編著（2018）『質的アプローチが拓く「協働型」園内研修をデザインする 保育者が育ちあうツールとしての KJ 法と TEM』ミネルヴァ書房 pp28-31・pp25-28
- 5 マシュー・サイド（2021）『多様性の科学』（株）ディスカバー・トゥエンティワン p314
- 7 エイミー・C・エドモンドソン（2021）『恐れのない組織 「心理的安全性」が学習・イノベーション・成長をもたらす』英治出版株式会社

## 参考文献

- 前野隆司・前野マドカ（2022）『ウェルビーイング』（株）日経 BP 日本経済新聞出版
- 遠藤利彦（2019）「これから求められる非認知能力とは？アタッチメント：「非認知」的な心の発達を支え促すもの」『公益財団法人日本教材文化研究財団 令和元年度研究紀要』第 49 号特集 I
- 樋口耕一他（2022）『KH Coder OFFICIAL BOOK II 動かして学ぶ！ はじめてのテキストマイニングフリー・ソフトウェアを用いた自由記述の計量テキ

【総説】

子ども理解に保育者の幼少期の経験が及ぼす影響に関する一考察  
－保育場面の読み取りと幼児の心情理解の分析から－

スト分析ー』ナカニシヤ出版

ダニエル・ゴールマン（1998）『EQーこころの知能指数』講談社

## 【総説】

# 幼児期におけるリトミック活動の身体的影響について —5 歳児の活動を中心に—

高牧 恵里 (武蔵野大学 教育学部 准教授)

松井 いずみ (明星大学 教育学部 特任准教授)

荒金 幸子 (東京家政学院大学、上野学園大学短期大学部 非常勤講師)

## 要約

本研究では、5 歳児のリトミック活動について動きの分析を行なった。子どもたちの様子からは、友達との相互作用で生まれる動きの表現を楽しむ中で、それぞれの感性と表現が異なることに気付き、互いに認め合う姿や、言葉での伝え合いに加えて、各々の思いを動きにしながら調節し合うといった思考力の芽生えにつながる様子が見られた。

また、本活動では友達との引き合い、押し合いなどのシーンで力の加減を試しているような様子が多く見られた。このような経験を重ねることで、子どもたちは力の加減を知り、やがては相手を感じて思う気持ちや優しさにつながっていくと言えるだろう。

リトミックは、ルールを守り、相手を思いやるなどの社会性へとつながる部分と、のびのびと自己を表現することが可能な部分の両方を併せ持つ。リトミックで音楽と共に体を動かすことを通して、生涯にわたって心身ともに健康的に生きるための基盤を培うことが可能であると言える。

## 1. はじめに

現在、幼児教育と小学校教育の架け橋プログラムの開発が進められている。「幼保小の架け橋プログラム」は、子どもに関わる大人が立場を越えて連携し、5 歳児から小学校 1 年生の架け橋期にふさわしい主体的・対話的で深い学びの実現を図り、一人一人の多様性に配慮した上で全ての子どもに学びや生活の基盤を育むことを目指すものである。<sup>1</sup> 幼児期から小学校期にかけて円滑に接続するためには、資質・能力の 3 つの柱「知識及び技能」、「思考力、判断力、表現力等」、「学びに向かう力、人間性等」が育っていくことが大切であり、その具体的な様子として「幼児期の終わりまでに育ってほしい 10 の姿」が示されている。10 の姿の中の「協同性」については「5 領域すべてに関わ

っていますが、その中でも特に『人間関係』に関わる子どもの育ちであると言えます。『人間関係』は、『自立心』を基盤としつつ、子どもが人と関わる力を、とりわけ子ども同士が遊ぶ過程で培い、『道徳性・規範意識の芽生え』をもたらし、『社会生活との関わり』にもつながっていくことが見て取れます。」<sup>2</sup>と述べられている。また、「思考力の芽生え」については「周囲の人と関わって遊ぶ中で、新しい考えやよりよい考えを生み出す」<sup>3</sup>とし、「豊かな感性と表現」については「友達と一緒に表現することを楽しむ中で、1人1人の感性と表現が異なることに幼児が気付き、互いに受け入れていく姿を大切にしたい」<sup>4</sup>と述べられている。「言葉による伝え合い」についても人間関係の中において育つものであり、それぞれの姿が相互に関わり合っていることがわかる。

本研究ではその架け橋期にあたる5歳児クラスの子どもたちとリトミック活動を行なった。5歳児は10の姿にもあるように、仲間同士のつながりが深くなり、相手の立場に立って考えることができ、協調性が育つ時期である。そこで、今回のリトミック活動の内容として、これまでの3、4歳児の活動と同じ内容に加え、友達との関係の中で生まれる複合的な動きを意識した活動の計画を立てた。5歳児のリトミック活動を基にした先行研究の中で、本稿の「音楽から自然に生まれる動き」「友達との学び合いの中で生まれる動き」そして「友達との相互作用によって生まれる動き」に着目した研究は管見の限り見当たらない。

## 2. これまでの研究

前回の研究では、3歳児のリトミック活動について、社会環境や発達の過程を意識した上で動きの視点から分析した。3歳児は基本的な動きが未熟な初期の段階から次第にコントロールできるようになっていき、想像力が目覚ましく発達する頃である。リトミック活動の中で子どもたちの想像力に音楽を添えることにより、日常の動きに変化を加えた身体の使い方を自然に引き出すことができ、更に複雑な動きを誘発させることが確認できた。

## 3. 本研究の目的

前回の研究をふまえ、本稿では、仲間同士のつながりが深くなり、相手の立場に立って考えることができ、協調性が育つ5歳児のリトミック活動を行い、「音楽から自然に生まれる動き」「友達との学び合いの中で生まれる動き」そ

して「友達との相互作用によって生まれる動き」の3つの視点から動きの分析を行う。

#### 4. 研究の方法

2022年9月にA大学附属幼稚園の年長組23名の園児と行なった活動を複数の機器で撮影し、映像と写真を基に動きの分析と考察を行なった。なお、今回の活動では、5歳児が自分のイメージや考えを言葉で伝えようとする場面が多く、実践者との会話も多かったため、「活動内容と子どもたちの動きの分析」には子どもたちの動きに加え、言葉での主な表現も記録する。また、本活動の撮影に関する主旨を説明した上で、園と保護者の同意を得ている。

#### 5. リトミック活動における動きの視点による分析

子どもたちは会場に着いて裸足になると、解放感を楽しむようにして力強く足音を立てながら走り始めた。最初は自由に走っていた子どもたちだが、次第にほどよい距離を保ちながら同じ方向に走るようになり、徐々に過剰な力みや動きが減り友達と協調し互いに影響し合っていく様子に相互作用的な姿が見られた。

##### (1) 導入 歌「とんぼのめがね」

主な内容：心を開放し、情景等について会話をしながら初対面の実践者らと心を通わせ、歌うことを楽しむ。

#### 活動内容と子どもたちの動きの分析

1番を歌った後、とんぼのめがねの色とその理由を会話しながら2番、3番を歌った。3番を歌った後、実践者が「他の色のめがねを歌おう」と提案すると、子どもたちから「雲の中を飛んだからグレーのめがね」「ガラスを見たから透明のめがね」「怒っているから黒色めがね」「悲しい気持ちだから青色めがね（短調）」「虹の中を飛んだからレインボーのめがね」という声があがり全員で歌った。実践者が「トンボの本当の目の色は何色だろう？」と言うと、子どもたちが『赤とか～』『黄色』『緑』『紫とか』『黒？』『黒はない』『オレ、お尻なら見たことあるよ』と口々に意見を延べ、今度良く見てみようと言って次の活動に移行した。

## （２）即時反応 ステップ「散歩」

主な内容：歩く（前進）—四分音符、二分音符 / 後退—二分音符 /  
静止—休止

リトミック的要素：音の強弱、音質、時価、リズム性、休止、メロディー<sup>5</sup>

主な動き：音楽をよく聴き、体全体をコントロールする。元気よく前に向かって歩く。静かにそっと歩く。ゆっくり後ろ向きで歩く。

## 活動内容と子どもたちの動きの分析

実践者がiPadで海・波の動画を見せると子どもたちは笑顔になり、『海知ってる！あの、クジラとか、大きな黒マグロとかいる！』『まっこうクジラもいるし、ダイオウイカもいる！』と発言があり、イメージを膨らませている様子だった。実践者が「お散歩の後、みんなでここに海を作ります」と伝え、と、『やったー！』『よっしゃー！』と声があがり活動が始まった。

### ①歩く（前進）：四分音符

- ・床を蹴り上げ膝を直角に高く上げながら歩く。
- ・足の裏全体で床をとらえて歩く。
- ・腕を大きく振り、肘を振ることで拍をとる。
- ・仲間との間隔を適度にあげて動く。

### ②静止

- ・片足にしっかりと体重を乗せ、バランスをとって静止する。
- ・肩幅より広く足を広げ、動きを止める。
- ・再度歩き出す準備をしながら、集中して耳を澄ませる。
- ・周りを見て、友達が静止している様子を確認する。

### ③後退：二分音符

- ・歩幅を大きくゆっくりと歩く。
- ・歩幅を狭く、一歩ずつ足で後ろの安全を確認しながら歩く。
- ・自分自身が半回転し、前進で進んでいた方向へ後退する。
- ・横や後ろを良く見てぶつからないように確認する。
- ・腰を曲げた姿勢でお尻を後ろに出すようにして後退する。

## ④静かに歩く（大きな犬が寝ている）：二分音符（短調）

- ・音を立てないように、つま先を下に向けそっと足を運んでいく。
- ・抜き足、差し足、忍び足で進む。
- ・肩をすぼめながら体を小さくして歩く。
- ・口に両手を当て、背中を丸めて歩く。
- ・腕を前後に構え、背中を丸めて小走りする。
- ・両腕を横に開き、音を立てないように歩く。
- ・太腿を大きく引き上げ、体を前後に揺らしながら歩く。
- ・友達と2人で手をつなぎ支え合うようにして歩く。

## ⑤再び歩く（前進）：四分音符

- ・解放されたように飛び跳ねながら歩く。
- ・『きゃあ』『あはは』と歓声があがる。
- ・スキップをする。

## ⑥大きく歩く：二分音符（低音・長調）

- ・空中で足を動かしながら、ゆっくりと足をおろす。
- ・上半身を前後に揺らしながら、全身の動作を大きくする。
- ・床に手をつき、手足を大きく使い開きながら歩く。

## （3）表現活動「海」

主な内容：わらべうた「こまんか」の歌に合わせて波を模倣した動きをする。

歌の強弱に合わせて動きの大きさを変化させる。

リトミック的要素：音の強弱、時価、メロディー<sup>6</sup>

主な動き：1人で、下向きにした指を小さく横に振る。下向きにした手を横に振る。下向きにした腕と体を横に大きく振る。両腕を左右に振り上げ、体全体を使って大きくジャンプをする。

2人で向かい合い両手をつなぎ動きを創作する。

5人程度のグループで動きを創作する。

## 活動内容と子どもたちの動きの分析

## 【1人で】

①「こまんか」の歌に合わせ、座った状態で波を表現する。

〈小さい波〉両手の人差し指を下に向け左右に動かす。

- ・実践者を良く見て集中して模倣する。
- ・実践者の体の揺れを感じ取り、同じように自然に揺れる。

〈もっと小さい波〉両手の小指を下に向け左右に動かす。

- ・背中を丸め顔の前に両手の小指を出して、左右に動かす。
- ・座ったまま腰を小さく横に揺らす。

〈少し大きい波〉手を広げて下に向け左右に動かす。

- ・手首を曲げて動きをつける。
- ・手の動きと一緒に頭も横に動かす。

〈大きい波〉腕全体を下に向け左右に動かす。

- ・腕を大きく左右にねじりながら動かす。
- ・腕の動きに合わせて頭や腰を動かす。

## ②自由隊形で立ち、体全体を使って波を表現する。

〈もっと大きい波〉

- ・歌が始まる前から腕を高く上げて待つ。
- ・腕を脱力させた状態で、力強く左右に振る。
- ・両足に体重移動をしながら腕を振る。
- ・膝や腰を上下に動かす。
- ・その場で回りながら腕を振る。

## ③自由表現。実践者から子どもたちへ「もっと大きくするにはどうすればいいかな？」と問いかける。

〈一番大きい波〉

- ・ジャンプをしながら大きく腕を振る。
- ・できるだけ高くジャンプをしようと膝を使う。
- ・手のひらを広げ、5本の指を大きく開く。
- ・両腕を大きく回す。
- ・両腕をねじり上げる。
- ・走り出す。

## 【2人で】2人組で向かい合って両手をつなぐ。

すぐに2人組になる子どもや、希望する友達と2人組になれず下を向いてし

もう子ども、あちこち歩きながら相手を探す子どもなどがある。

〈小さい波〉

- ・両手をつなぎ向かい合い、腕を小さく左右に揺らす。
- ・両手をつないだまま体全体を小さく左右に揺らす。

〈大きい波〉

- ・2人で呼吸を合わせながら、腕を動かす方向を同じにする。
- ・バランスをとりながら重心をかけていない方の足を上げる。
- ・左右交互に振り上げている手の方向に顔を向ける。

〈もっと大きい波〉

- ・両手をつないだまま飛び跳ねる。
- ・両腕の動きにねじりを加える。
- ・膝を深く曲げ、手を高くあげるためのエネルギーをためる。

【グループで】グループで動きの創作をする。

実践者が「5人くらいのグループを作ってください」と伝え、子どもたちは移動しながら人数を数え、調整を始めた。

①どのように「波」を作るか相談する。

- ・座ったり立ったりしながら、『どうする』『こうやって』『こうだよ』『できた』と発言しながら動き相談をする。
- ・輪になり手をつなぎ、腕を振りながらジャンプをして表現する。
- ・輪になり手をつなぎ、横に手を引き合う。
- ・一列になり手をつなぎ、ジャンプをしながらつないだ手を大きく上下に振る。
- ・他のグループを見ながら動く。
- ・輪になり手をつなぎ、前後、左右に腕を振りながら動きやすさを互いに確認し動きを合わせていく。

②ピアノの伴奏に合わせて、グループで「波」を表現する。

〈小さい波〉

- ・輪になって手をつなぎ、背中を丸め、頭を垂れて、前後に小さく腕を振る。
- ・他のグループを見渡し確認をする。

〈大きい波〉

- ・手をつなぎ、輪をくずさないようにしながら大きく腕を振る。
- ・みんなでジャンプをしながら横に移動する。
- ・輪のまま手を離さず横に加速して回る。
- ・輪の中の1ヶ所の手が離れ、列になったまま回り、しっかり手を握る子どもや飛ばされそうになる子どもがいる。

実践者が「発表会をしますか？」と提案すると、子どもたちは拍手とバンザイをして『発表会やる！』と歓声をあげる。

③ 〈小さい波〉と〈大きい波〉をつなげて、発表し合う。

● 子どもたちの創作表現

・Aグループ（男児4人）

準備：4人で手をつなぎ円の中心を向く。

小さい波：つないだ手を左右に振り合う。それぞれが円の内側外側へと前後の動きを繰り返す。

大きい波：手をつないだまま腕を前後に振り、力加減を確認しながら手を引き合い、徐々に強くしていく。最後は引く力が強い子どもの方向に全員が引き寄せられる。

・Bグループ（男児5人）

準備：5人で手をつなぎ小さな円をつくる。

小さい波：歩幅を小さくし、右方向に小さく回る。仲間同士で様子を見ながらゆっくり横に歩く。

大きい波：ギャロップのようなジャンプをしながら、高低差をつけて右回りに回転する。

・Cグループ（女児3人 男児1人）

準備：4人で手を取り合いつなぎ方の確認をし、円の中心を向く。

小さい波：うつむいた状態で小さく腕を左右に振る子どもや腰を小さく揺らす子どもなどさまざまな表現をする。

大きい波：一人が加速し、途中で一か所手が離れ大きく回り始める。他の一人  
が加速を止めるようにしてその場に留まり、留まった子どもを中心  
にコンパスで円を描くような状態で回る。

・D グループ（女児3人 男児2人）

準備：5人の肩がふれあうくらい体を寄せた状態で円になる。

小さい波：手を円の中心に入れ、手先だけで小さな波をつくる。ますます円の  
中央に寄ろうとする。

大きい波：始めはそれぞれがエネルギーを違う方向に向け、左右前後に引っ張  
られる様子が見られたが、互いの目を見ながら広がり、1人が腰を  
低くして左回りに加速する。

・E グループ（女児5人）

準備：5人で頭を下げ背中をまるめ肩を寄せ合い円になる。

小さい波：手をつなぎ動かすタイミングと小さく前後に振る加減を合わせてい  
る。

大きな波：手を離さずジャンプしながら広がり、両足で強く床を蹴り互いに高  
く跳び合う。しっかりしゃがみ込んだ姿勢から真上に飛び跳ね、高  
い位置で両膝を体の方に引き寄せる。

【全員で】

全員で輪になり、グループごとの表現が異なったところや、楽しそうに見え  
たところなどを確認し、模倣した。

（4）表現活動「船」

主な内容：2人組で船を模倣した動きをする。わらべうた「おふねがぎっちら  
こ」や、ピアノの即興演奏をよく聴き、動きを変化させる。

リトミック的要素：音の強弱、音質、時価、拍子、リズム性、メロディー、  
フレージング<sup>7</sup>

主な動き：2人組で向かい合った状態または背中合わせの状態、腰を曲げて  
前後に揺れる。（大きく・小さく・速く・遅くなど）

・「おふねがぎっちらこ」（2分の2拍子の動き）

・ピアノ伴奏（8分の6拍子の動き）

## 活動内容と子どもたちの動きの分析

### 【向かい合った状態で】

2人組で向かい合って座り両手をつなぎ、わらべうた「おふねがぎっちらこ」に合わせて前後に揺れる。途中、音楽がわらべうたからピアノ伴奏に変わると、子どもたちから『嵐になって！どんどん』『船が！』とリクエストがあった。

#### 〈波に揺れる船〉

- ・両手を離さず腰を曲げて前後に体を動かし合う。
- ・膝を曲げた状態で座り、腕の力で相手を引き上げる。

#### 〈小さい波に揺れる船〉

- ・握っている両手を小さく上下に動かす。
- ・相手の顔を見ながら握っている両手を少し引き合う。
- ・他の船の動きを見回す。

#### 〈大きい波に揺れる船〉

- ・握っている両手を素早く引き合う。
- ・引き合うタイミングが合わず、両手をつないだまま横に倒れる。
- ・片手をつなぎ、もう片方の手を回すようにして激しさを表現する。
- ・背中が床に着くまで反らせる。

### 【背中合わせの状態で】

2人組で背中合わせに座り相手と腕を組み合い、腰を曲げて前後に揺れる。途中で、子どもたちから『おしくらまんじゅう』『トレーニング』という声があがった。

- ・音楽が鳴るまで、背中に相手の重みを感じ、それぞれ試しに動き始める。  
笑顔で『うは』『ひょひょ』『ほっ』と声が出る。

#### 〈波に揺れる船〉

- ・相手の背の上に体重を乗せ合う。
- ・子どもたちは、両足を伸ばす、軽く膝を曲げる、あぐらをかく等さまざな状態で船を作る。
- ・脚が床から離れる程相手に体重を乗せる。

#### 〈大きい波に揺れる船〉ピアノ伴奏

- ・背中合わせで素早く押し合う。
- ・深く前傾し合い、音楽に合うように前後に揺れる。

- ・体を反り、相手の背中の上に全体重を乗せる。
- ・バランスが崩れ、脚をあげた状態で横に倒れる。
- ・音楽終了後も床に両手をつき背中を押し合い、余韻を楽しむ。

#### （５）スカーフを使った表現活動「海」

主な内容：スカーフを使用し、波や海のうねりを表現する。わらべうた「こまんか」に合わせた動きや、ピアノの即興演奏をよく聴き、動きを変化させる。

リトミック的要素：音の高低、音の強弱、時価、拍子、リズム性、  
フレージング<sup>8</sup>

主な動き：わらべうた「こまんか」に合わせてスカーフを左右に揺らす。

（２分の２拍子の動き）

スカーフを片手に持ち、縦に４拍振り、上に大きく投げ、落ちてきたスカーフを受け止める。（４分の４拍子の動き）

#### 活動内容と子どもたちの動きの分析

① リトミックスカーフを使用し、「こまんか」（（３）表現活動「海」）で行なった動きを基に波を表現する。

〈小さい波〉

- ・スカーフをよく見ながら左右に振る。
- ・歌に合うようにスカーフをなびかせる。

〈大きい波〉

- ・左右の足に体重移動しながら腕を伸ばしてスカーフを左右に振る。
- ・頭の上でスカーフを大きく回す。

〈もっと大きい波〉

- ・歌が始まる前から両足を広げスカーフを振り上げるためのエネルギーをためる。
- ・ジャンプをしながらスカーフを振り上げる。
- ・スカーフで下向きの弧を描き、続けて頭の上で上向きの弧を描く。

② １人でスカーフを片手に持ち、縦に４拍振り、上に大きく投げ、落ちてきたスカーフを受け止める。

- ・音楽に合わせてタイミングよく投げ上げる。

- ・ タイミングよく投げることに苦戦する。
- ・ 4拍目で膝を深く曲げ、投げる準備をする。

③ 2人組で向かい合いスカーフを片手に持ち、縦に4拍振り、斜め上に投げ合いスカーフを交換する。

- ・ 全体的に投げるタイミングを合わせていく。
- ・ スカーフを交換する相手の顔を見る。
- ・ スカーフを投げ、ジャンプして相手のスカーフを受け取る。
- ・ 足を前後に開き、相手にスカーフが届くよう前傾姿勢になる。
- ・ 相手のスカーフをキャッチしようと、4拍数え終わる前にスカーフを投げ上げる。
- ・ タイミングを合わせるために、相手に声をかける。
- ・ 相手とスカーフの交換ができたことを飛び跳ねて喜ぶ。

活動はその後、各々がスカーフを持った即時反応をして終了した。5歳児は無駄な動きや過剰な動きが少なくなり、より基本的な動きが上手になり、友達と共通のイメージをもって遊ぶことができるようになる頃である。<sup>9</sup> 子どもたちはスカーフを上下に振りながら跳ねるようにして歩いたり、スカーフを広げてかぶり透けて見える色の世界を楽しみながらゆっくり歩いたり、音に合わせて自由に振り回したりしながら、音楽と表現を楽しんでいた。

## 7. 考察

### (1) 導入 歌「とんぼのめがね」

事前に担任の先生に「普段の保育で歌っている歌」を伺ったところ、この「とんぼのめがね」との返答をいただいた。子どもたちは自信を持って歌い始め、とんぼのめがねの色とその理由を実践者と会話をしながら3番まで歌った。実践者が他の色のめがねを歌おうと提案すると、子どもたちはイメージを膨らませ次々と発言し、友達の発言中にはそれぞれ耳を傾け、納得している様子や共感している様子、自分の意見を述べる様子を見せるなど、言葉を介した相互的な関わりが見られた。また、実践者の「トンボの本当の目の色は何色だろう？」という質問に対しては、これまで子どもたちが自然と関わってきた体験が生かされる発言や、探求心につながる姿勢が見られた。

## （２）即時反応 ステップ「散歩」

実践者が海の映像を見せると、海の生き物に詳しい子どもが発言し、クラス全体にイメージが広がっている様子だった。音楽に合わせて歩く際には、仲間との間隔が自然と適度にあいていたり、時々周りを見渡し、他の人がどのような動きをしているか確認をしたり、怖い雰囲気音楽の時には友達と自然と手を取り合ったりするなど、相互的な動きや学び合いの様子が見られた。また、静止の際には、友達がどのような姿で静止しているのか確認すると同時に、再度音楽が流れて動き出すタイミングを予測するようにしながら、聞くことに集中している様子であった。更に、「大きな犬を起こさないように」そっと歩く音楽の後に明るい音楽に変わった時には、解放されたように歓声があがったり、跳ねるようにして歩いている様子から、しっかりと想像を膨らませて活動していることがわかる。

## （３）表現活動「海」

座った状態で指を動かし、わらべうた「こまんか」を歌う際には、実践者の細かな指の動きの違いをよく見て模倣し、音楽を感じ取ることで実践者と同じ体の揺れが生まれていた。表現する波を次第に大きくしていくと、子どもから「立つ」という発言があり、意欲的に表現しようとしていることがわかった。

２人組で波を表現する時には特に事前の打ち合わせ等はなく、子ども同士で動きながらお互いに表現方法を探り合っており、膝や腕、目線などそれぞれの組に違った動きが見られた。更に５人程度のグループになると、それぞれがジャンプをする、全員で加速して回るなど、グループごとの表現方法の違いは大きくなった。

実践者が発表会を提案すると、バンザイをして喜んだ様子や、「次発表したい！」と自ら手を挙げた様子からは、仲間との表現を楽しんでいることが伝わる。発表は全員が興味を持って見ており、迫力のある表現に歓声や拍手が生まれたが、他のグループの表現を真似るグループはなく、それぞれがオリジナリティーを持って表現しようとする意志が感じられた。

発表後には全員で輪になり、グループごとの表現が異なったところや、楽しそうに見えたところなどを模倣した。友達と一緒に表現することを楽しむ中で、それぞれの感性と表現が異なることに気付き、互いに認め合う姿が見られた。

#### （４）表現活動「船」

ここでもやはり、子ども同士が動きながらお互いに探り合ってコミュニケーションをとりながら動きを生み出している様子が見られた。向かい合った姿勢で波に揺れる船の動きを表現する際には、背中が床に着くまで反らせ動きの幅の大きさで表現をするグループや、つないだ手を引き合う速さを変えることで船の揺れ方を表現するグループ、片手をつなぎ離れている方の手の動きで揺れを表現するグループがあるなど、それぞれに違う表現が生まれていた。また、腕の力で相手を自分の上に引き上げようとして、動きの意思表示をする姿も見られた。

背中合わせの時には、これまでの4歳児、3歳児の活動の際と同じように、子どもたちは背中に相手の存在や温もりを感じることを楽しんでいる様子で、音楽が流れる前から動き出していた。波に揺れる船を表現する際には、相手の背の上に体重を乗せ、脚が床から離れるほど相手に体重を預ける姿があり、相手を信用している様子が伺えた。音楽が止まった後にも、背中中の感覚を楽しむようにして、しばらく止まらずに揺れている様子が散見された。

#### （５）スカーフを使った表現活動「海」

（３）「こまんか」での動きを基に、スカーフを使用して波を表現した。スカーフはカラフルなシフォン素材でできており柔らかな動きをするため、子どもたちの想像力を膨らませ、表現の幅を広げることが可能である。子どもたちは、左右の足に重心を移動させる、頭の上まで腕を動かしスカーフを回すなど、全身を使い、穏やかになびくスカーフの動きを楽しんでいた。〈もっと大きい波〉を表現する際には、ジャンプを加える、手を上に伸ばし高いところでスカーフをなびかせるなど、表現をするための動きに更なる工夫が見られた。

スカーフを投げ上げて波を表現する際には、音楽に合わせてタイミングよく投げるために、その前の拍の準備（アナクルーシス）が大切である。スカーフは投げ上げる際にエネルギーを必要とするため、子どもたちは自然と膝を曲げ、腰を落としてから上に投げていた。

２人組でスカーフを投げ合い交換する際には、更に音楽に合わせ、相手と同じタイミングで投げ合うことや、相手が取りやすいように斜め上に投げる必要がある。スカーフが思うように飛ばないため足を前後に開き、相手にスカーフが届くよう前傾姿勢になる、相手の顔を見ながらコミュニケーションをとる、全身をコントロールして投げ上げるなどの様子が見られた。また、自分のスカ

ーフを投げ上げた後すぐに相手のスカーフを受け取るため、複数の動きを中断することなく連続的に行なうこと<sup>10</sup>ができていた。

今回の研究では5歳児を対象にし、これまでの3、4歳児の活動と同じ動きをする活動に加え、友達との関係の中で生まれる複合的な動きを意識した活動計画を立て、リトミック活動を行なった。活動中は言葉での伝え合いが多くみられたため、文中には子どもたちの発言もなるべく記載した。グループで音楽に合わせた「波」を表現する際には、『どうする』『こうやって』『こうだよ』と相談し合う姿や、手をつないだまま各々の思いを動きにしながら互いに調節し合う姿からは思考力の芽生えにつながる様子が見られた。2人で背中合わせになり船の動きを表現する際には、背中に相手の重みを感じ取り合い、ゆったりとした音楽にタイミングを合わせる姿や、音楽の強さに合わせて前後に深く曲げ合う姿が見られ、友達との関係の中で相互に作用し合い、さまざまな動きが作られる過程を確認することができた。

また、本活動では全体的に友達との引き合い、押し合いなどのシーンで力の加減を試しているような様子が多く見られた。5人程度のグループで波を表現する際に歌った「こまんか」は、10秒程度のわらべうたである。その10秒間に強い引き合いや、つないだ手が離れるほど加速して力が加わることもあり、実践者たちを驚かせた。更に、向かい合わせに座った2人組が揺れる船を表現する際には、腕の力で相手を自分の胸の上まで引き上げようとする姿が見られ、背中合わせの姿勢で船を表現する際には、相手の背中に体重をかけすぎ、バランスが崩れて脚をあげた状態で横に倒れ笑い合っている様子が見られた。このような経験を重ねることで、子どもたちは力の加減を知り、やがては相手を感じて思う気持ちや優しさにつながっていくと言えるのではないだろうか。

本活動を行なった子どもたちは日頃から年長としての自覚を持ち、しっかりとルールを守ることができる社会性を持った子どもたちだと伺っている。その子どもたちが、今回の会場となった広い教室に入り裸足になると、その解放感を楽しむようにして力強く足音を立てながら走り始めた。その姿もまた自然な姿であろう。

リトミックは、ルールを守り、相手を思いやるなどの社会性へとつながる部分と、のびのびと自己を表現することが可能な部分の両方を併せ持つ。リトミックで音楽と共に体を動かすことを通して、生涯にわたって心身ともに健康的

に生きるための基盤を培うことが可能である。感じたこと、考えたことを自分なりに表現し、他者と共有することや人との関わり方を築くことは、子どもたちの自己肯定感を高め、しあわせな未来につながるのではないかと考える。

## 8. 終わりに

本稿では、さまざまな分野への好奇心が生まれ、社会性を身に付け、友達との関係の中で複雑な動きを楽しむことができる5歳児に焦点を当て動きの分析を行なった。今後は、歩く、走る、跳ぶなどの運動機能が発達し始め、動きの模倣を楽しむようになる2歳児に目を向け研究を深めていきたいと考える。

## 謝辞

本論文は、2022年度しあわせ研究費（研究テーマ：子どものリトミックを通しての表現活動に関する研究）の助成を受けたものです。

この研究を行なうにあたって、武蔵野大学附属幼稚園の先生方に研究の趣旨をご理解いただき、年長クラスの園児さんにご協力いただきました。

ここに深く御礼申し上げます。

## 引用・参考文献

- 
- <sup>1</sup> 文部科学省「幼保小の架け橋プログラムの実施に向けての手引き（初版）」
  - <sup>2</sup> 無藤隆編著『幼児期の終わりまでに育ってほしい10の姿』,東洋館出版社,2018年,p.42
  - <sup>3</sup> 同上書,p.49
  - <sup>4</sup> 同上書,p.57
  - <sup>5</sup> エミール・ジャック＝ダルクローズ著,板野平監修,山本昌男訳(2003)『リズムと音楽と教育』全音楽譜出版社,pp.185-186
  - <sup>6</sup> 同上書,pp.185-186
  - <sup>7</sup> 同上書,pp.185-186
  - <sup>8</sup> 同上書,pp.185-186
  - <sup>9</sup> 文部科学省「幼児期運動指針」
  - <sup>10</sup> 文部科学省「幼児期運動指針ガイドブック(9分3)」 p.15